

tomorrow

2011
03



巻頭

桜坂洋

魔法

瀬名秀明

ニュー吉田自転車

吉田戦車

平安デジヤブ——抱擁国家、日本の未来

前野隆司

ええ、あとづけの空論なのは承知ですが、それでも、AKBのことを話したいんです

本郷和人

1969 バブル世代に生まれて

堀田純司

生協の白石さんからのメッセージ

白石昌則

ギークの星

小宮政志

Pray for
Japan
FREE
for you

電子書籍「AIR」[エア]特別編集

トウモロコシ

巻頭

「逃げたほうがいいだろうか」

妻に聞いたら、

「戦争になったら文人は弾除けになるものだ。だからあなたは逃げてはいけない」

叱られました。

このところの電力不足でエアコンの動いていない部屋は肌寒く、空気はいくぶん澱んでいました。ネットに繋がったノートPCから、ustream番組の音声がたれ流しになっていました。

ここには、屋根があり、電気・ガス・水道があり、プライベートな空間がありました。わたしが立っているのは清潔で安全な

場所でした。

本棚が壊れるくらいに揺れたとはいえ、わたしの住む街は地面のひび割れも家屋の倒壊もなく、液状化現象もありませんでした。本日の放射線量も、ネットで知った限りではたいしたことがないようです。この文章を書いているいま、東京は、理性的な判断においては逃げる逃げないの瀬戸際ではありません。

地震が起きてから一週間、わたしの気持ちは弱くなっています。津波と地震の被害報告は日々刻々と膨れあがり、原発の状況も読めません。わたしたちは、自然と科学の両方を、人類が未だなんら制覇できていないと思い知りました。

たくさんの人々の苦境に対して、募金するくらいしかできない自分をわたしは無力だと感じていました。人々の心の活力源となるはずの小説も、多くの人と同時にその活力を必要として

いるときには、たいして有用なものではありません。未曾有の大震災の前になんの役にも立たない自分を認識するにつれ、安全な家に包まれているはずのわたしの感情のコップは、あふれそうになっていきました。

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分、そういう災害が、東北から関東にかけての地域で、発生しました。

「国難」という言葉を、戦後、わたしたちはずっと避けてきました。団結することにより、ひとりひとりが自分の頭で思考しなくなり、必敗の侵略戦争へ突入していった歴史がこの国にはあるためです。だからわたしたちは、常に個人の尺度でモノを考えるよう教育を受けました。全体主義の弊害を考えれば、それは、かならずしも悪いことではありません。

震災後、ガソリンや日常品の買い占めをする人が出ました。

そのせいで被災地に物資が届きにくくなっているという話も聞きました。それに対して、わたしはこう考えます。必要のないトイレットペーパーを買い占めたければ買い占めればいい、と。原発から逃げたければ逃げるのも自由です。誰も笑わないし、誰も責めません。それらはちつとも恥ずかしい行為ではありません。欲望も恐怖も、人間という存在とは切っても切れなものです。

避難所にいる人たちの不自由な生活、物資の不足、体の芯をじわじわと冷やしていく不安、生命を脅かす危機から逃げようにも逃げられない現実を、わたしたちは知っています。放射線の危険性も理解しています。しかしながら、遠方の地にいる他者の不自由や危険を理由に、本来自由に動ける個人が意思を曲げ、日本という国を覆う空気に従って機械的に行動を決定する

のはまちがっています。人はできることのうち、みずから行う意思のあることを選び取らなくてはいけません。人は、個としての目的を追求すべきであり、まったく別の人たちの、それぞれまったく異なる個々の幸せの総和が日本の幸せであるべきだからです。

だけれど、同時に、わたしたちは、被災されたかたのことを忘れません。必死で復旧にあたっているかたのことを忘れません。彼ら個人の大切な幸せが踏みにじられていることを忘れません。心のどこかにずっととどめています。

不安と孤独にまみれ、つらい時間を過ごされているかた、危機に敢然と立ち向かっているかた、あなたたちのことを忘れていない人間がこの世界にはたくさんいるのだと、どうか思いだしてください。わたしたちは皆ひとりですが、どこかで、確実に

に繋がっています。わたしたちのちいさな想いが集まり、あなたたちの勇気を燃やす風になることができたら、とてもうれしいです。

わたしは、生まれ育った足立区にいます。この地から、被災されたかたと復旧に従事するかたの無事を祈ります。

不運な災害によってめくられてしまった人類と日本の新しい歴史のページが、これから豊かなものになっていくことを願っています。

二〇一一年三月十七日、東京、足立区にて

桜坂洋

t o m o r r o w



A
I
R

目次——トウモロ——電子書籍「AIR「エア」」

巻頭……………3

桜坂洋

わたしたちがやろうとしたこと……………13

魔法……………19

瀬名秀明〓文 むらかわみちお〓画

ニューー吉田自転車……………139

吉田戦車

平安デジヤブ——抱擁国家、日本の未来……………171

前野隆司

ええ、あとづけの空論なのは承知ですが、

それでも、AKBのことを話したいんです……………243

本郷和人

1969 バブル世代に生まれて……………317

堀田純司

生協の白石さんからのメッセージ……………385

白石昌則

ギークの星……………388

小宮政志

アートディレクション || ナカノケン (アルフェイズ)

わたしたちがやろうとしたこと

今回の災害について、わたしたちになにができるだろうかと考えました。そのひとつとして電子書籍「AIRtwo」の収益のうち著者印税を寄付することにいたしました。

そしてもうひとつ、自分たちの職能で、なにか小さくてもよいかから今、困難にある日本社会に向けて貢献したいとも考えました。

今、日本中で多くの方々が、自分でできる支援を行っていらっしゃるのを、メディアや、あるいは身近な街頭で知りまします。「AIR「エア」」でも同じように、自分にできることをしたいと考えました。

この「トウモロ」为题した電子書籍は、こうした時期にコンテンツをお届けすることが、自分たちにできる貢献のひとつの形ではないかと考え、編集、製作を行ったものです。

厳しい時期だからこそ、娯楽も必要であるだろう。

電子書籍という届く範囲が限られたメディアですが、もしかすると電子であることに意味がある局面もあるかもしれない。そうした状況で、この書籍がどなたかの心に届くことがあればうれしく思います。

今の日本は現在、そして未来に、大きな不安を抱いて当然の状況です。

こうした時期、不安を抱えて暮らしている仲間たちに、少しでも前向きの気分になってもらえたら、こんなにありがたいことはないと思っています。

巻頭に収録した作品は瀬名秀明さんの『魔法』。瀬名さんは仙台在住であり今回の震災を直接、体験していらつしやいます。しかし通信が回復した後、直接の被災地でない地域にも多くの不安や心労があつたことを知られたそうです。この『魔法』は、そうした瀬名さんが、被災地から日本全国に向けて発信する作品です。

瀬名さんをはじめ各著者が、自分の作品を提供してくださつたことでこの本が成立しておりますが、この本に職能を提供した人はそれだけではありません。デザイナーのナカノケンさんが、ご自身の技能を提供してくださり、デザインとファイル製作を行つています。また同じようにフリー編集者の花田知子さ

んが、編集に参加しています。

そして、この一文があなたの目に触れているということは、さらに様々な方々のお力で、世に伝えられているはずです。

みなの方でよいメッセージを世の中に発信できたら幸いです。

震災の日以来、毎日「明日は今日より、いい日であってくれますように」と希望しながら眠りについていました。

しかし震災を受け止める東北の人々の姿を見て「そうじゃないんだ、明日を今日より、いい日にするんだ」と、気づかされました。

不安を抱えて暮らす方々。今も懸命に支援活動を行っている方々。そしてなによりも大きな災害を直接に受け止められた

方々。すべての人々の明日が、今日よりもよい日になるように。少しでもそんな気分になってももらえるように。

そのために自分でできることのひとつとして「AiR」
「エア」では言葉を発します。ささやかながら娯楽を、このよう
にお届けします。

「AiR」編集人 堀田純司



魔

瀬名秀明

むらかわみちお=画

法



瀬名秀明——プロフィール

1968年、静岡県生まれ。作家。仙台市在住。1995年『パラサイト・イヴ』（角川書店）で第2回日本ホラー小説大賞を受賞しデビュー。『BRAIN VALLEY』（角川書店、1997年）では第19回日本SF大賞受賞。『デカルトの密室』（新潮社、2005年）など、新時代を開拓する魅力的なテーマを持つ作品を発表し、また『ロボット21世紀』（文春新書、2001年）などノンフィクション領域でも活躍する。2011年3月には、伊集院静氏との対談、電子書籍『杜の輪舞曲「ロンド」』を、被災地よりのコンテンツ発信として刊行した。

瀬名秀明の博物館

<http://www.senahideaki.com/>

ときは一九世紀半ば、手品師になりたいと願うひとりの若者が、大魔術師アラカザールにその極意を尋ねた。するとアラカザールは自慢の髭を撫でながらいった。

「来週までにトランプの選ばせ方を十種類考えてこい」

「ですが、アラカザール師」と若者は少しむくれ気味にいった。「どうやって相手のカードを見つけるか、私はまだ知らないのです」

「おしを信じよ」と大魔術師アラカザールは諭した。「もし秘密の方法を教えたら、おまえさんはきつとひどくがっかりするだろう。そのくらいカードを見つける方法は単純で、おまえさ

んでもほんの一分で憶えることができる。だから自分はみんなより賢いんじゃないかと勘違いしてしまいうくらいじゃ。さあ、まずはわしのいうことを聞け、秘密を知らないままではなんと味わい深く、すばらしいことか。それこそが結局、われら魔術師が古くから人々に与え続けてきた「驚き」という体験なんじゃよ。よもやおまえさん、そのことを忘れたわけじゃあるまいな？」

授業を終えてカードを片づけていたところへ声をかけられ、佐倉理央りおは顔を上げた。受講生の本多洋平が片手を小さく上げて挨拶しながら立っていた。

「アラカザールの教えについて何か？」

と、理央は片づけを進めながら笑みを返す。本多は肩を竦め

た。

「まったく、途中まで実在の人物だと信じちゃいましたよ。ぼくは今回初めて習うんだから、そういう素人もいるって手加減してくれなきゃ」

大魔術師アラカザールとは子ども向けのマジック教本に登場する有名なキャラクターだが、彼の言葉は子どもよりむしろ世間に馴れ始めたアマチュアマジシャンにこそ深みを持って受け止められる教訓に満ちており、いまなお世界中のマジック愛好家から師と仰がれている憎めない剽軽者だ。三年前から理央はこのカルチャースクールの授業を先輩マジシャンから引き継いでいるが、毎年一度だけこのアラカザールの教えを引用し、受講生に宿題を課す。この教えは効果てきめん観面の魔法を教室にもたらしてくれる。その次から出席者の数が半減するのだ。実際、今

回も宿題のことを話したとき、ほとんどの受講生が戸惑いや失望の表情を浮かべるのがわかった。理央は知らぬふりをして話を押し通したものの、前回までのレッスンでは終了後に理央のもとへ集まりサインを所望していた人たちが、今回は無言で帰り支度をそそくさと済ませ、退室していった。見渡すと教室に残っているのは理央たちふたりだけになっていた。

「先生って呼ぶのはやめてよ」

「いや、ここでは理央先生ですよ。ぼくのほうが教わっているんですから」

「十年前に聞いてみたかった台詞」

片づけを終えて、ふたりで教室を出る。レッスン初日後の懇親会で自己申告を受けるまで、迂闊にも本多が受講していることに気づかなかった。理央は学生のころから縁あって地元テレ

ビ局の週末の情報番組でテーブルマジックを披露しており、本多はそのとき同じ番組に出演していた学生アシスタントのひとりだった。本多の担当はスポーツニュースで、理央より学年はひとつ下だったが、気が合って休憩時間によく雑談していたのである。しかし番組の改編と共に自然と疎遠になっていったのだ。七年ぶりに再会した本多は頭髪が少し薄れた妻子持ちの会社員になっていた。

本多は左利きで、レッスンではカードの取り扱いに難儀していた。スポーツで有利に立てる左利きは、カードマジックを演ずる場合、圧倒的に不利なのである。多くの人は気づかないが、トランプの絵柄は右利き用に特化されているためだ。左上に位置するマークや数字は、右利きの人間が両手の中でトランプを扇状に開いたとき見えやすいようにできている。左利きの

人が開くとカードの端は真っ白になってしまい、カードをすばやく確認することが難しい。

それでもなんとか自分の利き手と折り合いをつけて、本多はマジックを楽しんでいる様子だった。

「抽選が当たってラッキーだったな。この講座、倍率が高いから」

「どうしてマジックを？」

「とくに理由があるわけじゃないです。まあ、あのころから一度やってみたかったのかな。スタジオで見えていつも惚れぼれしていたから」

「ありがとう」

「ええ——それより」

本多は躊躇うような口調になった。カルチャーセンターの口

ビーに自分たちしかいないことを確かめる。

「かけい 笥さんのこと、もう知っていますか」

理央は立ち止まり、相手の顔を見つめた。

笥伊知郎い ちろうのことだと気づくまで、少し時間がかかった。

その空白の数秒は理央にとって意外だった。笥という名字の人を何人も知っているわけではなかったのだから。七年の歳月でその名はいつの間にかカケイという音の配列になっていたのだった。

「マジック協会フ ィ国際連合ズ ム以来ですよね」

「何があったの」

「そうか、理央さん、まだ知らないのか」

本多の呼びかけは理央さんに戻っていた。学生るときに深く考えもせずテレビに出て以来、理央は本名のままマジシャンの

活動を続けてきた。笥もあのころは同じく学生であり、また修士課程を終えてからは上京してアルバイトをしながら練習を続ける一介のアマチュアであり、むろん大会に出場するときも本名だった。

FISM^{フィズム}は世界中のマジシヤンの登竜門として知られる大会だ。笥は二五歳で出場し、マニピュレーション部門で日本初の一位を獲得した。今日まで日本人がFISMでグランプリを獲得したことはない。もうひとり部門一位の日本人が最近になって現れたが、笥の記録が日本人初の快挙であったことはいまも変わらない。

笥は日本のマジック業界を沸き立たせたその翌日、欧州から帰国する途上で事件に巻き込まれた。空港でファンと称する若者が大きな花束を持って近づいてきた。笥はいつもの笑顔で若

者に応じ、求められるままにサインをして、花束を受け取り、記念写真に収まった。そして若者がその場から立ち去った直後、花束の中で爆弾が作動した。筧に嫉妬したアマチュアの凶行だった。彼の両腕は千切り飛ばされ、腕の欠片と共にすぐさま病院へ運ばれたが意識不明の重体となった。医師たちは腕をつなげようと懸命な努力をしたという。しかし理央たちが現地に到着したとき、最初の手術を終えた彼は姿を消していた。

「一位になったときには、番組にも出てもらおうなんて話していました」

本多の言葉で思い出した。事件が起こるほんの六時間前、理央たちはそんなことを確かに話して、この日本の隅っこで浮かれていた。

「そうね、そうだった」

そして本多はいった。

「ぼくも昨夜、テレビで知りました。週末に笥さんの特番があるんです。両腕を義肢にしたサイボーグマジシヤンのデビューだと」

その週末はバーの当番が入っていた。

東北新幹線で東京から一時間四〇分、この地方都市には駅の東側に一軒だけ、マジックを客に見せるバーがある。理央は当時、大学の奇術部に所属しながらここでアルバイトをして、ときおりマジックの手技を習っていた。地方在住のプロマジシャンは多くはない。急場のしのぎに代役を務めることもあった。それがテレビディレクターの目に留まるきっかけとなった。

客は酒を飲んでおり、マジシヤンの演技に集中するわけでは

ない。ざわついた店内で、相手の機嫌を損ねることなく、ときには理不尽な要求をうまくかわしながら、ひとときの不思議を楽しんでもらう。それがバーマジックに求められることだ。その夜も理央はふだんのようにカードやコインを使ったクローズアップマジックの組み合わせで役目を果たした。

ごく少数ではあるが理央の出番を目当てにバーへ通ってくれ、常連もいる。いまも理央はローカル番組や地域イベントに出演することがあるので、顔を憶えてくれる人もいる。しかしその夜は何度かとちって、逆に常連から慰められる始末だった。

どんな業種でも同じだろうが、マジックで生計を立てることは難しい。バーでの報酬は十年前からほとんど上がらず、理央もふだんは科学技術文書の翻訳アルバイトで食べている。曲がりなりにもこうしてマジックを続けていられるのは、決して腕

前が優れているからではない。そのことは理央自身がいちばんよく知っている。大学の奇術部で笥と同級だったのだ。笥の演技を見れば誰でも打ちのめされる。

むろん練習を重ね、オリジナルのアイデアも絞ってきたが、独学には限界がある。理央はこれまで一度だけ国内の競技会で準優勝を得たことはあるが、それ以外によい成績をほとんど残せなかった。だから自分がマジシャンでいられるのは技術のためではない、男好きのする顔のためだとよくわかっていた。そして理央は、自分が笑みをつくるたびに、男性たちが態度を変えることが厭でならなかった。マジックは芸能社会の一部であるから、昔ながらの慣習も残っている。パトロンになろうと話を打ちかけてくれた人たちもいたが、いつも土壇場で疑心暗鬼に陥って逃げ出すのは理央のほうだった。

自分の仕事を終えてバーを出たときには午前二時を過ぎていた。立夏を過ぎて夜でもひとりで歩ける季節になっていた。タクシーを使わないのは財政的な理由だった。変質者に追尾されたことも何度かあるが、わずかな収入と秤にかければ三一歳の独り身にとって運動を選択する方がはるかにいい。それに人いない夜更けの町は、世界の終末にも似た風情があるのだ。とくに曇り空にかかる月は薄ら寒くて気に入っていた。しかし今夜に限って月は細く、星々の瞬きさえ見て取れた。

徒歩二〇分の住宅地に建つ1DKの賃貸マンションへと向かう間、理央は携帯電話でブログやツイッターの書き込みを検索し、すでに世の中では笥の特番が大きな評判となっていることを知った。早足で家まで戻り、玄関で乱暴に靴を脱ぎ、衣服を着替えることもなく液晶テレビのスイッチを入れ、録画予約し

ておいたデータを呼び出した。バーの仕事から帰った夜は軽いつまみをつくり、赤ワインを飲むのが習慣だった。しかしその夜は冷蔵庫の前へ行くこともなく、化粧を落とすこともせず、理央はソファに前屈みの姿勢で座り、そのまま二時間の特番を再生した。

2

ハードディスクに記録されていたのは確かに笥伊知郎の姿だった。

スタジオで五名のゲストタレントが笥の登場を迎えた。サイボーグという言葉の番組的な意味合いは携帯電話での検索で理解していたが、笥が画面に初めて姿を現したとき、強烈な違和

感と懐かしさが同時に襲ってきて、理央は息が詰まりそうになった。

筧もまた七年の歳月を経ていた——なで肩でひよろりとした印象だった彼は、全身に適度な筋肉をつけ、顔つきも引き締まり、眼力を備えていた。髪型は垢抜けたものに変わり、メツシユも入れていた。ファツシヨンに無頓着だったあのころの筧ではなかった。

燕尾服ではなく、彼はトラッドなスーツを着込んでいた——袖は短めで、大きなものを隠すには不向きであり、フェアネスを自然に演出していた。その姿で彼はスタジオに登場し、ビートの利いた楽曲に乗って演技を始めた。

FISMでも披露したカードとコインのマニピュレーションだった。誰もいないカジノで一攫千金を夢見る若者がカードを

恋人のように思いながらダンスを踊るというストーリー仕立て
で、空中から取り出すカードはすべてポーカーの役にちなんで
おり、演技が進むにつれてワンペアからツーペア、ストリート
にフラッシュ、フルハウスにフォーカードと、順に役が上がっ
てゆく。つまり同じカードを何度も再利用することはできな
い。取り出す順番を綿密に計算しなければならない。カードに
恋をする若者は彼女の声援を受けて一世一代の大博奕に挑む。
彼の指先から出現するカードは何度も役づくりに失敗し、手元
のチップは失われてゆく。このあたりからカードだけでなく
チップや一メートル以上のパレットもマニピュレーションの対
象物となり、筭は複数の役柄を演じ分ける。そしてついに大逆
転が起こり、若者は勝利するが、それはひと気のないカジノで
見た儂い幻であったことが最後に明かされる。それでも若者と

カードの恋は本物なのだ。

カメラは笥の全身だけでなく、彼の両手を執拗に追い、頻繁にそのアップの映像を差し挟んだ。途中から笥がスーツとシャツの袖を肘のあたりまでまくり上げたところで、理央にも事の重大さがわかった。スタジオの中にもどよめきが走るのをカメラが捉えていた。理央もその瞬間にはスタジオゲストたちと同じ表情をしていた。笥の両腕は確かに義肢であった。

笥の両腕は人間のものではなかった。肌色に着色された合成樹脂が笥の両腕を形成していた。彼の指の関節に刻まれた皺は本物ではなく、爪は人工の色彩に塗られていた。その指先がカードを操っているのだ。

理央は演技の半ばからほとんど瞬きさえ忘れて、液晶モニターに見入っていた。その指先は途切れることなく動いている。演

ずる筈の笑顔はあのころとまったく同じ眩しさだった。片側に見える笑窪もそのままだった。しかし袖の先でカードを操っていったいどうやって動かしているのか？ 機械の指先であれほどカードを繊細に操れるものなのか？ それとも義肢そのものが何かのトリックだというのだろうか？

マジックにはいくつかの種類がある。大舞台上で美女の身体を切断したり、ライオンを出現させたりするショーはイリユージョンと呼ばれる。逆にマジシャンが観客とテーブルを挟んで対面し、手元をじっくり見せながらカードやコインを捌いてゆくのはクロースアップという。そして指先で四つのボールを操ったり、ステージで何羽もの鳩を出したりするマジックはスライト・オブ・ハンド——スライハンドと呼ばれる。日本

語にするならまさしく手品、手先の早業という意味だ。かつては石田天海てんかいや島田晴夫といったスライハンドの名手たちの活躍によつて、マジックといえればスライハンドの時代もあつた。しかしその後はイリユージョン、そしてクロースアップマジックへと流行は移り変わっており、むしろスライハンドは古くさい印象さえついてまわっている。

寛がこの舞台に選んだのは、FISMと同じスライハンドだった。ただ、同じ演技でも、義肢となればまったく話は変わってくる。いま演技をしているのは機械なのだ。

寛が最後のポーズを決めた後、スタジオ内の様子がロングショットで映った。ゲストタレントたちは呆気にとられ、数名は胸を押さえているのが見えた。あまりのことに息苦しさを感じているのだ。彼らは数秒間、拍手をすることさえ忘れてい

た。

やがて彼らは力の限り手を叩いた——しかしひとりの女優がその両手を見つめ、顔を強張らせるのがわかった。自分の両手で拍手をすることが義肢を持つ者に対して賞賛の意を表すこととなるのかと、咄嗟に考えたに違いなかった。

演技を終えた筈が笑顔で彼らのもとへ歩み寄ってゆく。彼が大きく感じられた。身長は一七五センチであつたはずだが、それよりずっと高く見えた。

ゲストタレントたちの目は彼の両手に注がれていた。カメラも彼の手へ寄ってゆき、それは視聴者の関心にぴたりと重なつていった。

「失礼ですが、見せてもらつてもいいでしょうか」
司会役の男性タレントがおずおずと切り出す。彼は上着を取

り、赤色のシャツをはだけ、少し躊躇ってから右側の肩だけを脱いだ。出演者たちは息を呑んだ。数時間前、テレビの前にいた数百万人の国民も同じように息を呑んだろう。

筧の肉体は肩の先で途切れていた。つるりと整形されたその表面に機械の関節が連結され、そこから見紛いような人工のアームが伸びていた。

「動かしてみましよう」

彼はまるで珍しい蝶をてのひらの中で見せる博物学者のように、脱いだ上着を人工の右腕で取り上げて見せた。アームの根元から細いコードが何本も伸び、胸の筋肉につながっているのがわかった。彼と同じく理央も工学を出ているからそれが何を意味するのか知っている。胸の筋電でアームを制御しているのだ。腕や手を動かすために私たちは神経活動を通じてさまざま

な筋肉を活用しているが、義肢を扱う場合はむしろ通常と異なる筋肉を訓練して、その動きを伝えた方が効率的な場合がある。筧の義肢は胸筋で大まかな動きを制御しつつ、人工知能の学習や機械的な姿勢制御なども重ね合わせてスムーズな動きを実現しているのだろう。しかしそれでもあれほど巧みなマニピュレーションができるとは驚きだった。音が、と司会者が呟いた。ええ、と筧は穏やかに頷いた。アクチュエータの音が聞こえるはずですよ、と。

「触ってみますか」

「いいんですか」

「もちろん。まずは握手からいかがですか」

司会者はおそるおそる手を差し出す。彼はその手を取り、ゆっくりと包み、静かに上下に動かした。出演者のひとりが尋

ねた。

「あの、私もいいですか？」

「こちらこそ」

そうして彼は出演者のひとりひとりに握手をしていった。スタジオ内によくやくほっとするような雰囲気になり、出演者たちが明るい笑顔を見せ始めた。理央は驚きながらその様子を見つめていた。巧みに計算された演出だった。

笥は再び衣服を整えていった。

「このような手を持っていますとどうしても怖がられてしまうものですが、機械の指先を持っていても魔法を——本当の魔法の驚きと歓びを生み出せることを、ぜひ皆さんに知っていただきたいのです——機械が得意なこととは何だと思えますか」

「正確な動き？」

「人間よりすばやい動き」

「飽きずに繰り返せる、とか」

「その通りです。センシング能力も優れていて、現代の機械工学なら麻雀で完璧に盲牌をしてみせる繊細な指先をつくることもできるでしょう。しかし私たちが感じる本当の魔法とは、そうした現代の技術を超えたところにあるのだと私は思うのです」

司会者が繰り返した。「魔法、ですか」

「ええ。どなたかボールペンをお持ちですか」

笥はそういってスタジオ内を見渡した。A Dの女性が駆け寄って三色ボールペンを手渡す。笥はざっと検分して満足し、テーブルの上に置いて出演者らに自由に確認させた。

「野球のバットをてのひらの上で直立させる遊びがあります

ね。得意な方はいらっしやいますか。何秒くらい保つてしよう」

ゲストの中に元野球選手のタレントがいた。彼は困ったという顔をしながら首を傾げ、数秒もできれば上等でしょうと答えた。笥はボールペンを差し出し、これをバットに見立てて実際にやってみてくださいと促した。男はてのひらの上に乗せてみたが、ほんの一瞬でさえびたりと停止させることはできなかつた。

「ふつうの手ならそれが当たり前ですよ。しかし私の義手には角度や加速度のセンサが埋め込まれています。ボールペンが倒れようとする、それを察知して、倒れる方向に向かって動くことができます。倒立振子しんしの原理というのですが、それをプログラムに組み込めばロボットの手は何時間でも棒を直立させる

ことが可能なのです。よくご覧ください」

笥は右のてのひらを前に差し出し、わずかに開いて伸ばした。その手がアップになったとき、理央は唐突に、かつての彼の指を思い出した。

笥は皆の眼前でおもむろにボールペンを人差し指の先に垂直に乗せ、そのまま添え手を放した。ゲストの息を呑む音が理央にも聞こえた。ボールペンはそのまま指先に直立したのだ。

「ペンの横を、そつと指先で押してください」

ゲストのひとりが笥のそばにやってきて、目を丸くしながらおずおずと指を差し出す。ボールペンの中央部へと指を近づけてゆく。その間もペンは動かない。ゲストの指先がそつとペンを横へ押ししたそのとき、笥は大きく右手を動かして、バランスを取った。ペンは落ちなかった。理央は口を開けたままそのさま

を見つめていた。スタジオ内のスタッツフたちにさえあまりの奇跡に動揺が走っているのがはつきりと伝わってきた。カメラが走り寄り、笥の指先を捉え続けた。マジックにありがちな不自然さは微塵も感じられない。よく見ればペンは直立不動ではなく、ほんのわずかに揺らいでいることがわかる。本当なのか？理央は身を乗り出して画面に見入った。これはマジックではなく本当にペンを立てているのだろうか？

笥はかけ声と共にペンを放り投げた。左手でそれをキャッチすると、今度はそのまま五本の指でペンを回し始めた。

理央は思い出したのだった。笥は学生のところ、いつもあの細く長い指で、インクの切れかかったボールペンを回していた。改造されていない安物のペンを。

ノーマルからソニックス、トリプルインファイニティ。理央が

知っている名称はそれくらいだったが、笥は次々と技を繰り出していった。ペンは笥の指の中で踊り続けた。最後にペンは高々と投げ上げられ、笥の義手がそれをつかんだ。

ゲストタレントたちは、すぐには言葉を発しなかった。女優のひとりが両手を口に当て、半ば畏怖の目で笥を見つめていた。

理央は混乱していた。これはマジックなのか？ 合成映像なのか？ それとも機械工学の勝利なのか？ いまおこなわれたことをどのような心持ちで見ればよいのか、まったく理解できなくなっていた。押しつけがましい感動とはかけ離れている。ゲストタレントたちの表情も先ほどまでとは大きく変わりつつあった。

「すみません、失礼ですが……、もう一度触ってもいいでしょ

うか」

寛は静かに、司会役の男性タレントへ両手を差し出した。

画面はそこで切り替わり、寛の生い立ちがビデオ映像で語られていった。そこには理央の知らない寛の姿もあった。だが理央の知っている彼の姿もあった——自分の知っている写真が大映しになり、理央は動揺した。その画面の端には奇術部の一員だった理央自身が入り込んでいた。他の仲間と同じくその顔はぼかされており、そのことが不意打ちのように理央の心を抉った。その写真が撮影されたとき、ふたりは恋人同士だった。

「私は事故の後もマジシヤンの道を進もうと決めたのです。この手で本当の魔法マジックを多くの人に伝えたいと思いました。リハビリを続ける中で気づきました。人間の手と腕にしかできないことはあります。機械の手と腕にしかできないこともあります。

しかしこの世界に本当の魔法をかけるには、人間か機械かといつたことを超えて、もつと大切なことがあると気づいたので。言葉ではうまくいえませんが、私はこれから生涯をかけて、この指先を通して皆さんにそのことを伝えたいと思うようになりました」

そして笥はゲストの中から女優に目を向けていった。

「私の手の代わりになっただけじゃませんか」

「まさか」

と、理央はテレビの液晶モニタを前にして叫んでいた。笥はテーブルの前に立つと女優を自分の近くへと招き寄せた。笥がこれからやろうとしていることの察しがついた。しかしそれはあり得ない試みだった。

笥は女優を背後に立たせると、あなたの手を私の右手に重ね

てくださいいと伝えた。彼女の手は彼の手の甲を覆った。

「私の右手は、あなたが動かしてください」

彼の左手と女優の操る右手がシャツフルをする。ふたつの手が空中でカードを扇状に広げ、別のゲストの前に差し出す。男性タレントは一枚を抜き取り、テーブルの上に置いた。ハートの2。すでにフォースがおこなわれているのだと理央は悟った。サインしやすいカードを筧は相手に引かせたのだ。

筧の求めに応じてタレントが大きくペンで自分の名前を書く。彼はそれを受け取り、女優と共にシャツフルをおこなった。理央はその手元をじっと見つめていた。マジシャンはすでにこの段階で目的のカードを自分の望ましい場所へ持ってゆくことができる。その技はいくつもあるが、いずれも指先の繊細ですばやい動きが不可欠だ。クロースアップマジックを見慣れ

た者にとっては、いま彼が女優と共に起こっているカットやシヤツフルはぎこちなく、危なっかしいものでさえあつた。しかしそれゆえにカードの動きをぐさまかすことはできないはずだつた。

笈はアンビシヤス・カードを始めた。デスクのどこにカードを入れてもそれがいちばん上から現れるという定番の現象だ。だが、これはたんなるマニピュレーションの手品ではない。手元でカードを捌き、相手に見えない角度ですばやくカードをすり替える操作が必要なクロースアップマジックなのだ。それはいま笈は背後からの監視のもとで、しかも片手を相手に委ねたまま進めようとしている。

何度もゲストタレントたちの眼前でカードが浮かび上がり、デスクの中を駆け抜けてゆく。理央にはそれがまったく新しい

奇跡のように見えた。女優が笥の手に触れていることで、定番の技法はすべて封じられていた。笥と女優の手元でカードは生きていくように見えた。手を添えた女優は途中から瞳を潤ませていた。彼女は奇跡にじかに触れていた。

理央は背筋に寒気を憶えた。自分の見ている映像が信じられなかった。こんなことができるはずはない。できるはずはないのだ。常識を超えている。

彼はマジックの新しい扉を開いたのだ。

あるいは、マジックではない何かを。

3

「見たよ。まさに神業だ」

湯浅教授は壁に凭れた格好で、会場のスクリーンを見つめたままいった。理央は白髪が増えた教授の横顔にほのかな切なさを覚えながら黙って頷いた。

三〇〇人が入る大会議室では今年の学会賞記念講演が滞りなく進められていた。座席はすべて埋まり、周囲には立ち見の観客が溢れている。演壇に立つ受賞者は四〇代前半の若手教授で、スクリーンに映し出すパワーポイントは動画やフラッシュを多用した派手なつくりだった。発表のあちこちには研究者だけにわかるユーモアも散りばめられており、会場は沸いている。湯浅教授は会場のいちばん後方に立ち、腕を組んでいた。そこが湯浅教授の定番の位置だった。壁に凭れかかり顔をしかめるようにスクリーンを見つめる仕草も変わっていない。それだけに白い頭髪は歳月の流れとこのちのうつろいを感じさせ

る。

地元で学会が開催されていると知り、慌てて会員番号を確かめてコンベンション会場に足を運んだのだ。マジシャンになっても年会費を払い続けていた理由は自分でもよくわからないが、学問に未練があつたためではない。技術文書の翻訳を仕事とするための、いわば精神的担保だつたのだらう。

湯浅教授はかつて笥と理央の指導担当者だつた。理央が修士課程を終えたとき、就職せず笥のようにマジシャンの道を進みたいという無謀な決断を黙って許してくれた、マジックが好きで常識外れの研究者だつた。

「機械トリックを使っていると思いますか」

「あの義肢に仕掛けがあるかつてことかい。見事な義肢であることは間違いない。あれだけ動けば市場を席卷するはずだ。宣

伝を兼ねたパフォーマンスなのか、それとも種があるのか、おれにはわからないな」

「ロボット研究者の間でも噂は流れていないんですか」

「日本のメーカーはみんな目を丸くしている」

「自分で開発した可能性も……」

「それならそれですごいことだ。学会は大喝采で笥を迎え入れなければならぬよ」

世界で活躍するマジシャンの中には、自分で工房を持ち、専属の技術者を雇い入れて、マジック用の装置や小道具を開発する者もいる。彼らの工房はさながらハリウッドスタジオだ。精巧なギミックや大がかりな舞台装置など、彼らの産み出すものは最新の技術に支えられており、ロボット工学のノウハウも存分に取り入れられている。たとえば斬新なカップ&ボールアンドの演

技やスター・ウォーズのライトセイバーのようにステージで自在にレーザー光線を操る演目で大喝采を浴びた若き成功者ジェイソン・ラテイマーは、自分の工房を誇らしげにウェブページで宣伝さえしているほどだ。

スクリーンにロボットのムービーが映し出される。湯浅教授はぞんざいに顎でしゃくった。

「見ろよ。ロボット研究者はああやって十秒やそこらのムービーを得意げに披露しては拍手をもらっている。あの機械は他に何ができるんだ？ 十秒なら確かに人を驚かせられるかもしれない。だがあのロボットを一時間見たら、ふつうの人ならさすがに飽きるだろうよ。そもそも一時間も成功し続けられるのかどうかさえわからない。マジシヤンのほうがよっぽど誠実じゃないか。おれたちはばりばりに編集されたテレビ特番の映

像を見て、ああやっつて学会賞をあげているんだぜ」

会場に照明が戻り、お定まりの質疑応答が始まった。立ち見をしている研究者の何人かがちらちらと理央に視線を送ってきていた。理央の顔と体型は、こうしたスーツ姿のときにいちばん男性を刺激するらしい。何年も学会とは疎遠だったが、彼らの視線は変わらない。

「出るぞ」

湯浅教授が理央を促し、ふたりで会場を後にした。教授は講演の内容に興味を失った様子だった。

「連絡は取れているのか」

「箕くんとですか？ いえ……何も」

「バックにテレビ局があるのかな。そっちの業界でも大騒ぎなんだろう？」

「誰も連絡が取れないらしいです。上の人たちはそれで怒っているとか」

「まあ少しずつ状況もわかってくるさ。そうだ、先月のきみの翻訳、なかなか評判がよかった。もうひとつ引き受けてくれな
いか」

「先生、私は」

失望を感じながら遮る。大学の教授たちの中には、理央がマジシャンをやっているというと非常勤講師の話を持ちかけてきたり、アルバイトの仕事を世話したりする人がいる。それが親切な行為だと心から信じているのだ。フリーランスに対する根本的な無理解が、相手を傷つけていることに気づかないのだ。

だが湯浅教授は理央を押し切って言葉をつないだ。

「最後まで聞けよ。今度は小説なんだ」

理央は言葉に詰まった。

「無理です。小説なんて」

「知り合いの編集者からの話でね、アメリカのわりと有名な作家の新作らしい。まだプルーフの段階で、向こうでも本になっていないんだが、査読してほしいというんだよ。映画化の話も動いていて、いい内容だったらすぐに翻訳を出したいそうだ。

ロボット工学とマジックを取り合わせたサスペンスもので、事前知識のある人間を探している。佐倉、おまえの連絡先を伝えておく。読んでつまらなかつたら断ってくれればいい」

「なんていう本ですか？」

「アラカザール」

笥伊知郎の東京公演開催が発表され、朝からテレビの情報番組はその宣伝で沸き立っていた。

まだカーテンも開けないうちにぼんやりと点けたテレビで理央はそれを知り、慌てて携帯電話で公演の予約画面を呼び出したが、とうのむかしにチケットは完売していた。オークションサイトでは正規価格の五倍以上の値がつけられており、とても手が出せる状況ではない。しかも逡巡しているうちにたちまちそれらのチケットも売り切れてしまい、理央は天井を仰ぎ、ため息をついた。

マジシャン仲間の誰かがチケットを押さえるだろうか。系列の地方テレビ局に頼んで潜り込ませてもらえないだろうか。東京に住む知り合いのマジシャンたちに片っ端から電話をかけよ

うとして、首を振り、携帯電話を置いて身を離した。そういつた安易なコネにすぎるのは理央がこの十年間で敬遠してきたことだ。しかし笥の演技を間近で見られないとわかると、理央は自分でも戸惑うほど焦燥に駆られていた。いまこの瞬間にも笥が遠ざかってゆくように思えた。

レッスンの予習は頭に入らず、マニュアル文書の翻訳ははかどらなかつた。昼食用にひじきの煮物をつくつた。冷蔵庫に入っていたおかずの残りをレンジで温める。マジックの一連の演技のことを手順ルーティンと呼ぶ。レシピ通りにつくり上げる料理はルーティンであり、ひとり机に向かっていたただきますと両手を合わせ、右手に箸を持ちご飯とおかずを黙々と口に運び続ける行為もまたルーティンだった。料理をつくり、食べている間だけ、理央は無心になった。ルーティンをこなす自分の肉体を信

頼できた。しかしささやかなひとりの食事はすぐに終わり、今度は両手を合わせようとして、あの特番にゲストとして登場した女優のように、笥のことを思い出して手を見つめた。「ごちそうさまでした」

自分の声が部屋に響き、理央はお膳を持ってキッチンに戻った。洗い物をする自分の手に目を向けながら、かつて小さな学生アパートに住んでいたころ、食卓で料理を挟んで笥と向かい合い、彼が両手を合わせるさまを幸せな気持ちで見つめたことを思い出した。いま彼はどのようにいたただきますかというのだろう。いまも両手を合わせるだろうか。それだけが感謝の仕草ではないはずだが、代替案は思い浮かばなかった。

外出の用意を整えたところで呼び出しチャイムが鳴り、差出人の欄に大手出版社の名が印刷された宅配便を受け取った。品

目にはプルーフ原稿と書かれてあり、ずしりとしたその重みから、いかにもアメリカのベストセラーらしい分厚さが想像できた。

空は快晴だった。理央は包みを開けず、靴入れの棚の上に置いたまま外へ出た。カルチャーセンターへ向かう途中で二度、理央は地下鉄の中吊り広告にかつての恋人の名を見た。

気持ちを鎮めよう、と理央は己に言い聞かせる。穏やかな気持ちでレッスンに臨もう。しかし心の奥から思いが沸き起こり、それを決して消し去ることはできなかつた。

どうすれば算に会える？ どうすれば？

——むかしむかし、あるところにひとりの少女がいました。

少女はクリスマスにサンタクロースから一冊の本をもらいまし

た。本の名前は『大魔術師アラカザールのひみつ』、手品が大好きな少女にとって、髭を生やしたインドの魔術師が大きく表紙に描かれたその本は、魔法そのものに見えました。

少女はベッドの中で本のページを開き、わくわくしながら読み始めました。しかし期待はすぐに萎み、少女のページをめくる手は止まってしまいました。アラカザールが教えてくれることは、少女の想いとかけ離れていたのです。少女はみんなをびつくりさせるすてきなマジックをたくさん教えてほしかったのです。それなのにアラカザールは、そんなマジックの種は重要じゃないというのです。本当に大切なのは魔法をかけるまでの物語なんだよと教え諭すのです。ちちんぷいぷい、ワンツースリーと杖を振るまでが、本当のあなたの魔法なんだよと、アラカザールは語りかけてくるのです。

少女はむくれて、本を放り出しました。ふとんを頭からかぶって、アラカザールの悪口を唱え始めました。そんなことをいったって、アラカザール、あんたはいま魔法を使えていないじゃない。本物の魔術師だったら最後まで本を読ませるくらいわくわくさせてよ。それができないから煙に巻いてるだけなんじゃないの。髭は立派だけれど、あんたなんて偽者だ。文句があるならなんとかいってみなさいよ。

それでも少女はマジックを嫌いになることはありませんでした。成長し、魔法使いの弟子になりたいと思い始めたころ、ひとりの青年と出会い、恋に落ちたのでした。

誰かがちちんぷいぷいと杖を振らなくても、成長した彼女はもう恋の魔力を知っていたのでした。

予想通り、レッスンの受講生は半分に減っていた。ちやうどいい人数だ。理央は皆をテーブルの周りに集め、開演前のリラックス法などをちよつとした小咄で伝えながら、いくつかのカード当て現象を演じてみせた。マジックを学び始める前の理央は極端な人見知りだった。ステージマジックのような大袈裟な演技も苦手だった。大学の奇術部でクロースアップと出会い、初めて相手の目を見ることができるようになった。自分の手元ではなく相手の心に向き合うことを知り、初めてマジックが好きになった。クロースアップを演じるとき、理央は自分の手元を信頼できた。練習を重ねた自分の手先は、そこへ視線を落とさなくてもカードを操ってくれるはずだ。そう思えるようになった。相手と言葉を交わせるようになった。

カードのシャッフルを繰り返しているうちに、自分の肉体が

ら余計な焦燥がすつと退いてゆくのがわかった。

いまはこの身体を信頼しよう。理央は自分の感覚に身を委ねながら笥のことを思った。笥の義肢が本物だとして、きつと彼にとつていちばんの困難は機械の指先を信頼することだったろう。きつと笥はそれを克服したのだ。いま自分も笥のようになればいい。

シヤツフルを続けながら、この教室へ戻ってきてくれた受講生たちひとりひとりの顔を見渡していった。この教室に入るまで強張っていた口角が、ゆつくりと素の自分へと戻ってゆく。理央は両手の中でデッキを扇状に開き、若い学生にいった。

「カードを一枚選んで下さい」

相手が指を伸ばしてくるのを見計らって彼の手に一枚を置き、目を逸らしてデッキを胸元に引いた。

受講生はそつとカードの表を見る。隣の受講生がその手元を覗き込んだ。

「ダイヤのキングですね」

と理央は相手のカードをあつさりと明かした。

「いまのはフォースと違って、強制的に目的のカードを引かせる方法です。かなり難しい手技ですから、講座の最後にみんなでトライしてみます——でも、どうでしょう、これはよく考えると不自然な流れだとは思いませんか。カードマジックの多くは、相手が選んだ一枚のカードを当てるものです。私たちはそういうしたお約束の中でマジックを演じ、マジックを楽しんでいるわけですが、一歩退いて眺めてみれば、とても形式に嵌はまったおかしなことをやっているわけです。どうしてお客様はカードを選ばないといけないんでしょう。どうしてマジシャンは一枚選

ぶことを強制するんでしよう。カードを引いたらマジシャンがそれを当てるのは自明のこと、だとしたらお客様が一枚引いた時点でもうすべては終わっているのではありませんか。そこから先に起こるすべてのことは、マジシャンのルーティンに過ぎないのでありませんか」

真ん中で理央の話聞いていた初老の受講生が露骨に顔をしかめた。市内のマジックサークルに所属するアマチュア愛好家だ。さきほどの手技もカードを引いた学生のように目もくれず、理央の手元をずっと注視していた。

このような話に抵抗を示すのは、それなりに練習を重ねてきた町のアマチュア愛好家が多い。彼らの多くはマジックの小道具を持ち歩き、周囲の人に手技を披露するのが好きだ。初回レッスンのときは近くの喫茶店で親睦会をおこなったが、そう

した彼らは次々とレパトリーを披露して見せた。理央よりもマジック業界に事情通の人さえいた。しかし先週のような宿題を課されてレッスンから遠ざかる人の多くもまた彼らであった。

理央はそのことを承知しつつ、彼の目を見てデスクを裏向きでテーブルの上に広げ、名を呼んだ。

「吉岡さん、五二枚の中で、とくにお好きなカードはありますか。思い出の一枚を教えてください」

彼は、はっとした表情になった。他の受講生たちが彼に視線を注いだ。彼は突然注目されたことに戸惑い、あの、ええと、と言葉を濁した。公民館や町のマジックサークルで仲間から喝采を浴びることは快感でも、こうして自分の言葉でマジックと向き合うのにはまったく慣れていないのだった。

「ハートのエースです」

「それはどうして？」

「子どものころ、最初におぼえたマジックが、それを当てるものだったの——それにキャンディーズの歌が好きで」

「ではあのころのことを思い出して下さい。裏をよく見て、ハートのエースを引いていただけですか」

理央は彼の目を見ながら促した。彼は躊躇いがちに一枚のカードを指先で手前に引き寄せた。理央はデッキをひとつにまとめてテーブルの隅に置き、相手の選び取ったカードを裏向きのままテーブルの中央へ移動させた。

目を伏せがちないまの吉岡氏は、一カ月前の懇親会で他の受講生らに持参の指ぬきシンブルで消失と出現の手技を見せびらかした吉岡氏とは別人だった。彼はいま自分が見られる立場となり、

カードを引かせるのではなくカードを引く立場を体験していた。

「開けてみて下さい」

理央は自信を持っていった。予言したカードが当たる確率は常識的に考えて五二分の一、すなわち約二パーセントだ。高くはないが、低い確率でもない。まぐれで当たることもある。

吉岡氏は周りの受講生にしきりに目を移し、期待が寄せられていることを察して萎縮していた。理央は待った。ここで追い打ちのような言葉をかけてはいけない。相手の手が動くのを待つのだ。自分のこの身体だけでなく、言葉を発する私の心も、身体に合わせて相手を待つのだ。

吉岡氏の手が動いた。

ハートのエースだった。

歓声が上がった。

「すり替えたのですね」

吉岡氏はいった。「さっき、このカードを真ん中に寄せるとき、パームしたカードとすり替えたんだ」

しかしその顔はさきほどまでと異なり、ごく自然に綻んでいた。この講座が始まって以来、初めて彼が見せた表情だった。

「あなたが当てたのですよ、吉岡さん」

理央はカードをしばらくデスクに戻さなかった。彼にそのカードをもつと見てもらいたいと思ったのだ。引越しの際に箆笥の裏から見つけた思い出のカードのように。

もうアラカザールの名を声に出す必要はなかった。

吉岡氏はゆっくりとハートのエースを差し出してきた。理央は首を振り、笑顔で残りのデッキをすべて彼に手渡した。

「今度は吉岡さんが切り分けて下さい。私たちにハートのエースのマジックを教えてくださいただきたいのです。吉岡さんはどなたに一枚を選んでもらいますか？」

吉岡氏は再び周りの受講生たちを眺め渡した。彼が周りの人たちをきちんとは見たのも、これが初めてのことだった。

彼は本多洋平をパートナーに選んだ。ええと、お名前は、と彼は尋ねた。本多は理央に目配せをして見せた。

5

魔法は怖ろしい。人と怪物の境界がはっきりとはわからないように、魔法は気づいたときには恐怖となる。

レッスンを修了後、ロビーで本多と少しばかり立ち話をした。

テレビの特番を見たこと、筧とはまだ連絡が取れないことを伝えたが、本多のほうは多くを語らず、そのままロビーで別れて理央は薄暮れの町を歩いた。

一週間前のレッスンでは地下鉄駅の階段に着くころには陽が落ちていたが、いまはまだ紫色の空が広がっている。低い雲が西からせり出し、その底面に今日の最後の陽射しが当たって虹色に彩られていた。明日から雨になるだろう。しかしぽっかりと空いた理央のてっぺんは、まだそのまま宇宙へとつながり、小さな星の光を灯し始めていた。

ふだんは携帯電話をあまり使わない。しかし予感を覚えて電源を入れると、やはりいくつかの留守番電話が入っていた。バーのマスターからの伝言が二件、東京のマジック仲間からの伝言が合わせて三件。歩きながら携帯を耳に当て、彼らの声を

聞いて事情はつかめた。笥伊知郎に対する世間の関心はエスカレートし、ここ数時間のうちにウェブでは理央のこともかつての恋人として噂をされ始めているのだった。

それでもバーのマスターは、明後日の当番は約束通り来てくれと一言添えていた。念を押さなければならぬほどひどいことが書かれているのだろうか。理央にはわからなかったが、うまい返礼の言葉が見つからず、彼らに電話もメールもできなかった。工学修士を出ていながら、そのあたりは古い人間なのだ。

本多もそのことはすでに知っていたのかもしれない。知っていて、あえて口に出さなかったのだろうか。

地下鉄を經由して、再び地上に出る。柔らかく若い星々の瞬きが雲の波間に見え始めていた。子どもどものころ、手を伸ばして

星をつかもうとしたことがあつたかもしれない。それはこの手が自分とつながっていると信じていたからだ。夢は手を介して自分につながると、あのころは信じていたのだ。だからマジックは指先で魔法を見せるのだ。

二〇歳のとき、初めて笥の部屋に行つた夜は、強い雨が降つていた。奇術部の合同練習が長引き、借りていた公民館から出たときはすでに辺りは真っ暗だった。他のメンバーは雨の中を駆けていった。仲間たちは気を遣つてくれたのかもしれない。ふたり残され、理央の持っていた折りたたみ傘の中で互いに身を縮めながらいっしょに走った。

身体を拭き、髪の毛を乾かし、笥はバイシクル・ライダーバックのカードを二ケース取り出して畳の上に座った。理央も

タオルを持って笥の前に座った。カードがあれば気まずくないことをふたりは知っており、笥と理央は念入りにタオルで手を拭き、いつものように銀行員が使う滑り止めクリームを十本の指先に擦りつけて笑い合った。そして笥は青いデックを、理央は赤いデックを手にとった。

笥はスリーカードモンテを理央に見せた。三枚の中から特定のカードを当てるゲームだ。すばやい指先の動きが相手に錯覚を与える。たとえ定番の種を知っていたとしても、笥はその予測を見越すかのように別の場所へカードを捌いてゆく。理央は外れっぱなしの自分に可笑しくおかなりながら、笥の示す三枚のカードに目を凝らし、次こそは当ててやると鼻息を荒くして彼の手元を追った。

細く、美しい手だった。

何度も騙され続けて、理央はくすくすと笑っていた。そんな理央を真向かいで見っていた笥が、不意に真顔になり、ふたりで互いのカードを当てよう、といった。まだくすくすと笑っていた理央に、笥はもう一度真剣な声でいった。こいつはぼくだけしか知らない魔法なんだ。

魔法？

そうさ、魔法だ。

教えて。理央は笑いを止めて笥に向き直った。すでにそのとき、理央は予感していた。心臓の鼓動が早まるのに気づいた。

デスクをシャッフルして。自由に。

笥が青いカードを切り始めた。理央はそれを見て、自分の手元にある赤いカードを同じように切っていた。やがて笥は自分のデスクを差し出し、交換を求めた。理央は無言で従い、再

びシヤツフルした。

これで充分だと思ふ瞬間が、ふたり同時にやってきた。笥がデスクを裏向きのまま両手の中で広げ、そして予言した。

「これからぼくたちはエラリー・クイーンを引き当てる」

理央が指を伸ばしかけたとき、笥は首を振った。その手でただ引くだけじゃいけない。心を込めて引いて、その一枚を見ないで手前に置いてほしい。ぼくも同じことをする。

理央は指先を伸ばし、笥のデスクの直前で止めた。あと少し動かせば、カードを通して笥と触れるのだとわかっていた。もし触れてしまったら、心臓の鼓動の音はきつと隠しきれないほど大きくなるだろう。笥は待っていた。カードをびくとも動かさず理央を待っていた。理央は目を瞑り、わずかに開いていた中指と親指の先で一枚のカードを捉えた。両の指先に磁力が働

いたかのように、すつと引き寄せ合って理央の指はカードを選んだ。

笥はデスクを閉じて脇へ置いた。そして無言で理央を促し、理央は自分のデスクを広げた。笥の指が近づいてきたとき、電撃的な感覚が両手から腕を伝って駆け上り、理央の心臓の中心で弾けた。笥が指先でカードを選んだとき、理央は心の中で歓喜の声を上げた。笥はまっすぐな眼差しで理央の目を見つめていった。互いのカードをめくる。いいね？

理央は頷いた。ふたりは見つめ合ったまま手を伸ばし、相手のカードを引き寄せた。ふたりはドウ・アズ・アイ・ドウをやるときのように、鏡に映ったもうひとりになりきっていた。笥が手元に視線を落とし、理央も同じく指先を見た。ふたりの指はカードをめくった。笥のかけ声は不要だった。理央は相手の

手元に目を向け、笥は理央の手元を見て、そしてふたりは顔を上げて互いを見つめた。

ふたりが同時にカードを引き、それが二枚とも予言されたカードである確率は五二分の二乗。すなわち二七〇四回に一回。

「これって魔法？」

笥は最高の笑顔を見せた。「運命ってやつだよ」

玄関の鍵を開けたところで携帯電話が震えた。マジシャン仲間だと話が長引きそうだなと思いつつながら表示を見て、湯浅教授からだということに驚き、靴箱の上に置きっぱなしだった宅配便の包みを慌てて手に取った。不安定な格好で靴を脱いだのでよろめき、そのままコンクリート壁の角に足の指をぶつけてし

まった。眉間に皺を寄せて声にならない悲鳴を上げる。こういう傷は三〇歳を過ぎるとなかなか治らないのだ。

指先をさすりながらリビングまで進んで椅子に座り、観念して受信ボタンを押す。

「どうしたんだ？」

「おっちょこちよいなだけです。すみません、今日、出版社から届いて……」

「そんなことはいい。パソコンでもその携帯でもいい、動画配信を見られる環境があつたらすぐアクセスしろ。筧が現れた」

はっとして、理央は部屋を見渡した。だから最近のネット環境の進歩には疎いといっているのに。ストリーミング動画を閲覧して回る趣味はない。急いでラップトップPCを立ち上げた。貯金は少なかったが、今年になって清水の舞台から飛び降

りる気持ちで買い換えた新品だ。湯浅教授の指示に従って目的の配信サイトへ辿り着くと、すでに笥の名がそのトップページに挙がっていた。薄暗い映像をクリックすると、PCがうんうんとうなりを上げて動画を取得し始めた。

理央には最初、それがどこなのかわからなかった。ホテルの一角か、あるいはどこかの劇場の通路脇とも思える。笥はラフなジャケットにジーンズ姿で、その周りを二〇名ほどの男女が取り囲んでいた。彼らの素性もよくわからない。しかし何かただならぬ雰囲気であることは荒い映像からも伝わってきた。見えなかったか、と湯浅教授が回線の向こうで急かす。

教授はどこか追い立てられるような口調で話し始めた。いつもの全体を俯瞰して率直な意見をいう教授からは想像がつかない、焦りと怒りを孕んだ声だった。教授によれば、ほんの二〇

分ほど前、唐突に誰かがこの動画を流し始めたらしい。周りを取り囲んでいるのは公演スタッフのようだが、そのうちのひとりが笥に何かを問い質し始めたのだという。笥は彼らに手渡された小道具でスライハンドの技を見せる羽目に陥ったようなのだ。それを何者かが手持ちの携帯電話で撮影し、世界中にまき散らしている。なんの悪意なのかさえわからないが、突然の出来事に人々の関心は集中し、たちまち多くのネットユーザーにフォロワーされたということらしい。

笥は四方を囲まれながら、右手でハーフダラーのコインロールをおこなっていた。親指と人差し指の間で挟んだコインを手の甲で小指のほうへ転がしてゆく手技だ。小指まで到達したコインはてのひらを抜けて再び人差し指の側から手の甲へと迫り上がり、回転を繰り返しながら小指へ向かう。撮影者はその様

子を笥の後ろから肩越しに撮影していた。いかに他の人たちが取り巻いているからといえ、マジシヤンの背後に回って全世界に映像を流すとは。

「腕の動きが見えるか」教授がいった。「肩関節のあたりを見ろ。ふつうの義肢の動きじゃない」

やらせだ、公演の宣伝だ、という書き込みが、ブラウザの隅に現れては流れてゆく。理央は携帯電話を耳に当てたまま、息を詰めてその映像を凝視していた。笥の右手が次第に加速してゆく。その指先は人間には不可能な動きを見せ始めていた。もはやコインは回転するとか、踊るといった形容の動きではなくなりつつあった。

「ばかやろう、あいつ」

教授の声が理央の胸に刺さった。さらにコインの動きは加速

してゆく。日本の昔ながらの奇術を手妻と呼ぶ。手先が稲妻のように素早く動くという意味だが、すでに笥の右手は何か稲妻のような暴力性を発していた。あまりの正確さ、あまりの速さ、日常からはるかに逸脱した未知の動き、それはあと一秒も経てば人のいのちを奪う兵器となってしまうそうだった。

理央が悲鳴を上げる寸前に、笥は大きくコインを減速させ、そのまま右手に握り込み、ゆっくりとてのひらを開いて相手の手にコインを落とした。その男は呆然とした表情でコインを受け取ったが、そのまましばらくは動けずにいた。実際にあと一秒加速を続けていたら、笥の周囲にいる人たちは反射的に身を退き始めたかもしれない。工学分野の者だけがふつうの人よりわずかに早く、動きの怖ろしさを本能的に察知したのだ。

「本当の義肢だとわかっていただけましたか」

笥の穏やかな声がスピーカーを通して伝わってきた。周囲の人たちは返答しない。声が出ないのに違いない。

理央はその張り詰めた現場をモニタ越しに見つめていた。笥の義肢は七年前の爆発によって生まれた。あの両腕の中で花束は炸裂し、笥の腕を機械に変えた。血塗られた両腕と叫ぶ者が現れないと誰が保証できるだろう。再び笥に死の花束を贈るものはいないと誰が約束できるだろう。機械ならば傷つけてみよと異端審問の如くに迫り寄る者がいないとは限らない。いまこの瞬間にも世界中のマジシャンは自らの指にナイフを突き立て、腕に包丁を打ち下ろし、奇跡の再生をアピールしている。それを実際にやってみよ、それが義肢を使ったマジックだと、わめき立てる者がいずれ出てくるかもしれない。何かがある世界中で一転したら？　いま信じられている何かがある瞬間を境に

変わったとしたら？

笥はしかし、あくまでも穏当な表情のまま、ゆっくりと両手を胸のあたりにまで上げた。

「でも、ぼくがこの義肢で本当に伝えたいのは、こういうものです」

笥は胸の前でふたつのひらを合わせ、さらに深く合わせ、親指同士をクロスさせた。そのとき初めて周囲の人たちが一歩下がった。笥の手の中から、指でできた鳥が飛び立ったのだ。

違う。笥の両手が鳥のかたちをつくり、笥の腕がその両手を押し上げたのだった。子どものころに遊んだ指影絵の鳶とびであった。翼は左右八本の指に過ぎない。しかし理央はモニタの前で目を睜った。その両の翼は本当に風をつかみ、羽ばたいている

ように見えた。笥の親指は本当に鳶の頭と嘴になり、はるか遠くの空に視線を送っているように見えた。

笥の両手は静かに揚力を得て、そして再びゆっくりと翼を閉じ、笥の胸元へ降り立った。その瞬間に鳶は笥の両手の中で、翼を広げた平たい記号へと還った。

ステージ上なら、そこから笥は本物の鳩さえ出すこともできただろう。だが奇跡を予感させたまま、笥のふたつの親指は外れ、ゆっくりと両手は左右に滑っていった。最後に両の指先はまるでチャイナリングの演技のようにすれ違い、再び交わることなく離別し、余韻を残してそのまま身体の両脇へそつと下ろされた。

数秒間の無言が続いた。誰も動かなかつた。最初に顔を上げ、言葉を発したのは笥だった。申し訳ありませんでした、ぼ

くにも多くの恩人がいます、いずれきちんとお礼を申しあげたいと思っっています、直接会って話したい方はたくさんいますから――。

寛が撮影者に気づき、こちらに目を向けた。画面が大きく揺れ、明後日の方角を向いた。そして唐突に終了した。しかし直前にレンズは寛の表情を捉えていた。それは戸惑いの表情ではなく、穏やかだが、しかし決意を固めた男の顔で、運命を受け入れたひとりの人間の顔に見えた。

――教授からの電話を切った後も、理央はPCモニタからしばらく目を離すことができずにいた。気がつくくと全身が強張っており、両腕で自分をかき抱いていた。

私たちの手は生き物としての制約に満ちている。カードやコインという無生物を扱う私たちの手は、張り詰めた後に緊張を

ほどいた皮膚の皺でコインを隠し、つかんでいるはずの筋肉の緊張を忘れることで眼前の観客の目を欺く。そのマジックの醍醐味を、笥はどれほどの苦労を重ねて義肢で再現してきたのだろうか。人ができないことをおこなうのはもはや魔法ではない、それは人に恐怖と圧迫しか与えない。義肢がカードやコインを人間のように操ることに、いったいどんな意味があるだろう。人間を超えて操ることにさえ、いったい何の意味があるだろう。笥の存在に驚き、不思議を見せろ、もっと不思議をと強要する人たちは、本当はマジックなど求めていないのだ。笥は帰国するまでずっと世界のどこかで、その苦しみと闘ってきたのかもしれない。笥がマジックを続けるには、マジックを変え、世界を変えるしか方法はないのだ。

いつしか雨が窓を叩く音が聞こえていた。

それから何をしたのか思い出せない。真夜中を過ぎて、理央は不意に猛烈な孤独感に襲われ、ベッドに蹲った。しばらくその姿勢のまま動けず、しかし涙のこぼれない自分の瞳を呪った。

蹲ったまま、両手は自分の胸に押し当てられていた。心臓の鼓動がてのひらに伝わっていた。泣けなくとも肉体は代謝をしてエネルギーを発し、その熱は理央のてのひらを温めていた。その熱を感じ取れるのは、この手が自分とつながっているからだ。このてのひらが温まるのは細胞たちが生きているからだ。理央は空っぽになりそうな心の中で唱えた。教えてください、アラカザール師。理央は初めて一九世紀の偉大な魔術師に心の中で願った。あのころに戻れるなら、自分のいのちを削って差し出します、だからアラカザール師、私に本当の魔法をお教え

ください。

6

「吉川さん、本当にありがとうございました。すてきでした。

拍手を——。それでは続いて本多さん。あなたならどのよう
にカードをお客様に一枚引かせますか」

「ええ、それなんですけど……」

本多洋平は苦笑いをした。「お客といっても、まだぼくは家
族に見せるくらいですから。なんとか娘に喜んでもらいたく
て」

「じゃあ、娘さんに引いてもらおうわけですね」

「そうなんです。先生、うちの娘の役をやってもらえません

か」

前回のレッスンで、本多はそのように切り出した。それには理央も意表を突かれた。学生のころから男女問わず人に好かれる明るい笑顔で両手を合わせ、理央だけに見える角度で一瞬ベロを出した。

「娘の名前は結花ゆいかといいます。理央先生、結花になって、そこにある魔法の杖を用意しておいてください」

「ええと、どうすれば？」

「はい、じゃあ始めます」

本多はそういって手もみし、テーブルの上のデスクを理央の前に置いた。

「これから結花の魔法を見せてもらおうよ。そこに杖があるだろう。そいつは結花の魔法の杖だ」

本多の芝居は堂々たるものだった。もしかしたら彼は役者志望だったのかもしれない。これまでレッスンで何度も自信なさげに手先の動きを習得していた本多が、いまはひとつの躊躇いもなく言葉を発していた。

「ああ、まだ杖はそのまま。魔法使いになつて、カードをよく切るんだ」

理央はいわれるがままにカードをシャッフルした。本多の指示に従って両手の中で扇状に広げる。

「よし、結花は魔法使いだ。ちゃんとなりきつて。頭の中で自分を魔法使いだと考えて。魔法使いはどんなカードでも一発で当てられる。結花はパパの引いたカードを魔法の杖で当てられるんだ。どんなふうにもパパに引いてもらおう？」

あつ、と受講生数名が声を上げた。理央はにやりと本多に笑

みを返してみせた。どうやら一本取られたらしい。本多自身の左利きのハンディも見事に克服した、うまい演出だ。

「そうね……、パパのいちばん好きなカードを。ママを探し出すようなつもりで」

「おいおい、そんなこと娘はいわないよ」

「一枚取って」

本多は左手でカードを一枚差し引いた。それを自分のもとへ引き寄せ、両手で胸にぴたりと当てて覆い、ぎこちない手つきでそつと表のマークを見るそぶりをした。そしてカードを手の中で裏返し、理央や他の受講生たちにも見える角度で確認させた。再び両手で胸に当てて覆い、理央に目配せをすると、テール脇の杖を指差した。理央がカードやシルクなどと共に教室へ持ち込んでいる小道具のひとつだった。

「それを持って、このトランプに魔法をかけるんだ」

最近の女の子が見ている魔女っこ番組のおまじないは知らない。テクマクマヤコン、テクマクマヤコン、とずいぶん古い魔法をかけた。本多は怖がるような演技を見せ、そして理央にデッキをまとめ、カードを弾いてくれと頼んだ。

「ストップ」

その隙間に、本多はたっぷりの演技と共にカードを裏向きに差し込んだ。再び魔法の杖の出番だった。テクマクマヤコン、テクマクマヤコン。軽快なおまじないの言葉をこうして声に出すのは久しぶりだった。魔法は女の子の特権だった。

「魔法使い結花さん、ではカードを当ててください」

「これで？」

理央は演出に乗ってみせた。他の受講生を見回し、彼らが種

を見破っていないことを察した。うまくいく。そう確信して、理央は一気にデッキをテーブル上に裏向きでリボンस्पレッドした。

受講生たちの目が一点に注がれた。स्पレッドされた青色のカードの中央に、一枚だけ赤色のカードが混じっていた。その赤色は見事なほど鮮やかに見えた。

「結花の魔法が効いたんだ」

本多に促され、理央は赤いカードを返した。はたしてそれは本多が手の中で見せたカードだった。拍手が起こっている間に理央は残りのカードを手早くまとめ、シヤツフルして、本当に彼が引いた一枚を、神様さえわからない場所へと紛れ込ませた。

午後六時を過ぎ、窓の外には雨雲が低く立ちこめて、いまにも雨が降り出しそうだった。もう一度携帯電話をかけたが応答はなかった。

理央が学生として在籍していたころから、湯浅教授は秘書に電話を取らせず、すべて自分で対応していた。そのためいつもつかまらないと、皆から文句をいわれていたものだ。そのくせ自分がかけたいときは構わずに夜中でも電話する。いまもそれは変わらないのだらう。理央は秘書室にかけ直すことはせず、メールをしたためて送った。携帯電話やスマートフォンのお小さなボタンを押すことは苦手だが、理央の指先は軽々とブラインドタッチでPCのキーボードを奏でることができた。

身支度を調べ、傘を片手にマンションを出た。遠く西の方角ではすでに雨が降り始めているらしい。暗い紗が空からビル群へと降りている。早足で行けば徒歩二〇分は一五分になる。途中、二度ほど赤信号を突っ切った。ごめんなさいと笑顔でドライバーに謝っておいた。

店にはいつものようにマスターが先に入っており、氷の準備を進めていた。理央は挨拶をしていったん裏の物置部屋に入り、着替えをすませた。それがこのマジックバーで働くときの、十年以上続けてきた手順ルーティンだった。部屋の壁はどこも雑貨でふさがっているが、扉の内側には大きな姿鏡が貼りつけられており、理央はこの十年間、この鏡に自分を写してお辞儀や立ち振る舞いを鍛錬し、スライハンドの調子確かめてきた。そして厭な客に罵倒され、セクハラまがいの発言を浴びせられたと

きには、この鏡の前で腫れた目を拭い、笑顔を思い出した。

扉の横の小棚にはマジックの小道具が詰め込まれ、バイシクル・ライダーバックのポーカーカードが山積みになっている。赤や青色といった定番だけでなく、黒や緑色といった変わり種もある。このバーで演ずるマジシャンは、ここからその日に使う新品を自由に取ることができ、使い終わったカードは自分のものにできるのだった。学生だったころ、そんな小さな特典さえも理央には嬉しかった。持ち帰ったバイシクルカードを使い倒して、ダブルリフトやターンオーバーパスを練習した。

山積みの中から裏が赤色のものを手に取った。ふと、二日前のカルチャースクールで本多洋平が演じたおとぎ話を思い出し、理央はふっと笑って、未開封のカードケースを胸に当てた。本多はこうやって、心臓の鼓動をカードに聞かせるように

して、我が子の魔法を引き出そうとしたのだった。子どもものいない自分は未来のためにこの鼓動をカードに伝えようと理央は思った。

鏡越しに理央は自分の心臓の上に置かれた両手を見つめた。丁寧にマニキュアを塗り、クリームをつけたその指先を、初めて見る物体のように見つめた。なぜマジックは手という人間の身体に縛られているのだろう。てのひらはコインを隠し持つには不向きなかたちをしている。コインマニピュレーションの達人の指先は、ときに異星の生き物のように見える。それほど人の日常を超えた手業が彼らの指先には積み重なっているのだ。だから練達のマジシャンほど、ステージの上でよもやの失敗に遭遇し、手の先からコインが甲高い音を立てて床に落ちたとき、こちらがはっとするほど苦悶の表情を浮かべる。そのとき

彼らは人外の何かに魂を抜き取られるのだ。理央はステージでコインを取り落とした老練のマジシヤンの話を聞いたことがある。彼はその半年後に亡くなった。

理央は鏡の中の両手を見つめたまま、心臓の上でカードケースを消した。指を組み、てのひらを前へ、そして自分の側へ、再び前へ見せ、箱を出現させた。斜めに立ち、片手で持ち直し、いったん消して袖口から拾い上げた。

なぜ本多はハートの4を引いたのだろうか？ 偶然だろうか？ それは理央と笥が最初の夜にふたりで同時に開いたカードだった。本多にあの夜のことを話したおぼえはなかった。この偶然も運命の一部なのだろうか？

あの雨の夜、笥と向き合いながら、理央は笥の差し出した青い裏面のカードを両手の中で広げたとき、無意識のうちに左の

小指を一枚のカードに添えていた。それは相手に特定のカードを引かせる手業だった。しかし理央はそのカードの素性を本当に知らなかった。笥がその一枚を選んだときも、カードの表を知らなかった。いまでも理央は不思議に思う。なぜあるときふたりのカードは一致したのだろうか。笥も同じことをしたのだろうか？ それともあれは一種のメンタルマジックで、理央は知らず知らずのうちに操られていたのだろうか？ あれ以来、ずっと理央は考え続けてきたが、どうしても種はわからなかった。

笥のいったように、あれは本当に魔法だったのだろうか。

そして運命だったのだろうか。

昨日の朝、ようやく理央は出版社から送られてきた宅配便を開けた。手紙を添えてきた翻訳書担当の編集者は若い女性だっ

た。整った美しい字が便箋に綴られており、理央の活動内容も雑誌記事や動画配信サイトなどで拝見しましたと記されている。何気なくプルーフをめくり、理央はそこに印字されているエピグラフに目を留めた。理央が子どもものころ反発した、伝説の大魔術師アラカザールの言葉だった。

——よもやおまえさん、そのことを忘れたわけじゃあるまいな？

理央は息を呑み、その英文を見つめ続けた。

一日半かけてプルーフを読み、興奮した気持ちのまま編集者にメールを打った。詳細なあらすじ紹介と作品の評価、そしてこれは求められてはいなかったが、勝手に冒頭三ページの試訳も添付して送った。すぐに電話がかかってきた。彼女は便箋にしたためるペン字と同じくらいチャーミングな声をしており、

理央を訳者の候補として社内でプツシユすると請け負ってくれた。

一連のルーティンを自動で終え、理央は鏡の中の自分に向かって呟いた。

いいえ、いいえ、アラカザール師、忘れてなんかいません。

九歳のときから忘れていません。あのクリスマスからひとときも。だから私はマジシャンになったんです——私たちはマジシャンになつたんです。

8

やがて雨は降り始め、午後十時過ぎからはアスファルトを叩きつけるようなシャワーになった。それは理央にとっては幸い

といえた。豪雨でなければネットに流出した数々の噂に焚きつけられて、バーを荒らしに来る客もいたただろう。客足が途絶え、店を閉めようかという雰囲気になったそのとき、駆け込むようにびしょ濡れの若いカップルが入ってきた。男性の手には小さな折りたたみ傘しか握られておらず、ふたりとも悲鳴を上げていた。

さすがにマジックバーでも客を一瞬のうちに乾かすことにはできない。タオルを差し出しながら理央は言葉をかけた。

「大変でしたね。ちよつと前からざんざ降りになって」

「でも今日しか時間がなくて。ぼくら、遠距離でつき合っているんです。彼女がどうしてもマジックを見たいというものだから」

「まずはタオルでお拭きになってください。その間、カードを

いろいろな方法で切り混ぜてみます。見ているだけでも楽しいですよ」

カウンター席に座ったふたりを前に、理央はカードケースの封を切り、マジシャンが使うトランプの特徴を説明しながら、カットやシャッフルの手法を披露して見せた。切り混ぜたように見せかけて実はカードの配列がまったく変わらない方法もある。そうした基本の切り方を駆使するだけで、いつでも同じカードがいちばん上に現れるなどの現象をつくり出すこともできる。もっと派手なのは両手の間でくるくるとカードを回転させながら切り混ぜてゆく、サーカスのような特殊な技法だ。理央はデッキをカウンターの上で表向きに広げ、あれほどカットしてもデッキがダイヤ、クラブ、ハート、スペードのエースからキングまで、すべて最初の順番通りに並んでいることを見せ

た。カップルは髪の毛をタオルで拭きながら目を丸くした。

「すごいですねえ、さすがマジシャンだ」

理央は微笑みを返したが、これらの技は練習がすべてであり、マジシャンの資質とはあまり関係がない。カードハンドリングに特化した機械の指先なら、おそらくは人間より美しく切り分けることができるだろう。

デッキをふたつに分けて左右の手で持ち、ふたりの前に置いた。

「カジノのディーラーはこうやってふたつの山を重ねて、交互に弾いていきます。この完璧なシャッフルを八回繰り返すと、五二枚のカードは理論上、最初の順番通りに戻ることが知られています。なかなか大変なんですけどね」

「へえ、完璧な機械にならないとだめなんですネ」

「成功の確率は……わかりません。やってみますね」

そしてふたつのポケットに手をかけ、息を詰めて弾いた。

カップルが見守るなか、理央は二回目、三回目とシヤツフルを続けた。七回目のシヤツフルで最後の数枚を逃した。その時点で失敗は確実になったが、表情には出さず理央は八回目まで続け、デスクの表を広げて見せた。最後まで集中して見ていたカップルは、ほんのわずかな濁りが紛れ込んだことを知ると地団駄を踏んで悔しがった。

「残念だなあ。そうか、これもマジックの種のひとつなんですね」

「本当のマジックには、絶対に種がわからないものもありますよ」

「そんなものがあるんですか？」

「ええ。種がわからない、つまり種のないマジックです。私もむかし、一度だけそんなマジックを、仲間とやってみたことがあります」

理央はカードを今度はふつうにシャッフルしながらいった。

「相手にカードを一枚引いてもらう。自分も相手からカードを一枚引く。ふたりとも予言のカードを引き当てる確率は〇・〇三七パーセント。そのとき私たちは同じ予言のカードを引いて、恋人同士になりました」

「すごい。そんな相性ってあるんですね」

女性のほうは無邪気な声を上げたが、男性は少しばかり気まぐずそうな表情を見せた。理央と笥の噂をどこかで見ているのだろう。しかし理央の直観通り、男性はそうした話題には踏み込まず、真っ直ぐな好奇心を示してみせた。

「ぼくたちにもできますか」

「片方だけでも難しいですよ」

「一方に引いてもらって、カードを当てるということでしよう。それなら確率は五二分の一ですよ。二パーセントくらいだ。悪くない数字だと思うな」

「ええ？　ちよつと、ねえ、外れたら悲しいじゃない」

「トランプ、貸してもらえますか」

男性は乗り気になっていた。理央が手渡したデッキを花札流に何度も切り混ぜる。そしてゆっくりと両手の中で広げ、女性に向けた。

彼女は迷いながら一枚に手を伸ばす。男性は強い口調で待ったと声を上げた。

「どうしたの」

「そんないい加減に引くなよ。こつちだつて真剣にやっているんだ」

「はいはい」

理央はふたりのやりとりを控えめな姿勢で眺めていた。女性がついに一枚引くまで、男性はじつと彼女の瞳を見つめていた。次第に女性もその気になったらしい。引いたカードを運命の一枚のようにそつと両手で挟み、表を見ずにカウンターに置いた。男性は残りのデッキを乱雑にまとめて脇へ置き、女性の瞳の奥を探った。

「よし、わかったぞ」

「へえ？」

「ダイヤの9」

理央はさりげなく男性の置いたデッキを手元に引き寄せてい

た。ふたりの気づかないうちに表をざっと観察し、男性のいったカードのところでブレイクをつくり、タイミングを計って女性のカードとすり替えるつもりだった。

なんてことだろう。

男性は自信に満ちた態度で女性に目線で合図を送った。彼女は一気にめくった。

ダイヤの9だった。

「……すごい」

女性は心底驚いていたが、理央も同じように驚いていた。

「すごい、すごい！」

「すごい！」

女性の歓声に、理央も思わず唱和していた。女性と手を取り合って喜びを分かち合った。端で見えていた冷静沈着なマスター

でさえ、目を丸くして吃驚していた。彼女はきらきらと瞳を輝かせて彼の首にすがりつき、頬にキスした。そのくらいのリアクションに値する幸運だった。理央はふたりにカクテルをおごつた。ふたりは最高のカップルになるに違いない。心からふたりを祝福した。

ふたりの髪が乾いても、まだ外の雨は止まなかつた。彼らはさらに一杯ずつ飲み、マスターが気を利かせて差し出した小さな花束を快く受け取り、再び小さな折りたたみ傘を手にした。扉を開けると雨音が一気に響いてきて、湿気が店内へと吹き込んできた。雨の勢いは衰えず、アスファルトと戦争をしているようでさえあったが、ふたりはその中へ飛び込んでゆくものになんの躊躇いもないように見えた。

彼が傘を開いたとき、彼女は振り返ってそつといった。

「最後に、今度は私に予言させてください」

「予言？」

「今夜、理央さんにもきつといいことがあります」

理央はにっこりと笑ってみせた。「ありがとうございます」

「社交辞令じゃありません。当たります、きつと」

豪雨の中を駆けてゆくふたりを見送り、理央は扉を閉めた。

早いけれど今夜は閉めよう、というマスターの声に頷き、そのまま理央は扉に準備中の札をかけて施錠した。

ぱん、と店内にクラッカーが鳴った。びくりと肩をすくめて振り返ると、早業で派手なエプロンに着替えたマスターが、ワインボトルを片手にいった。

「誕生日おめでとう」

理央は笑った。

「なんだ、忘れられたのかと思っただけです」

穏やかに会話を交わし、ふたりにボトルを一本空けると、ちやうど深夜の一二時を過ぎていた。

今日の後片づけはぼくがやるからとマスターは優しさを見せてくれた。理央は深く感謝の気持ちを伝えて物置部屋に戻った。ほろ酔い気分を着替えを終え、携帯電話を確認すると、湯浅教授からメールが入っていた。翻訳の仕事の躍進を期待するとあった。

最後に挨拶をするため店内に戻ると、椅子を上げているマスターがカウンターの隅を目線で示していた。

「そういえば、プレゼントを託ことづかっていた」

青色のバイシクル・ライダーバッグ。表を返すと、それは

ハートの4だった。

カードを手にして、理央は裏口から飛び出した。

「やあ」

激しい雨の中、狭い庇の下に、背の高いひとりの人影があった。

レインコートを着た笈伊知郎が立っていた。

9

驚きでしばらく口が利けなかった。理央はどうすればよいかわからず、その場に立ちつくした。この七年間、狂おしいほど想い、絶望し、日常の中に押し込めてきた男が、いま目の前にいた。彼が人間であるのか、怪物であるのか、理央にはわから

なかった。彼が何であるのかわからなかった。ようやく言葉が出たとき、理央は自らの怖れを隠すために笑みを浮かべていた。

「七年ぶりで、その挨拶？」

「リハーサルを抜け出してきたんだ。新幹線の最終便にようやく間に合ってね。どうしても逢いたかった」

「どうやって帰るつもり？　もう東京行きは夜行バスも出ちゃってるけど」

寛は困ったような笑みを浮かべて、理央のもとへ歩み寄った。マスターと飲んでいる間、彼はここで待っていたのだろう。レインコートの生地は雨に滲んでいた。寛の差し出した両手に、理央は触れた。

初めて義手というものに理央は触れた。湿気を含んだ合成樹

脂は死んだ獣のように冷たく、吸いつくようで、その奥には多数のアクチュエーターがじりじりと動き続けているのがわかった。それでも、義手の細部は、かつて理央が見とれた筧の指先をよく再現していた。中指の長さも、小指のかわいらしさも、親指のつけ根の硬さも、その義手には宿っていた。

「このままだと濡れちゃう」

慌てて理央はハンカチを取り出し、義手を拭いた。筧は抵抗しなかった。その代わりに、ゆっくりと両手を持ち上げ、理央の頬を抱いた。

「前と変わったかい」

理央は義手の冷たさを感じながら、じつとその大きさを柔らかさを吟味し、小さなアクチュエーターの音を耳で捉えながらいった。

「……あまり変わらない」

「よかった」

「その笑窪も変わってない」

「そうかな」

笥は笑った。そして不意に、遠ざかるような眼差しになり、静かにいった。

「この手が本物で、ぼくが機械になったらどうする」

理央は笥を見つめた。激しい雨音が四方で暴れていた。

「……わからない」

「この両手だけが生きていたら？　それでも前と変わらないと思うかい」

「わからない」

「そうだな。ぼくもわからないよ」

笥の両手の冷たさが、理央の頬を凍らせていた。笥はゆつくりと手を離した。冷たさは残り、しばらくの間、唇は動かさなかった。

それをごまかすために理央は携帯電話を取り出して開いた。

「待って、タクシーを呼ぶから」

「もったいない、走っていこう」

「土砂降りなのに？」

「あるときよりは濡れない魔法があるさ」

そういつて笥は指差した。地味な男物の黒傘が壁に立てかけられていた。理央が思わず吹き出すと笥は肩を竦めた。

「あいにく、種を仕込んでいないんでね。さあ」

傘をつかみ、理央の背を押した。

「雨に濡れたら、腕が」

「濡れないさ」

理央は笥とふたりで、人のいない豪雨の町を走った。

一二年前と違うのはただひとつ、理央の片手が笥の指先とつながっていないことだった。あるとき理央は指先を絡めたまま小さな折りたたみ傘の中を走り続けた。しかし一二の方位を互いにひとまわりしたいま、ふたりは互いの傘を持ちながら、互いに水溜まりを避け、飛沫を立てながら、わずかな街灯さえ滲ませる深夜の町を笑顔で走った。

理央のマンションまで辿り着いたとき、ふたりは息を切らしていた。互いの顔は雨に当たり、髪の毛の先からしずくを垂らしていた。エレベーターに駆け込み、上昇する間に背伸びをしてハシカチで笥の髪を拭いた。しかしハンカチそのものがすでに濡

れており、ただ髪を撫でつけたただけだった。玄関先で笥はコートを脱いだ。動画で見たときと同じジヤケツトを羽織っており、そちらはかろうじて笥の予言通り無事の様子だった。理央は急いでバスタオルを取り出し、ひとつを笥に放った。

「待って、ドライヤーで乾かさないと」

「ぼくは大丈夫」

理央はバスルームに駆け込み、急いでTシャツに着替えた。

笥は立ったままリビングで待っていた。

理央は歩み寄り、笥の右手を取った。

「まだ冷たい」

「寒かったからね」

笥が指先を動かすと、アクチュエータの動く音がかすかに聞こえてきた。それほど静寂の空間にいま理央たちはふたりで

いるのだと、改めて知った。

理央はその手をゆっくりとさすりながらいった。

「……どうすれば温められる？」

答は返ってこなかった。静寂だけが広がっていった。待ち焦がれて理央が顔を上げたその瞬間、笥がそつといった。

「魔法がほしい」

「私の魔法？」

「理央の心臓で」

笥の右手が近づいてくる。理央は両手でその義手を包んだ。

彼の指先が左の胸元に触れた。はつとして、理央は笥の目を見つめた。笥の右手が胸を押さえ、理央は両手で包み、その手を抱いた。

心臓は動いている。理央は言葉を見つけられなかった。笥の

義手の冷たさが、Tシャツの薄い生地を通して肌に伝わってくる。理央は咄嗟に首を振り、泣き笑いの表情でいった。

「温まった？」

「わからない」

理央はくすくすと自然に笑っていた。わからないのは当たり前前だった。

「私の鼓動はわかる？」

笥が戸惑った顔で首を傾げた。そんな表情も懐かしくて、理央は笑って彼の手を離し、その指先にそっと口づけをしていった。

「だめ、だめ、これじゃ失敗」

「どうしたんだ？」

「最初は失敗してみせるのがお約束でしょ。だって、私の心臓

はごこじやない」

笥は眉根を寄せせる。理央は自らの胸の真ん中を指差して告白した。

「私の心臓は少しだけ右についているの。完全内臓逆位といってね、すべての内臓が左右逆向きなんだって」

笥は狐につままれたような顔をした。なんてことだろう、理央は自分のふるまいがばかばかしくなった。マジシャンなのに最後まで嘘を押し通せない性分なのだ。笥がむくれ気味にいった。

「全然知らなかったよ」

「だって、種明かしする機会なんてなかったもの。どんなときにいえばいいの？ ジプシー刑事みたいに一生に一度のトリックに使う？」

「おい、何の問題もなかったぞ」

「あつたら困るでしょう」

「ずるいな、まったく。七年ぶりに逢って、ここで一世一代の引っかけか」

「騙されていい気味。だからもう一度、ここへ」

「次は本当の魔法なんだな」

「早く」

笥は肩を竦め、今度は左手を差し出した。理央は両手でその手を迎え、自らの右胸に押し当てた。Tシャツ一枚を介して、理央と笥は再びつながった。

互いのくすくす笑いが少しずつ退いていった。やがて笑いは消え、理央と笥は息を殺していた。ぽたりと笥の髪からしずくが落ちた。

笥が囁いた。

「今度は鼓動がわかる……」

「……本当に？」

「ああ、理央の魔法だ」

笥の顔が近づいてきた。理央は直前までその瞳を見つめ、そして最後の瞬間に瞼を閉じて口づけをした。初めての夜に笥の手元からカードを引いたときのように。

そして、気づいた。

唇が離れたとき、鼓動は早まっていた。笥の手を包む胸と両手に体温が集まり、心臓の鼓動がその熱を得てさらに拍動を早めていた。無数の思い出が突然フラッシュバックのように脳裏を駆け巡り、すべてが一斉につながっていった。切羽詰まった思いで理央は囁き返した。

「あ のとき、どんな魔法を使ったの。同じカードを引き当てて
ために、私と同じようにデスクの中から——」
「しっ」

笥はたしなめる。だが理央はやめなかった。

「カードをめくるとき、あなたの動きが鏡のように見えたのは
なぜ？ あ のとき、私は右手でカードを取って、あなたは左手
でカードを——」

「静かに」

「だって、ほら、この手——」

理央は胸に包んでいた笥の手をさすった。自分の心臓に押し
つけ、手の甲を何度も、何度も、自らの手でさすった。

理央は歓声を上げた。

笥の左手には温もりが宿りつつあった。彼の左手は脈を打ち

つつあった。理央はその手をまじまじと見つめ、そしてキスの雨を降らせた。

見事なスライハンドだった。こんな大きなギミックを気づかせずにすり替えるとは。テレビの特番で自在にペンを回したその左手に、理央はありったけのキスの雨を降らせた。

寛が七年前と変わらぬ笑顔をつくった。理央は彼の両手を取り、右の義手と左の手を見比べた。これまで見た寛の演技が次々と心に蘇ってくる。どうして気づかなかったのだろう。彼は誰よりも努力をしていたのだ。理央でさえ知らないところで、大学に入る前からずっと。利き手のハンデ、イを克服するために。

「ねえ、待って、本当はわかっていたんでしよう。私の心臓がどっちにあるか、本当は知っていたんでしよう。知っててわざ

と最初に間違えたのね？」

「さあ、どうだろう」

笥は茶目っ気たっぷりに答えた。「秘密は知らないままのほうがいい。そのほうがなんと味わい深く、すばらしいことか」

ときは一九世紀半ば、大魔術師アラカザールはついに時期が来たことを告げ、若者に最後の教えを授けた。

「よいか、おまえさんはステージの上でも、お客さんと間近に接するテーブルの席でも、ただ自然にふるまえばよい。完璧な自然なふるまい——それこそがおまえさんの手元から秘密を隠してくれる見えないカーテンなのじゃ。おまえさんが自分ならではの芸術をおこなうための、それが唯一の確かな秘訣、真にすばらしい味方なのじゃよ。わしがおまえさんに教えられる

ことは何もない。自然だけがおまえさんを育て上げる。だから若者よ、信頼してそこにおまえさんの秘密を預けよ」

躊躇い気味に、若者は尋ねた。

「師よ、おっしゃることはよくわかります。しかし、師よ、告白します。私が本当に自然であるとはどういうことなのか、私には永遠にわからないような気もするのです。私はこれから変わってゆくでしょう。世界も変わってゆくでしょう。見て下さい、劇場の外を。蒸気機関車が走り、ジャカード織機が人知を越えた計算をして、モールス信号は地球の裏側まで飛び交っています。いったい何が真の自然なふるまいであり続けるのでしょうか。私は死ぬまで奇術を続けながら、そのことに悩んでしまっています」

おや、と大魔術師は意外そうな顔をした。そして自慢の髭を

撫でつけながら、慈愛に溢れた眼差しで若者を見つめていった。

「おまえさんは成長したよ。ならば緞帳の裏へ出てゆく前に、いま一度よく見よ、仰ぎ見よ、この世界を」

大魔術師アラカザールは両腕を大きく広げた。若者はそれに釣られて周囲を仰ぎ見た。舞台の袖口で、はるか高い天井と、そこに架かる多くの照明灯を見上げた。師のように両腕を広げ、ゆっくりと回って世界を見た。忘れていないつもりでも、多くのことを忘れていたことに若者は気づいた。そして両手を天に向かって伸ばし、自らの手の甲を、その指先を見つめた。子どもどころ鳥たちや夜空の星々をつかもうとした自らの手を見つめた。

大魔術師アラカザールの姿は消えていた。若者はひとり深く

息を吸い、そして舞台へと進んでいった。幕が上がり、拍手が沸いた。

【参考文献】アラン・ゾラ・クロンゼツク『大魔法使い アラカザールマジックの秘密』角矢幸繁訳、東京堂出版、二〇〇二

(魔法／おわり)

二五十一吉田自転車

吉田戦車

吉田戦車——プロフィール

1963年岩手県水沢市生まれ、漫画家。1989年に小学館「ビッグコミックスピリッツ」にて『伝染るんです』を連載開始。第37回文藝春秋漫画賞を受賞したこの作品は、各分野に大きな影響を与え、今なおそのインパクトは続く。ちなみに「サービス運営者」などを意味する言葉として「中の人」という表現が日本語に定着しているが、これは同作に由来する。代表作は『ぷりぷり県』（1995年、小学館）、『スポーツポン』（2007年、小学館）といった多数の漫画作品のほか、『吉田自転車』（2002年、講談社）などエッセイ作品も人気が高い。奥様は同業者の伊藤理佐氏。

twitter @yojizen

吉田戦車——メッセージ

岩手は私の故郷です。初めての海水浴は陸前高田、高田松原でした。初めて海釣りをしたのは、中学教師の父が単身赴任していた大船渡市松崎町でした。宮城とともに、様々な海辺の記憶が、宝物のように自分の中にあります。

福島県にはオートバイでツーリングに行つたことがあります。スキーにも温泉にも行きました。東京に住むようになってからは茨城、千葉というご近所への親しみがあるのももちろんのことです。

その大切な記憶を胸に、今回の「震災後」という新しい時代を、人々とともに生き抜いていきたい。たくましく、やさし

く、おだやかに生活していきたい。その思いは日々強まるばかりです。被災された方々の痛みを思わない日はありません。あえて常に、悲しみを、つらさを、無念を、忍耐を思い、自分を鼓舞しています。そして今の自分にできるかぎりのことをしていこうと思います。

被災地のみなさんが悲しみを乗り越えて努力する姿、現場で救助、支援活動にいそしむ多くの人々の姿から、勇気をもらっています。

前に進もう。静かに、勇気と誇りをもって。そう思えるのはみなさんのおかげです。

第一回——千歳烏山、寺町通りなど

11月21日、日曜日。

5月に新居兼、新仕事場に引っこして半年。職住近接はとても楽だが、はつきりと運動不足になり、体重がじりじりとふえている。

酷暑の夏がようやく過ぎたと思うまもなく、なんだか休日がとれないまま秋も終わろうとしている。そして来シーズンのスギ・ヒノキ花粉の飛散量は、比較的少なかった今シーズンの10倍におよぶこともあるという、花粉症の私にはとてもおぞまし

い予測が出た。ならば、もうすぐ冬になるうとしていているけれど、今が自転車的に貴重な好季節であるといっているだろう。

妻の伊藤（マンガ家、伊藤理佐）に許可をもらい、久しぶりの自転車散歩に出ることにした。

ストレスがたまっているため、新しい自転車をほしがる気持ちはわいたりしていたのだった。変速がないシングルギアのスポーツ車。ピストとかいう競技用の自転車の、ちゃんとブレーキがついて公道を走れるタイプ。そんなものがちよつと流行っているらしく、街角や店頭で見ても確かにシンプルでかっこいいので、心が動きかけた。

が、愛車のクロスバイクにも別に不満があるわけではないので、とりあえず物欲はおいておくことにした。心のすみで物欲が熟成するかどうか、自転車に乗りながら様子をみてみよう。

*

自転車に乗る服装は、歩く散歩とほとんど変わらない。ジーンズの右足に裾止めのベルトを巻き、軽いジャケットをはおり、頭にはキャップ。背中には小さめのデイパック。



自転車の変速ギアは24段もあるわけだが、前のギア3枚のうち、真ん中しか使っていないし、うしろのギアも3つか4つ程度。そんなのっそりした乗り方なら、ヘルメットやグローブやびっちりしたパンツなどまったく不要なのである。

しかも前カゴをつけている。ちよつと楽に乗れるママチャリといったところであり、24段は過剰だよなあ、とすごく思う。シングルギアに憧れる気持ちはそのへんからもきているのだっ

た。

いい天気であり、街の紅葉もいいかんじだ。

京王井の頭線、久我山駅から「岩通通り」の坂をのぼってゆ

く。岩通とは岩崎通信株式会社であり、戦前からこの地にある大企業である。岩通の手前、岩崎橋のところまで自転車をとめ、いずれ川を中心に4車線の大道路が通る予定の玉川上水を目に焼きつける。川沿いの未舗装の歩道がいとしい。

実はこのへんの道は、半年前まで私の通勤ルートであった。妻の伊藤のマンションを自宅として以来4年あまり、20分ぐらいかけて自転車通勤していた、なじみの道なのだった。そういえば変なことを思い出した。

ちよつと先には國學院久我山中学・高校があり、その近くのテニスコートで、巨匠・篠山紀信さんに写真を撮られるという仕事をしたことがあった。ああ、そんなことがあったよ。

雑誌ブルータスの記事で、劇作家の本谷有希子さんといっしよに撮られたのだった。本谷さんがメインで、芝居のチラシを描いたことがある私が添え物という構成だったが、なにやっ
てんだ。

誇らしいような妙なような思い出を胸に、久我山病院をこえ、しばらくいって右折した。目に入る樹木がふえてきている。26もの寺院が建ち並ぶ「寺町通り」とよばれる一画に入っ
ていくのだ。

関東大震災復興時の区画整理のときに、多くの寺が都心や下町からこの地に移転してきたのだという。カラスが多いから烏

山、と名づけられたという説もあるような、かつて雑木林や野っ原が広がっていたこの土地に、いきなりおごそかな移民団がやってきた。カラスもタヌキもびっくりだったのではないだろうか。

ラーメン激戦区などといわれる場所があるが、26も店があることはないだろう。ここは激戦の名に恥じない、寺激戦区であるのだった。

私服の坊さんがガーデンニング用ブロワーで、門前の落ち葉をぶわーっつと吹きはらっている。他の敷地へいけということだろうか。心休まる寺院風景の背後の、戦いの激しさを思わせる（冗談です）。

私
販



ゆっくり立ちこぎして塀の中の庭園をのぞきこんだりしつつ、道は中央自動車道の高架下をすぎ、甲州街道をこえた。4年間かよった（週の半分は泊まりこんでいた）千歳烏山の街に入っただけ。久しぶりの感覚であり、さあ今日も仕事だ、という気持ちに一瞬なつたが、もう仕事場はなく、仕事はしなくていいのだった。

*

半年ほどでは、なつかしいというほどの感情はわいてこない。それでも見慣れたなじみの街並みは、温かい気持ちをやびおこす。散歩して、メシ食って、食べものや画材や本を買い、マンガのネタをしぼったのだ。

ここは路上駐輪のマナーが非常に悪い街でもあるのだが、日曜日のせいか、まだ午前10時半ぐらいだったからか、歩道や路肩の混沌はそれほどでもない。

踏切でつかまった。朝晩は開かずの踏切になるので、遠まわりにはなるが、踏切を利用しないで高架下や地下道を通るルートも開発していたのだが、今日はなつかしい「まだかよ」という感情に身をゆだねよう。電車3本の通過をまって、無事通ることができた。

南口にわりと最近できた「1時間は無料」という駐輪場に自転車をとめ、歩いて北口にもどることにした。立ち食いそばを

すすろうというのだった。ひっこし先からわざわざまた食べにきたいと思う店はそんなに多くないのだが、【中華そば 榮じ】をはじめとするその何軒かは、いずれもまだ開店前だった。

その中で、私がこの街でもっともかよった【深大寺そば】は、立ち食いであるがゆえに（イスはある）年中ほとんど無休で朝早くからやっているのだった。すばらしい。かつては自宅で朝食は食べず、この店で第一食をとることが多かった。特徴をいえば、店員さんが女性だけであるところだろうか。夜は知らないのだが、少なくとも日中はそうだった。各種野菜天が地道においしい個人店だ。おにぎりやいなりずしのテイクアウトもできる。

玉子そば300円をたのむ。温泉玉子と生があるのだが、生にした。おつゆがぬるめなので、白身が雲のように固まる「月見の景色」にはぜんぜんなっていなかったが、相変わらずスッキリしたおいしいおつゆと、普通のゆで麺がうれしい。黄身をつるこわさないように注意深く白身と麺を食べ、最後に黄身をつるりといただいて食事終了。

なじみのスーパー「シミズヤ」で妻にたのまれていた雑穀を買い、ふたたび自転車にまたがった。通称「八間道路」とよばれる通りを南下する。

あ、仕事場に借りていたマンションのゴミ置き場が立派になっっている！

ワンルームが多く、ほとんどが若者の住人であるため、ゴミ出しのマナーがいいとはとてもいえなくて、最年長（だったのだ）住人としてはイライラさせられっぱなしであった。カラスにゴミ袋をつつかれ、ぶちまけられることなどしよつちゅう。守れよ収集日。そして分別しろちゃんと。



です

気分は
管理人
です

気分は 管理人

ロッカータイプのごみ置き場になっていたので、多少は改善されただろうか、などと思いつつ、榎の交差点を通過。しばらく進むと、祖師谷通り。小田急線、祖師ヶ谷大蔵駅がもよりの通称「ウルトラマン商店街」に突入する。

*

かつて円谷プロがあった祖師ヶ谷大蔵。だからこそ、かなり気合いの入った町おこしである。「ウルトラマン商店街」プロジェクトであるが、円谷プロは現在八幡山のほうに移転してしまつた。

地元民としてはさびしいだろうが、私の心の中では「砦」の

地名は、永遠にウルトラシリーズと分かちがたくむすびついている。主題歌の時のテロップの「キヌタラボラトリー」（録音室、編集室などがあつた部署らしい）という文字が目には焼きついていてるためであるが、上京して初めて円谷プロと、その近くにある東宝撮影所に「参拝」し、

「砧つて……キヌタラボラトリーのキヌタか！」
と思ひあつた時には興奮したものだ。

だから、やはりこの界限は、たとえ本社が別の場所に移転しても、ウルトラの聖地であることにかわりはないと思う。

自転車をゆつくりこぎながら、ウルトラマンやセブンをモチーフにした街灯を見物する。いいデザインなんですよこれ

が。駅からはかなり北に歩いたところに、マンとセブンの街灯はかつこよく立ち並んでいる。

人通りが多く車も通るせまい商店街なので、自転車をおりて押しながらゆつくり歩く。駅にもウルトラマン像をはじめとした、何点かのオブジェがある。小田急線高架下をすぎ、南商店街に入ると、街灯は今度は「帰ってきたウルトラマン」をモチーフにしたものになる。こんなに街灯をガン見する散歩もはじめてだ。

おどろいたのは、いきなりバルタン星人モチーフの街灯が2本ほど立っていたことだ。だいじょうぶかウルトラマン商店街。円谷プロ移転のあと、商店街の人にもウルトラマンたちも気

づかないうちに、バルタン星人の侵略の魔の手が着々と……と
いうようなことだろうか。

などと全身全霊で楽しんでいるうちに、商店街は終わった。
『帰ってきたウルトラマン』のアーチを見上げて写真を撮って
いたら、子連れの自転車奥さんに声をかけられた。

「祖師ヶ谷大蔵駅はどちらですか？」

ウルトラマンを写真に撮っている、明らかに地元民じゃない
オヤジに道をきく美しい奥さん。宇宙人が化けているのだろう
か、とも思ったが、普通に教えてさしあげた。突然シューーツ
と口から催眠ガスを吹きかけられたりはしなかった。



たしかその先の坂を下っていく途中に円谷プロはあり、かつては入り口のところにウルトラマンやミラーマンが立っていたのだが、今はもうマンションになっていてその気配もなく、さすがにさびしい気持ちになった。

*

せっかくだからと仙川沿いにある東宝スタジオを見ていくことにした。ここもしばらくこないうちはずいぶん様子が変わっている。

あつ!!

げげっ、「東宝日曜大工センター」が「くろがねや」という店になってる!!

東宝スタジオに隣接する東宝日曜大工センターは、小田急沿線に住んでいたころの、心のセンターであつた。無骨な専門工具類と、すぐとなりで映画を作っている空気がたまらなかつた。

ああ、あのマスコットキャラのイラストも、もうどこにもない。軽食コーナーもなくなっている。東宝日曜大工センターの品ぞろえを尊重しているようなかんじはあるのだが、こんなことをいってもどうしようもないと知りつつ、あのなんともいえない「昭和の空気」は消えてしまった。



ちんちん

うつろな気持ちで新しくなっていた東宝スタジオ入り口の前を通ると、新しいゴジラの像があった。『七人の侍』の巨大壁画をバックに咆吼するその姿はあいかわらずたくましい。特撮用の大プールもとつくなくなってしまったこの撮影所だが、CG技術の進歩をえて、ふたたびこの怪獣王がスクリーンで暴れまわる日はくるのだろうか。

映画関係者の友人が何人かいて、そのツテで東宝や円谷の施設を見学したこともあった。『ウルトラマンネクサス』をやっていたころだ。着ぐるみやミニチュアやスタジオセットに間近でふれた宝物のような思い出だが、その友人の一人は先年、若くして亡くなってしまった。気のいい酔っぱらいだった。そんなことも走る脳裏に浮かんでは消える。

世田谷通りを東にこぎ進み、帰路についた。

(ニュー吉田自転車／おわり)

平安デジヤブ

— 抱擁国家、日本の未来

前野隆司

前野隆司——プロフィール

1962年、山口県生まれ。民間企業キヤノンの技術者として実績を上げたのち、アカデミズムの世界に転身したという、異色のキャリアを持つ研究者。その活動は多様で、触覚についてユニークな研究を行ない、また工学の知見から人間の脳モデル「受動意識仮説」を発表。現在は文理融合領域、慶應大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授としてヒューマンマシンインタフェース、ロボットから、心の哲学、倫理学、教育学、組織・地域活性化、幸福学まで、あらゆるシステムのデザインとマネジメントに興味を持つ。

『脳はなぜ「心」を作ったのか——「私」の謎を解く受動意

識仮説』(筑摩書房、2004)、『錯覚する脳―「おいしい」も「痛い」も幻想だった』(筑摩書房、2007)、『脳の中の「私」はなぜ見つからないのか?―ロボティクス研究者が見た脳と心の思想史』(技術評論社、2007)、『記憶―脳は「忘れる」ほど幸福になれる!』(ビジネス社、2009)、『思考の整理術―問題解決のための忘却メソッド』(朝日新聞出版、2009)、『思考脳力のつくり方―仕事と人生を革新する四つの思考法』(角川ワンテーマ21、2010)など、活発に著作も発表している。

前野隆司 <http://takashimaeno.com/>

前野隆司——メッセージ「日本の力を結集しましょう」

このたびの震災の悲しみや苦しみの中におられる方々にとって、もつとも必要なものは、食料、住居、安全、健康、そして人々のつながりだと思います。

このような折に電子書籍を無料でお届けすることが果たしてBESTなやり方なのか、私には結論を出せませんが、日本の強さを願って書いた「平安デジャブ」がほんのわずかでも人々の元気の元になるならと思います、ささやかながら私にできることのひとつとして、電子書籍無料版に賛同いたしました。

これから、被災地にとって、日本にとって、大変な時期が続くと思いますが、いまこそ、ともに乗り越えましょう。

悠久のときを思い、皆で力を合わせ、悲しみを乗り越えて、一人ひとりができることをして、日本の未来を築きましょう。私の日本論がその一つの契機になれば、望外の喜びです。

前野隆司

青い目の少女との出会い

年年歳歳、花相似たり。歳歳年年、人同じからず。

何度年を重ねても、花はどれも似たようなものだ。人も、毎年、生まれては死んでゆく。しかし、一人として同じではない。

時の経つのは早いもんだね。

あれは今から十六年前のことだった。まだ幼かった飴居利香が、栗色の髪をなびかせ、黒い三輪車に乗って、私のところに来てきたのは。

利香は、まだあどけない七歳の少女だった。彼女が私の人生をこんなにも変えるとは、あの時は、思いもよらなかつたもん

だよ。

「おじいさん、ドアを開けて」

まだ幼い利香が我が家のドアをたたいたのは、六月のある日のことだった。

「おじいさんってほどの歳じゃねえんだよ」

ぼそぼそと独り言を言いながら、私は、古く重いドアを開けた。まぶしい光の中、初めて目にした利香は、小娘のくせに、見たこともないくらい自信にあふれた美しい少女だったよ。ひと目で日本人ではないとわかる、目鼻立ちの整った娘だった。

今思えば、彼女はアメリカ人だったんだね。実は、アメリカの少女を見たのは、あのときがはじめてだった。長いまつげの下の大きな透き通った青い目を見つめると、どこまでも吸い込まれそうだった。

年甲斐もなく、どきどきしたよ。

しかし、私は、頑として追いついたものだ。「私はだれにも会わない」と。

それまで私は、長い間、部屋に閉じこもっていたんだよ。驚くなかれ、二十年以上もの間。外との交渉を絶って、自分のことばかり考えていたんだ。いや、別に病気だったわけではない。疲れていたわけでもない。外の人たちと会う必要がないと思っていたただけなんだがね。引きこもりというのはそういうものだよ。私は幸せだったんだ。私はあなただ。決して暗く陰湿だったわけではない。

今の若い者から見たら古臭いと言われるだろうが、趣味は、浮世絵や、お茶や、陶芸。ささやかな古典文化を一人楽しんでいたものさ。鎮まり返った心でね。当時の私は、たとえば言え

ば、隠居した武士のようだった。貧しくてもいい。気品を保つて、静かに暮らしていければ、それでいい。ほかに何もいらない。そう思っていた。

しかし、利香と会ってから、私の人生は大きく変わったよ。いや、今となっては、本質的には何も変わっていないようにも思うんだが。

利香とのめまぐるしいほどの思い出には、いいことも、悪いこともあった。私は生まれ変わったと言ってもいいほどだ。

今日はその、私のほろ苦い思い出話をしようと思う。

東洋思想への傾倒の時代

あ那时候、七歳の利香は何度もドアをノックして言ったもの

だ。「外に出て来て」と。

最初は、どうして彼女が私のところに来たのかわからなかった。幼い娘の気まぐれだろうか。いや、古いながらも清楚な私の屋敷に興味を持ったんだろうか。私の家にあつた、浮世絵や、陶器や、金銀銅でできた金属細工のうわさを聞きつけてやっってきたのだろうか。

当時、私はその価値を気にしなかつたんだが、今思えば、私が収集していた美術品、骨董品は、かなりの数があつたからね。利香は、したたかに、私の価値を値踏みしていたんだ。

私はかたくなに外に出るのを拒んだものだ。私は今のままがいいんだ。今の生活に満足しているんだから、干渉しないでくれ、と。それで、その日の利香は帰った。

しかし、利香は数カ月後にまたやってきた。そして、意志の強そうな、睨みつけるような目で、再び、「外に出てきて」と言った。私は根負けし、ついに引きこもりをやめることになった。

私が引きこもりをやめた理由を話そう。

引きこもりとは言っても、私は、私の家の隣にあった大きな屋敷の住人、清さんとは細々とお付き合いをしていたんだ。清さんの援助のおかげで暮らしていたと言ってもいい。清さんは、私よりも先輩。いろいろなことを教えて頂いた恩師だ。中国生まれのかつぷくのいい中国人で、漢詩から、孔子や老子、仏教の無の心のことまで、いろいろと教えてもらったものだ。博学だったなあ。私は、引きこもっていた間、清さんを通して世界と接していたと言っても過言ではない。清さんは、

根っからの商売人だった。服飾産業とか、金属加工業とか、銀行を経営していて、二十年くらい前までは有名な大富豪だったそう。昔は儲かった、というのが清さんの自慢だった。

万物は流転する

ところが、時代は移り変わるもんだ。驚いたことが起こっていた。清さんの家の繁栄は、利香のお父さん——英男さんといつたかな——に取って代わられていたんだ。栄枯盛衰だね。英男さんは、製造業の起業で大成功して財閥を率いているそう

だ。

彼は、清さんに代わり、大富豪になっていたんだ。私が引きこもっている間にね。

幼い利香はまだ富豪ではなかったが、驚くなかれ、今から十年前には、親を抜いて、世界一の富豪になったんだよ。たいしたもんだ。

そして、清さんの繁栄は見る影もなくなった。築いたものを失うのは早い。没落した清さんは、屋敷の一部さえも英男さんを買収されてしまったんだ。

清さんは、負けん気の強い人だった。貧しくなったあとも、真っ赤な顔をして、必ずまた皆を見返してやる、と悔しがっていたものだ。誰の目にもそれはもはや困難に思えたがね。

うかうかしていると、私の屋敷も利香の親子に占領されてしまっうんじゃないか。引きこもってばかりいないで、人と張り合って生きていかなければ、この身が危ういんじゃないか。私は、そう思った。

それで、私は、重い腰を上げて外に出ることにしたんだ。いざとなれば、力は出てくるもんだね。私は、静かな隠居生活をやめて、若いもんとやり合おうと決意したんだ。

そして、私は、久しぶりに外の空気を吸った。

外界は、まぶしかった。私が引きこもっている間に、世の中は大きく変わっていた。

それから七年間、英男さんや利香からは色々なことを学んだよ。彼らは、私の考えは古いからと、新しいことをいろいろと教えてくれた。論理とか、科学とか、自由とか、資本主義とか。西洋流の学問をね。文明開化だね。それから、西洋流の武道。引きこもっていたころの青白さが嘘のように、私は強くなった。

転機

転機だったのは、七年前の利香との争い。大人げないと言われるだろうが、私は利香と徹底的にやり合ったんだ。そして、こてんぱんに、負けた。

当時、利香は十六歳になっていた。もはや、少女ではない。白い肌がはちきれんばかりの魅力的な女性だった。あの若さで世界一の富豪だというんだから、ものすごいやり手だ。ものごとを瞬時に判断する力があって、正義感が強く、何でも白黒つけたがる気の強い娘になっていたもんだよ。

しかし、歳は私の方がずっと上。小娘との喧嘩で負けるわけがないと思っていたものだ。

で、半年の間、私たちは争った。

争いの原因？ 領土問題とでもいおうかね。英男さんや、利香や、その仲間が、私の古くからの友達のところにもやって来て、経済力と暴力で、私たちのなわばりに深く入り込んできたのさ。私は、友達を失うより、友達を従えて（侵略し服従させて）対抗しようとした。で、見せしめのつもりで、私は彼女に威嚇攻撃をした。それが彼女を怒らせたんだね。強い彼女に手を出した者は、それまで一人もいなかったんだから。

実を言うと、私は腕っ節には自信があってね。それまで、喧嘩で負けたことがなかったんだ。いや、私は基本的には孤立主義者だったから、そんなに何度も喧嘩をしたわけではないがね。正確に言うと、小さな喧嘩で負けたことはあったが、攻め込まれて身の危険を感じたことはなかった。だから、理由もなく、誰にも負けない自信があった。神様が私の味方をしてくれ

る、くらいに強気で楽観的だったね。

しかし、完敗だったよ。利香たちは若くて、新しい喧嘩のやり方を知っていたからね。

私は、これまでの人生でかつてないほどにぼろぼろになった。悔しいも何もない。呆然だ。無条件降伏だ。もう、利香の子分になってもいい、殺されたっていい、という状態だったね。実際、もう死のうと思っただほどだ。死を生き生きと意識したのは、生まれて初めてのことだったよ。

一度きりの抱擁

しかし、争いが終わった後の利香は、一転して優しかったね。私は、負けイコール死だと思っていた。しかし、彼女の考

え方は違っただ。争いが終わった後は仲間だという。

実を言うと私は観念し、切腹しようと思いつめていたんだが、私の屋敷は彼女に占領されていて、私はいつも見張られていたから、なににもできなかつたんだ。

ある日、私が呆然と落ち込んでいると、彼女は突然私を抱きしめて、言った。

「もう、大丈夫」

彼女の愛に包み込まれた瞬間だった。あのとときの利香の圧倒的な包容力を、今でも鮮明に思い出せる。

耳元で聞こえた、ゆっくりと落ち着いた息遣い。暖かく柔らかい胸のふくらみ。そして香水のにおい。利香のにおい。母に抱かれた子供のような安らぎだった。

私は泣いた。涙が止まらなかつた。そして、私は、死ぬのを

踏みとどまったんだ。

利香は、古いやり方を捨て、新しい生き方をするのなら、これからは仲間だ、と言ってくれた。私を守るとさえ言ってくれた。

彼女にしてみれば、あれは、私の古さを捨てさせるための戦いだったんだな。彼女はウインクして言った。「これからは私の時代よ」と。

そして、私は、利香に恋をした。

老人が、十六歳の少女に恋をするなんて、非常識だと言われるかもしれない。しかし、年齢は関係ない。

価値観も生まれも育ちも違い、年齢も離れた私が利香に恋をしたのは、今思えば、アンバランスだったのかもしれない。しかし、恋は盲目。

私は、これまでの私の価値観をすべて捨て、清さんへの恩も捨てて、彼女のいいなりになったものだ。笑いたい者は、笑えばいい。私は、本気だった。私は、利香に好かれない一心で、彼女のやり方を何でも受け入れたよ。

それから、私は、利香のような若さを身につけようと思つて、一念発起、頑張ったものだ。懐古趣味は捨て、生まれ変わろうとした。脱亜入欧という言葉があるが、まさにあれだよ。私は、利香のことを本気でパートナーだと思つていたものだ。彼女から見たら、私は多くの友人の中の一人に過ぎなかったんだがね。

その後の私はといえば、がむしやらに頑張ったよ。四年前には、世界第二の富豪にまで駆け上った。当時はエコノミックスアニマルと言われたものだ。二年前には、バブルといわれた。そ

の後は、バブルがはじけて、今は、借金地獄に陥ってしまったけどね。

私は国家

いまや、利香はもうすぐ二十三歳。世界は自分のものだと言わんばかりの元気に満ちている。最近はちよつと自信を失いかけている面もあるけどね。とはいえ、まだまだ若い利香は、私のような老人から見ると、うらやましいね。私は、百七十歳。

え？ そんなに長生きできるのかって？ 人間じゃないからね。私は、国家。

遅ればせながら、自己紹介をしよう。もうお気づきだろう。私の名は、日本。

飴居利香の本名は、ユナイテッド・ステイツ・オブ・アメリカという。若いだけあって、しゃれた名前だね。

利香は本当は、二百二十七歳。え？ 二十三歳じゃないの
かって？ ああ、人間にたとえるために、実際の歳の十分の一
にサバを読んでいたんだよ。

隣の屋敷の清さんの本名は、中華人民共和国。百六十年前に
は清しんと名乗っていたので、清さん。年齢は、四千歳。

私は、大和朝廷の頃から数えて、千七百歳。

そして、私の引きこもりは鎖国のこと。黒い三輪車は黒船。

利香たちと争ったのは、もちろん、第二次世界大戦。

ここからはまたサバを読んで、十分の一の年齢で話をしよ
う。そのほうが、人間にとっては実感しやすいだろうからね。

名前は本名に、比喩は事実に戻そうか。

大国の攻防

最近になって、私はつくづく思うんだよ。やっぱり、年齢も育ちも違うアメリカ（利香）に恋をしたのは間違いだったんじゃないかってね。

いや、もちろん、今の時代、アメリカとうまくやっていかなければやっていけないのは確かだ。アメリカに教えてもらった自由主義や民主主義。そして、日米安全保障条約。

これらがあったから、私は効率的な国家になり、軍事支出や人的コストをかなり抑えられた。アメリカのおかげで、私は経済成長に専念し、アメリカに次いで世界第二位のGDPを維持してこれたんだ。

しかし、今年、中国（清さん）のGDPが、二十年ぶりに私を再び追い抜くんだよ。

それに、これから二年（実際は二十年）以内に、アメリカのことも抜き返すといわれている。もともと何百年も世界一の富豪だった中国が、産業革命で勢いをつけたイギリス（英男さん）や、その娘のアメリカに負けていたのは、ほんの二十年間のことだ。長い人生から見ると、つかの間のことだったね。昔の秩序に戻るのかなあ、とつくづく思うね。

この地球上で最も長老といわれているのは、中国と、インド。エーゲ文明から数えると、ヨーロッパもそうだね。みなさんざつと四百歳から五百歳といわれている。あまりに長生きなので、正確な年齢は今となつてはよくわからないのだけれど。

インドも、ここ二十年くらいは低迷したけれども、二年後に

はGDP世界第二位になるだろう。四年後には、中国とインドのGDPの合計が、世界全体の四十五パーセントにもなるそう
だ。これは別に驚くほどのことではない。ほんの三十年前も、
そうだったのだから。

私のGDPの順位が下がるのを見て、日本の地盤沈下、と言
う人がいるが、そんなことを言う人は、視野が狭いんじゃない
かと思うよ。私の人口は、世界人口の二パーセント。そんな国
のGDPが世界の八パーセントを占めていることの方が、歴史
のいたずらなんだよ。

私はもともと平和主義者でね。平等で平和な世界がいい。私
は、自分の発展のことばかり考える若い国家とは違って、世界
の発展のために尽くす長老でありたいね。こんな私の気持ち
を、みんなにもわかってほしいんだ。

人間という小さな存在

私たちが国家から見ると、残念ながら、人間の一生は虫けらのように短い。わずか十年弱だ。小さな人間がそのものさしで世界を見てしまうのは致し方ないとはいえ、なんとまあ、いつも小さなことで騒いでいることか。

先ほども述べたように、私のGDPが世界第二位になったのは、今からわずか四年前のことだ。バブルといわれたのが、二年前。バブル後の低迷は、わずか一年。百七十年の私の生涯から見ると、とても短い間の出来事なんだよ。

なのに、わずか数年前には大金持ちだとお祭り騒ぎしていた人間が、今では閉塞感だ、衰退だと騒いでいるんだから、なん

とまあ、了見の狭いことか。

もうすこし、落ち着いて、大国の盛衰のレベル、数百年の単位で、ものごとを見てもらえないものだろうか。

まあ、人間ばかりを責めるのは独善的だろう。私自身も、自分のこれまでの長い人生のことをまらで記憶喪失のように忘れ、若いアメリカに恋をしていたんだからね。お恥ずかしい限りだ。

しかし、最近は、歳のせいか、昔の事をよく思い出すんだよ。今は、あのころに似ているなあ、と。平安時代に。

世界一サステナブルな国家、日本

皆さんは、日本語の文章を読んできているところを見る

と、私の中の小びとかな。

人間の脳のニューラルネットワークを小びとにたとえ、人間の心は無意識下のたくさんの小びとの役割分担の結果として生じていると言った人がいた。

「脳」と「小びと」の関係は、「国家」と「国民」の関係と同じだね。人々は思い思いに生きていくようにだけれど、国家というレベルで見ると、国家の意思を作り出している部品だともいえる。

そういう意味では、皆さんは私の一部だね。私自身だ。

私は元来謙虚な性格だから、自慢するのは気恥ずかしいんだが、自分の一部に言い聞かすぶんには、自慢をしたって誰にも迷惑をかけないだろう。だから、すこし私の自慢話を聞いてもらえないだろうか。

中国やインドやヨーロッパは私よりも長生きだといったが、彼らはいわば、何度も総入れ替えをしている。人間で言うのと、手足を作り替えたり、内臓や脳を入れ替えたりして生き永らえているサイボーグだ。ずっと生きているとはいえ、実は、身体 のすべてが、生まれたときとは入れ替わっている。

中国は、殷、周、春秋戦国、秦、漢、三国、晋、南北朝、隋、唐、五代、宋、元、明、清、中華民国、そして中華人民共和国と、さまざまに支配者を変えて、四百年間生きてきたに過ぎない。

インドもそうだ。初期には民族が入れ替わったし、一時はイギリスに支配されていたこともある。

ヨーロッパにいたっては、昔、ローマ帝国として南部が統一されていたこともあるが、長い間、分裂状態を続けた後、政治

的統合を目指して欧州連合が発足したのはほんの二年前のことだ。

つまり、民族的・政治的に入れ替わらずに長生きした国家は、ほとんどない。

それに対し、皆さんもお気づきのように、私は百七十年間、一貫して、ひとつの国だったという自負がある。ご存じのように、政治形態は変わったとはいえ、天皇家はずっと続いていて変わらない。まあ、一瞬、つまり、百七十年のうち、0・六年間、アメリカに占領されたことはあったけどね。まあ、これは誤差みたいなものだ。そういう意味では、私は、一貫した国家として、世界最長老だと自負している。他にこんな国はない。孤高の国だよ。私は、「世界一、サステナブル（持続可能）な国家」なんだよ。

私自身、ここ数年間、このことをすっかり忘れていたことを反省しているんだ。もちろん、私の脳の小びとである、国民の皆さんも、忘れていたことだろう。

みんな、ぜひ思い返してみてほしい。皆さんは、世界一、サステナブルなやり方を知っている国の国民なんだよ。近視眼的にならないでほしい。長い目で見たときに、どこの国がいちばん、生き延びるための正しいやり方をわかっているのかを、私の一部である皆さんに、はっきりと自覚してほしいんだよ。

いや、まあ、パラドックスみたいなもので、『「自分たちのすごさを自覚していない」ことが、日本人のすごさの秘訣』なんだけどね。

だから、私も少し躊躇しているんだ。魔法の秘密は教えないほうがいいのかもしれない。秘密を知ってしまった瞬間に、魔

法は解けてしまうのかもしれないからね。

でも、話そう。国民が、不必要な閉塞感や無力感、敗北感にさいなまされているのは、痛々しくて見てはいられないから。

秘訣は、思想的雑居性、無自覚的融合性、無限抱擁性

私は、なぜ、世界一サステナブルな国家であり続けてきたのか。

その秘訣は、皆さんの「思想的雑居性」「無自覚的融合性」「無限抱擁性」だ。これらに尽きる。これらが、私たちの、他の国にはない優れた特徴なんだよ。

「思想的雑居性」と「無限抱擁性」は、今から五年前に出版された「日本の思想」（岩波新書、一九六一年）で丸山眞男さんが

使った言葉だ。

実は、彼は、必ずしも肯定的な意味でこれらの表現を使ったわけではなかったんだが、私は楽観主義者なんでね。応援の言葉と受け止めているんだよ。それから、丸山さんは、神道の説明の中で「思想的雑居性」と「無限抱擁性」にふれたんだが、宗教に限らず、私の文化全般についても同じ考え方を拡張できると思う。そこで、ここではこれらの言葉を使って説明しよう。

まず、日本人の「思想的雑居性」とは何か。

読んで字のごとく、思想が雑居していても気にしない、ということだ。

よく言われることだが、日本人は、正月には神道、クリスマスにはキリスト教、葬式は仏教、というように宗教の境界があ

いまいだ。このことは、欧米のものさしで見ると奇異に映るといわれる。

もつといえは、現代人は、仏教と神道は別物だと思いかもしれないが、これは、ほんの十四年前の明治維新以来のことだ。それまで、仏教が伝来してから百年以上の間、仏教と神道はずっと融合していた。神仏習合だ。神社と寺院は同じ敷地に交じり合っていて、庶民は神と仏を別の宗教と意識する必要がなかった。これに対し、明治政府が、天皇を神格化した新しい神道を作るために、徹底的な神仏分離を行った。敷地も人も明確に分けた。その影響が現代に残っているから、現代人はずっとそうだったかのように錯覚しがちなだけだ。

あらゆる思想が雑居する

思想的雑居性は神仏に限らない。

戦後はアメリカ型の資本主義を導入したにもかかわらず、世界で最も成功した社会主義社会と揶揄されるように、個人ではなく組織や社会を重視する考え方が日本人の根底にある。革命で自由を勝ち取ってきた諸外国の国民と違って、日本国民の政治的なスタンスはあいまいなままだ。日本の政党は、イデオロギーを基軸につくられていないから、資本家対労働者、小さな政府対大きな政府、軍拡対軍縮のような議論にはなかなかならない。このように、イデオロギーは雑居している。

医学部では西洋医学を学ぶが、民間には漢方医や整体が普通に共存している。スピリチュアルブーム、と行って、非科学的な死後の世界を容易に受け入れる人も少なくない。なんの思想

的根拠もないのに、多くの人に、子供の名前の画数とか、風水とか、星座占いが受け入れられている。このように、科学、宗教、迷信も雑居する。

日本人は、これらの思想的雑居が普通だと思っっているかもしれないが、少なくともアメリカではそのようには考えない。ある宗教を信じるか否かはゼロか一かだし、自分はどのイデオロギーに立脚するか、どのような医学を受け入れるか、どんな思想を信じるかは、明確だ。真か偽か、ゼロか一か、考えが明確であることが、知的であることだと考えられる。逆に、そうではないあり方は劣っていると考える。一神教を高等宗教と呼び、神道のような自然崇拜的なあり方を原始宗教と呼ぶのも彼らの優越感の表れだろう。

それを真に受けて、思想的雑居性は日本の欠点だ、と考える

日本人もいる。若いアメリカにならって、思想を明確化すべきだ、と。私も一時はそう信じた。しかし、そうだろうか。世の中は複雑で、本来はアナログだし、多様な考えがある。光は粒子なのか波動なのかを決められないのと同様、人間はいい人と悪い人に分けられるものではない。

それぞれの立場には、それぞれの正論がある。若者向けのドラマや漫画では、いい人と悪い人をはっきり分けるが、世の中そんなに簡単じゃない。白黒つけたがる、若いアメリカの考えを、今の日本人は、受け入れすぎなんじゃないだろうか。

それから、思想的雑居性は日本の特殊な特徴だ、と言う人がいる。しかし、そうでもない。インドのヒンドゥー教は、仏教もその一部だと考えるほどに多様で雑居的だし、中国の政治と経済は、「資本主義に共産主義が打ち勝つための第一歩として

資本主義経済を導入する」という雑居的建前になっており、さらに、非公式にはそれ以外の立場の中国人も増えている。つまり、古来、東洋では、思想的雑居性は特殊なことではなく、むしろ一般的だったというべきだろう。しかも、それは、思想として劣っていたわけではない。むしろ長い時間の試練を越えた経験に基づく知恵だ。ただ、効率重視の近代的合理主義とは相容れないだけだ。

産業革命以来、ほんの二十年間、ゼロか一か、自分か他者か、中か外か、原因か結果か、白黒をはっきりさせて雑居は許さないという西洋近代的考え方が世界を席卷したに過ぎない。現代日本人は、そのような西洋近代の、論理・科学重視の教育を受けているから、あたかもそれが自明のことであるかのよう
に勘違いしがちであるにすぎない。

よろしいだろうか。善悪、白黒、自他、内外を分ける考え方は、デカルト、カント、ニュートンの生きた近代以来、ほんの二十年間の流行りにすぎない。その前は、何百年間も、そうではなかったんだ。

何百年間も曖昧な思想的雑居時代が続いていたのを修正した、合理的な西洋の近代こそが正しいのではないかと反論される方もおられるかもしれない。そうではない。西洋自身も近代の考え方は間違いだったと認めたのが、現代という時代だ。ニュートンの運動方程式は厳密には正しくなかったし、デカルトが言った「我思うゆえに我あり」も間違いだった（我は幻想だった）。カントが信じた絶対的な善も存在しないことが明らかになった。

ポストモダンの哲学者リオターの言葉を借りれば、現代

は、大きな物語（本質的な真や善）が失われ、一人ひとりが小さな物語を紡いでいかざるを得ない世界だ。普遍的なものはないと知りながら、普遍的なものを探すという矛盾を生きなければならぬのが現代人なのだ。合理的な全体最適解など見つからないことが自明なのに、懸命に、よりよい世界を探していかざるを得ないのが、現代という時代なのだ。

そして、私たちは元来それを超越している。だから、いくら西洋流の近代合理思想が輸入されても、それらを雑居させるだけで、帰依はしない。つまり、「雑居を否定する思想」としては用いない。

だから、「思想的雑居」というユニークなあり方は、「思想的純粹」よりもサステナブルなのだ。

無自覚的融合性

さて、日本がサステナブルな理由の続きを話そう。日本の第二の特徴は、日本人が思想的雑居性に対して「無自覚」である点だ。

いや、どんな文化も、その特殊性について無自覚なんだけどね。一度外に出て、外の世界にどっぷりとつかってみないと、外と比べて自分のどこがどのようなように特殊なのか、自覚することはできない。

アメリカだってそうだ。自分たちが若く未熟な国だということを知らないばかりか、自分たちが世界だと思っている。プロ野球のワールドシリーズがいい例だ。国内のA・リーグとナ・リーグの決戦を世界決戦と呼ぶのだから、なんとまあ、勝手

なものだ。

中国も、フランスも、ある意味で、アメリカに似ているね。自分が世界の中心だと思っている。大国主義といおうか。まあ、単純で、わかりやすいのだが。

一方、日本人は、この極東の島国が、特殊な異端だと思っているふしがある。よく日本人は、「外国では〇〇だ」などと言う。日本対外国、という、一対多の図式だ。しかし、日本のどんなところが、他のすべてを敵に回すほどにユニークなのか、わかって言っているだろうか。もちろん、海外に行く日本人は増えたので、日本とはどんな国かを理解する人は増えつつあるのかもしれない。現在、百万人以上の人が海外に在留しているという。それでも、全日本人のパーセントほどだがね。さて、無自覚的融合性の話に戻ろう。

自覚とは、「意識」という中心を持つこと。一方、無自覚とは、「無意識」。「意識」という中心を持たないこと。だから、日本は、雑居した様々なものごとの可否を「意識」することなく、それらを融合することができるとなる。

例えば、日本では、小学校以来、近代西洋型のやりかたで、算数や理科を学ぶ。これは、明治維新や敗戦のあとで、西洋から導入したやり方だ。

一方、国語や道徳や総合的学習の時間では、諸行無常、万物流転、親孝行、目上の人を敬う、といった、もつと昔から当然とされてきた考え方を教育している。ふつう、日本人は自覚していないが、これらは、仏教、神道、儒教の影響を強く受けた考え方だ。

つまり、日本では、最近導入した西洋的なやり方と、古くか

らの東洋的なやり方を、無自覚のうちに融合させている。しかも、面白いことに、融合の結果、新たにまた日本的なものを生み出している。

平安時代と近未来

そうそう、現代は平安時代に似ている、という話をまだして
いなかっただね。

漢字が輸入されてから、ひらがなができるまでの歴史を考え
てみよう。

漢字が中国から輸入されたのは、五世紀から六世紀。仏教や
様々な技術も一緒に輸入された。いわゆる古墳時代から飛鳥時
代のことだ。それまで、日本には文字はなかった。

万葉集が編纂されたのは、七世紀から八世紀。そこで創造されたのが、万葉仮名。漢字の本来の意味を無視し、漢字の音を使って日本語を表すために使われた文字だ。

たとえば、奈良時代に編纂された万葉集の「我が背子が 帰り来まさむ 時のため 命残さむ 忘れたまふな」（作者…狭野弟上娘子）という句。実際には、万葉仮名で、

和我世故我 可反里吉麻佐武 等伎能多米 伊能知能已佐牟 和須礼多麻布奈

と書かれている。

万葉仮名をくずして作られたのがひらがな。ひらがなが最初に公的文書に現れるのは、十世紀初めの古今和歌集だ。平安時

代は八世紀から十二世紀まで続いてきたから、ひらがなが広く使われるようになったのは平安時代の真つただ中ということになる。

そして、平安時代とは、日本独自の文化が花開き、歴史上最も長い間、都が一カ所（京都）にあった時代だ。江戸時代から現代までを東京の時代と捉えるなら、今の方が少しだけ長いともいえるが。

つまり、漢字や中国の文化を輸入してから、ひらがなに代表される独自の文化を創造するまで、一、二、三十年（人間の歴史で言えば一、三百年）かかっている。日本語を書き表すために、日本の言葉と中国の文字とを融合させた結果が、ひらがなのだ。漢字の訓読みも同様な日中融合だ。

一方、英語が日本に大量に入り始めたのは福澤諭吉のベスト

セラー「西洋事情」が出版された一八六〇年代のころだ。今からざっと十五年（実際は百五十年）前。中国の言語や文化を日本文化と融合させたときと同様、欧米の文化と日本文化を融合させるまでに二、三十年（実際は二、三百年）かかると考えれば、現在には過渡期だということになる。現代のカタカナ文化の流行は、昔で言えば、まだひらがなの前の万葉仮名くらいの段階に相当するんじゃないだろうか。

つまり、単にアメリカに一途な恋をするだけでなく、その意味を消化し、必要な部分を日本文化の一部として取り入れ、新しい日本の文化をつくる時代こそが、近未来なのだ。

その兆しは、例えば、ポップカルチャーに見られる。マンガ、ゲーム、そしてファッションの一部は、日本発の文化として世界に受け入れられ始めている。これらはいずれも、西洋か

ら輸入した文化を、日本風に創り直した結果だ。

日本は技術立国であるべきだ、という人がおられるが、技術は産業の基盤に過ぎない。もちろんそれも大事だが、その上で花開くものは、文化だ。歴史は常に、最初に技術、次に文化、という順序で発展する。文化で勝負できてはじめて、成熟した国家だ。

もちろん、アメリカに恋をする前の私は、文化で勝負できる成熟国家だった。庶民の文化だった浮世絵はフランスの印象派画家の間で絶賛されたし、漆器はジャパンと呼ばれて諸外国で珍重された。

これに対し、アメリカに恋していた戦後の数年間、私は独自の東洋的文化を隠蔽し、欧米流の文化へのあこがれを強めていた。しかし、音楽も映画もマンガもファッションも、日本発の

いいものが増えつつある。これらは、西洋風でも東洋風でもない。まさに、日本風の、無自覚的融合の成果。新しい、日本文化の芽生えだ。

無限抱擁性

私は、確信している。これから、日本には、平安のような文化の時代が再びやって来る。わくわくするね。

それは、優しい女性的な時代になるだろう。軍拡競争や技術競争をしている勇ましい時代は男性的だが、文化の時代は女性的だからだ。平安時代は女性的、そのあとの鎌倉時代は男性的だったように。

いや、歴史は繰り返さないのではないか？ という反論もあ

るだろう。技術は進歩し、世界は進化していくので、古き中国文化を輸入したときと、最先端欧米文化を輸入した現在では事情が違う、と。

私は、そのような進歩至上主義的な反論こそが、アメリカ的というか、未成熟的だと思うよ。

めまぐるしい変化の時代といわれる現在も、部品や登場人物は違うけれども、昔と大差ないと思うんだ。大きな包括的枠組みは昔のまま。ただ、その中で行われる様々な事柄が入れ替わっているだけ。こう考えるのが、日本流というか、ある種の東洋流なのだと思うんだ。

中国文化を輸入したときも、西洋文化を輸入したときも、日本らしさが薄まっていかなかったのはなぜか？ 思想が雑居していて、無自覚に色々な文化と融合してきたにもかかわらず、

相変わらず日本が日本らしさを保ち続けている理由は何か？
いつも変わらない、大きな包括的枠組みとは何か。

これが次の、そして、最大の問いだ。

答えは、無限抱擁性。無限に抱擁し包容すること。

本来、日本の思想の中心は、諸行無常や無我・非我、無私・非私。

パラドキシカルなことに、「中心がないことが中心」だ。

私たちが構築したあらゆるものごとは、所詮、砂を水で固めたモニユメントのようなものだ。時がたつと、さらさらと流れ、確実に存在し続けるかのようにだった「形」は、姿を消す。本質的な私などないし、私は私ではない。私というものを前面に出すべきではないし、出すべき私など本当はない。確固としたものなど何もない。すべては無であり、無常であり、ゼロ

だ。おごれる者も久しからず。ゆく川の流れは絶えずしてしかも元の水にあらず。歳歳年年、人同じからず。

これらが、日本思想の基本。諸行無常。無だ。

アメリカと対照的だ。

アメリカには、自由と民主主義という中心がある。東洋から見たら実は自由など空虚なのだが、それは置いておいて、アメリカは絶対に正しいと信じる中心を持っている。

したがって、自分の中心的理念と相反する者は受け入れられない。正しいか、間違っているか。主観か、客観か。自分か、他者か。仲間か、敵か。二者択一だ。このような二項対立的な立場からスタートするとき、無限抱擁は不可能だ。自分の確固とした中心を守ることが重要で、それを脅かす者は、異物であり、悪だ。中心が明確だから、ぶれない。

これに対し、日本は中心がないから、何を受け入れることも抵抗がない。中国文化も、西洋文化も。しかも、受け入れたものに染まらない。そもそも中心がないから、中心が移動する心配がないのだ。あらゆる価値は所詮、諸行無常だから、主観と客観、自己と他者、善と悪、味方と敵を分ける必要もない。だから、無限抱擁できる。ブラツクホールのように何でも受け入れ、いくら受け入れても自分らしさを失う心配がない。それが、日本の特徴であり、強みなのだ。「おれない」という概念を超越している。そもそも中心がないから、「おれない」どころか、おれるもおれないもない。これが、圧倒的なサステナビリティの秘密なのだ。

日本はもつとアメリカのようなはつきりとした考えを持った国になるべきだ、という人がいるが、ここは気をつけなければ

ならない。個々の細かな判断の際には考えを明確化することも必要だが、俯瞰的で大局的な判断を行う際には、『「はつきりした考えを持たない」というはつきりとした立場』を（無意識的に）持っていることが日本の強みなのだから、この最後の砦を手放してはならないのだ。

日本の根本原理——変動期には弱い、安定期には強い

サステナブル（持続可能）とは、長く変わらずに存続可能だということだ。外乱に対して強いことなので、ロバスト（頑強）であることがそのポイントだ。何か、予想外のことが起こっても、それに左右されずにいられる国家こそが、サステナブルでロバストな国家だ。

いや、日本は金融危機やエネルギー危機、食糧危機が起こるとすぐに影響を受けるのに対し、アメリカのほうがすかさず対処できるので、アメリカこそがサステナブルでロバストなのではないか。そうおっしゃる方もおられるだろう。

そのような方は、もっと長い時間スパンで問題を俯瞰して頂きたい。

迅速に対処するということは、短期的な問題解決を重視しているということだ。長いスパンの変化に対処するためには、ゆっくりと時間をかけて、長期的な変化を追っていかなければならぬから、そもそもすかさず対処してはいけない。

つまり、日本は様々な物事への対応が遅いと言われることがあるが、それは、短期的な変化への近視眼的な対応よりも、長期的な変化への大きな視点での対応を、行っているということ

なのだ。ただし、無自覚的に。

これは、私のような国家の視点——つまり、長い時間軸——で見ると明らかだが、人間が陥りがちな短い時間軸だと見えにくい、当たり前前の原理だ。

若い国、アメリカに住む人たちは、即座にデイシジョンをできる人間が賢い人間だ、と考える。これも、なんとまあ、短い時間軸での判断だろう、と前から気になっていたことだ。まだ二十三歳なんだから仕方ないんだが。生まれる前のことはわからないからね。若者は、敏速だが、近視眼的だ。

日本は最近衰退しつつあるとか、閉塞感だの、暗い世相だのという話が盛んだが、これも、長期的な視点を忘れている。

長期的な視点から見た日本の特徴は、サステナブルでロバストであること。これは、言い換えれば、「日本は変動期には弱

いが、安定期には強い」ということだ。

「日本は変動期には弱い、安定期には強い」という自明な特徴は、日本の近未来を占う際に、最も考慮すべき事柄のひとつだと思う。ところが、近視眼的な政治学者や経済学者からは聞いたことがない。気付いていないのか、重視していないのか。

高度成長期やバブルのころを思い出していただきたい。あのころはどんな時代だっただろうか？ 科学技術にも金融システムにも爆発的なブレークスルーがなく、日本人の得意な細かい改良を重ねていくことが強みになる時代だった。

ところが、その後、コンピュータやインターネットのすさまじい発展や、目を覚ました中国・インドの発展、環境破壊の著しい進展、金融経済の破たんなど、大きな変化が次々に起こる時代がやってきた。まさに、長期的サステナビリティには優

れ、短期的な変化への対応が苦手な日本にとって、つらい時代だ。しかし、変化の時代は永遠には続かない。いつか変化は収束し、様々なきめ細かな改良が重要な、安定した時代が来る。必ず来る。そのときは日本の時代だ（もちろんその後にはまた変動期が来るのだが……）。

もつと昔を振り返ってみても同様だ。大航海や産業革命の時代は、戦略・戦術に長けたオランダやイギリスの時代だった。大きな変化がある時代は、論理的・合理的な西洋流が強い。逆に、変化の小さい時代は、論理や合理を超えた全体としての知恵を蓄積した東洋が強い。中でも、東洋の知恵や、西洋の科学技術や、元来のきめ細かさ、清潔さ、真面目さ、誠実さをみんな無自覚的に雑居させている日本は、安定期には強い。

そして、変動期というのは、国家的視点から見ると、短期的

な変化の時代に過ぎない。変動と変動の間の長く安定した時期こそ、国家にとって、長い繁栄を謳歌する時代なのだ。言うまでもなく、前者は男性的な時代、後者は女性的な時代だ。

そして、東洋は、なかでも、日本は、そのような時代を包み込むことができるように、「無限抱擁」という最強の戦略を身につけているのだ。

だから、全く心配しなくていい。IT革命や電気自動車革命や中国の発展といった短期的な変化が一巡し、一段落したら、また日本の強い時代が来るに決まっている。これは単なる楽観的予想ではなく、歴史の必然だ。これまでもそうだったし、日本の無限抱擁的特徴が変わっていない以上、これからもそうなる。

もちろん、日本が強いといっても、GDPが再び二位に返り

咲くというような進歩至上主義的な意味ではない。ユニークな存在感を示すということだ。

日本のどんな分野が繁栄するか？ もちろん、環境問題への対策のような、日本の科学技術が生かせる分野がひとつだろう。もつと大きいのは、先ほども述べたとおり、文化だ。

つまり、漢字に代表される中国文化の輸入、ひらがなを代表とする日本文化の基盤構築の次には、平安文化の開花があった。同じだ。英語に代表される欧米文化の輸入、和洋織り交ぜた新しい日本文化の基盤構築の次には、平成文化の開花があるはずだ。

日本人には二種類ある——静かに笑っているシャイな人と、静かに笑っている強い人

和洋織り交ぜた後の新しい日本の文化とはどんなものか。

東洋的感性と、西洋的合理性を併せ持った新日本人像をイメージしてみただくといいいい。

西洋から見ると、日本人はシャイだといわれる。にこにこわらっているばかりで、考えをはつきりと表明しないので、もつとはつきりと論理的に考えを述べられる国際人になるべきだ、といわれたりする。国際会議でもビジネススクールでも、日本人だけ、だまっついていて、意見を言えないといわれる。情けない。

日本人には二種類ある。「静かに笑っている人」と、「静かに笑っている人」。

いや。三種類と言おうべきか。「静かに笑っている人」と、

「欧米的に口の立つ人」、そして、「静かに笑っている人」。
何が言いたいのかというのと、シヤイではつきりしないとか、
子供のようにだ、魚の群れのようにだ、といわれる日本人が、最初
の、単に静かに笑っているだけの日本人。

欧米的に口の立つ人というのは、欧米流を学び、欧米的に
なつた日本人。

最後の日本人は、欧米流も東洋流もわかつた上で、武士のよ
うに、あるいは、合気道、弓道、剣道、書道、華道、茶道、禅
の達人のように、鎮まり返つた心で微笑んでいられる日本人
だ。

つまり、西洋流も東洋流も思想的に雑居させ、無自覚的に融
合させ、すべてを抱擁した後の、新しい、しかもこれまで通り
に日本人らしい、日本人像だ。

「静かに笑っている人」と「静かに笑っていない人」というト
リツキーな言い方をしたのは、シヤイではつきりしない日本人
と、あらゆることを身につけすべてをわかった上で静かにして
いる姿は似ているからだ。似ているが、全く違う。後者は、日
本の良さを身につけているのみならず、欧米に対して、日本の
文化の特徴や性質を西洋型論理で説明できるような在り方だ。
このような姿こそ、東洋と西洋を包容した上での、未来の日本
的日本人なのではないだろうか。

そして、そんな気骨のある未来型日本人はこれまでもたくさ
んいたんだよ。しかし、悲しいかな、西洋人や現代日本人に
は、一つ目と三つ目の区別がなかなか付かない。三つ目の段階
に達していない人が多いからね。目が肥えていない人には本物
はわからない、ということだ。そのせいで、一見よく似ている

「達観」と「シヤイ」は、混同されがちだ。歯がゆいことだ。

それぞれの時代、それぞれの国、それぞれの今

気骨ある未来型日本人とは明治人のことではないか、と言われる方がおられるかもしれない。

現代人の一部には、明治に郷愁を感じる人々がおられる。天皇を中心とした強い日本を取り戻すべきだ、というように。しかも、そのような人は少なくないように見受けられる。日本で保守派というと、こんな、明治に戻りたいと考える人々のように見える。

しかし、長い日本の歴史の中で、明治はむしろ特殊な時代だ。そこに戻りたいという人がおられてもいいが、特にそこに

戻りたい人がマジヨリテイーになる必要はない。というより、
もしもそんな人々がマジヨリテイーになるとすると、それは
偏っている。日本人にはもつと長期的視点の愛国心を持ってほ
しいと思う。

日本人の心は、感性豊かな平安時代や、禅の心を開花させた
鎌倉時代、武士道や文化の栄えた江戸時代の良さに戻ってもい
いはずだ。

これからの時代はそれらに似るはずだ。

ただ、どんな時代に似るかは、見方による。いわば、どうに
でも見える。これが、無限抱擁というものだ。無限抱擁的な見
方をすると、これから起こる何事も新しくないし、同時に新し
い。これからの時代は、あらゆる過去の時代に似ているし、似
ていない。私は既にあらゆることを経験しているし、まだほと

んど何も経験していないとも言える。

ただ言えることは、私はこれまで、世界一サステナブルな国
家であつたし、これからもそうあるだろうということだ。

ひとつ、書き加えておこう。

私の話を、アンチ・アメリカ（あるいはアンチ西洋）だと思われ
ては困る。

若いアメリカを小娘扱いしたが、これは批判ではない。実際
に若いから若いと言っただけで、それではいけないということ
ではない。誰にだって、正義感に満ち溢れた青年時代はあるも
のだ。つまり、まだ二十三歳のアメリカには、若さゆえの良さ
があるのだ。

だから、日本の若者は、大いに若い国に学びに行くべきだと
思う。

ただ、日本が若い国になろうとする必要はないし、なれない。老人は若者には戻れないんだ。それは、老いたからではなく、既に蓄積した思想があるから。

アメリカに限らず、欧米の国々に対して批判的だと思われたかもしれないが、それも違う。どの国も、みな、それぞれに個性的で素晴らしい。あらゆるものを無限に包容する「和の国」である私が批判など行うわけがないことは、考えてみていただければ、納得いただけるのではないだろうか。

私は、すべての国、すべての人々、そして全宇宙のすべての物事を愛している。すべての国、人、ものの発展と幸福を祈っている。

デジャブ

科学技術が高度に進歩した現代という時代。新しい製品、新しいトレンドが世の中を席卷する。時代の変化するスピードはめまぐるしく、手に入る情報の量はすさまじい。

インドから日本まで仏教が伝来するのに、かつては百年（実際は千年）もかかったのに、今では情報が瞬時に世界中を駆け巡る。こんな時代は、これまでにはなかったと感じられるかもしれない。

私自身も、あまりに多くの情報が入ってくるので、私の私らしさが失われ、世界がのっぺらぼうな均一化に向かうのではないかと、いかという心配もしないではない。

しかし、「衣食住を営み、集団をつくり、コミュニケーションにより情報を得て、考え、活動する」という人間の基本的な

在り方は、全く変わっていない。ただ、便利で快適になっただけだ。若い人は、「現代だけが最先端の素晴らしい時代だ」と思いたいだろうが、それは、幻想なんだよ。

情報の量や、世界との距離は変わったけれども、国家や人間が行っていることの基本は、何も変わっていない。喜怒哀楽も、人生観も、思想も。太古の昔と何ら変わっていない。

だから、「思想的雑居性」「無自覚的融合性」「無限抱擁性」という私の特徴さえ失わずに生きていけば、私らしさはこれからも維持していけるに違いない。アメリカへの片思いから覚めた私には、はつきりとわかる。私は、変わらない。

アメリカもヨーロッパも中国もインドもドンと来い、だ。私はすべてを抱擁する。

そうはいっても、昔よりも情報量が圧倒的に多いことは確か

だ。これからは、史上最も、世界からの様々な情報を無限抱擁できる時代。そう考えると、楽しみだね。

逆に、世界一サステナブルであり続けてきた私の思想的特徴を、近くなつた世界に発信する時代でもあると思う。若い国は自分のことばかり考えがちだが、私のように、近代西洋的二元論を超えて、皆の幸福を目指す考え方を、世界中に広めるべきだと思うからね。世界のために。こちらも、楽しみだね。

いずれにせよ、長い間生きてきた私にとって、あらゆることは、新しくもあり、同時に、過去の何かに必ず似ているともいえる。それを楽しみ続けることができるのは、私が『中心を持たないという「思想の中心」』を持っているからなのだ。ありがたいことだ。

そして、みなさんは、私。私は、みなさん。

年年歳歳、花相似たり。歳歳年年、人相似たり。

何度年を重ねても、花は、どれも似たようなものだ。そして、人も、同じようなものだ。

私は日本。デジャブのように、無限抱擁を繰り返していく。

(平安デジャブー——抱擁国家、日本の未来／おわり)

「えええ、

あとづけの空論なのは
承知ですが、
それでも、

AKBのことを
話したいんです」

本郷和人（聞き手〓堀田純司）

本郷和人——プロフィール

1960年、東京都生まれ。東京大学史料編纂所准教授。従来主流であった「権門体制論」に対して、武士が朝廷との交流、対峙を通してやがて統治に目覚めていくという「二つの王権論」の立場に立つ歴史学者。その研究は詳細な史料の調査からダイナミックな歴史の潮流を描き出す。『武士から王へ〈お上〉の物語』（ちくま新書、2007年）、『天皇はなぜ生き残ったか』（新潮新書、2009年）、『武力による政治の誕生（選書日本中世史1）』（講談社選書メチエ、2010年）、『天皇はなぜ万世一系なのか』（文藝春秋、2010年）などの著作や、書評も積極的に発表している。

本郷和人の『史料屋通信』

<http://www.hi-u-tokyo.ac.jp/personal/kazuto/>

本郷和人——メッセージ

僕は歴史を勉強する者として、東北地方の皆さんがどれほどつらい歴史を歩まれてきたかを知っています。江戸時代の飢饉、戊辰戦争の敗北にはじまり、おしんの時代に至るまで。でも、同時に僕は知っています。皆さんの柔らかな物腰と端整な顔立ちに、どれほど強靱な精神力が秘められているのかを。

このたびの未曾有の大災害は、そんな皆さんの心を折るに十分すぎるつらい出来事であると思います。でも、それでも僕は信じています。東北の底力を。大地と共同体に根ざした人間本来のあり方を。

僕たちは皆さんとともにあります。それがどんなに不十分で

あれ、喜んで痛みを分かちあう準備をしています。長い時間がかかる覚悟もしております。いっしょに立ち上がりましょう。がんばれ、東北。がんばれ、みちのく。

本郷和人

AKB 48 猿楽伝統演劇論

堀田 本郷さんの著作を拝読して感じるのは、史料というものの歴史学における大切さ。門外漢の僕ですらその片鱗を感じます。

なんとなく、司馬遷の書いた史書みたいなものの小規模なのがたくさんあって、そこに「○○○が巧みな智謀で△△城を攻めた」などと、歴史のストーリーが書かれているのが史料であり、それらを突き合わせて信憑性を確かめつつ、歴史叙述にもっていくのが歴史学だという漠然としたイメージがありました。

でもそんな大雑把な話ではなく、歴史とはストーリーでは

ない。たとえば著書『天皇はなぜ万世一系なのか』（文藝春秋、2010）では、日本の貴族の世界で世襲と実力主義がいかに機能していたのかを考える際に、まず史料をあたって、彼らが世襲や実力主義をどうとらえていたのか、そもそもそうした観念があつたかどうかを提示する。その史料によって明かされる彼らの生き方や人間観は、とても面白く感じます。

さてそうした歴史学者である本郷さんはAKB48のファンでいらつしやる。最初にうかがったとき、てっきりカジユアルなファンだ思っていたのですが、とんでもない。ガチのファンでいらつしやるようですね。

本郷 ガチではあつても、古参の方に比べれば、ポツと出の駆け出しです。お恥ずかしい限りですが、宜しくお願いします。

さて、それで。堀田さんはご自身を、「オタク」だと思えますか？

堀田 僕は自分をマニアであると思っていますが、オタクとは言えないと思っっています。いわゆるオタク的な趣味をたくさん持っています。キャラクターへのある臨界値以上の愛がないと、マニアではあっても、狭義のオタクではないのではないかと……。

本郷 そうですか。僕は、若いころから2次元、つまりマンガやアニメやOVAに没頭していた。まあオタクだったわけですが、当時は「オタクは恥だ」というのが世の趨勢でしたから、自己否定の暗い毎日を送らざるを得なかった。陰鬱な自己否定

を生きるオタク。

そんな来歴を持つ僕からすると、アイドルヲタというのは毛色の違う存在に思えていました。彼らは群れて、3次元を対象として大きな声を張り上げ、自己アピールをしてる。

だからAKB劇場がアキバに誕生した当初は、「こっち来んなよ！」と憤慨した、というのが正直なところでした。

堀田 アイドルファンもマンガやアニメのファンも、一般人から見れば同じに見えるでしょうが、意外と「食いあわせが違う」と言いますね。3次元のアイドルと2次元のキャラの境界にある「声優ファン」というジャンルもあります。

本郷 AKBのファンで劇場に集まってきた人は、本来、秋葉

原に親しんでいた人ではなかったと思うんですよ。

堀田 僕も正直に言って、最初は「秋葉原に目をつけやがって」とインチキくさく感じていました。

本郷 オリジナルメンバーの小嶋陽菜さん（チームA／ノースリールズ）も、最初はこの集団をうさんくさいと思っていたそうですよ。AKBの練習とバイトを秤にかけて、将来のためにバイトに行つたという伝説の持ち主です。

堀田 しつかりしていらつしやいますな。しかし最初は距離を置き、また今までも3次元のアイドルのファンになることが全くなかつた本郷さんが、AKBにハマられた。その魅力はどこ

にあつたのでしうか。どこがそれまでのアイドルと違つたのでしう？

本郷 今までのアイドルとの一番大きな相違点は、アキバに「いつでも会いに行ける」劇場を持つたということ。これはよく言われることですが、それに尽きる。

もつとも歴史的には、それ以前にも、このほどメンバーの一人と噂になつた広井王子さんがミュージカル興行を打つており、劇場発だつた例はありますけれど。

堀田 『ミュージカル サクラ大戦く花咲く乙女く』
(1998) ですね。

本郷 「セーラーMoon」のミュージカルもありましたね。脱線しますと、今をときめく北川景子さんも、セーラーマーズやってらっしゃいますね。

堀田 実写版『美少女戦士セーラーMoon』（2003）ですね。

本郷 「劇場発のアイドル」にはかくなる先史があり、AKBが初めて行ったものではなかった。

だけど、僕には画期的に思えた部分がある。AKBは「伝統芸能としての演劇」の系譜に、自らを位置づけたんじゃないかと思うんです。

劇場があつて、しかも演者と観客の距離がすごく近いという

演劇スタイルは、14世紀ごろ、河原棧敷で能が演じられたことが直接の起源です。「ただすがわらかんじんさるがく糺河原勸進猿楽」の世界ですね。

しかも能にはただ演者と観客が近いだけではなく、観客が演者自身に教えてもらおうことができるという特徴があるんです。こうした分野は強いですよ。誰しもが素人芸ながら鼓や謡、演者にだってなれる。

江戸時代、歌舞伎はつねに幕府の監視の対象だったけど、能は武士の文化として奨励されてきました。それは権力者が自分で演じられるから。権力者は彼らを金銭面で支える後援者になりつつ、自分自身も参加して楽しむことができました。

堀田 現代でも能の家は、学生やファンに向けて能の教室を積極的にやっていますもんね。

本郷 一方、AKBもMIXと呼ばれる合いの手を入れたり、メンバーに個別の掛け声をかけたりして、演者であるアイドルの振る舞いに、観客も参加するんです。

劇場に行くともものすごい熱気。ツボを心得たファンの応援とメンバーの歌声が渾然一体となる恍惚——これは他では得がたい経験でした。野外での能のごとく、観客と演者がいつしよになっって作り上げる世界です。つまり、AKBプロジェクトは、アイドルとファン（ヲタ）を同時に生みだし、成長させてきた。ここが驚異です。

でもそうしたダイナミズムを構築できたのは、「祭りの場」としての「劇場」があったからこそ。

思い返すと日本初の流行歌も、劇場で生まれているんです。

約100年前、松井須磨子が歌った「カチューシャの唄」が全国的に大ヒットした。これは新劇版トルストイ『復活』の劇中歌だったので、彼女を看板女優に冠した芸術座は、全国行脚の公演を打った。その観客を核として、列島中で実際に、この歌がみんなに「歌われた」のです（永嶺重敏『流行歌の誕生』2001）。

堀田 なるほどです。現代ではメディアが発達して個人個人がネットワークで結ばれるようになりました。そうすると、生身で人と向きあう必要はなくなる。そうした状況だからこそ存在できる、PCのシミュレータ上にしか存在しないデジタルのアイドルを描いた映画『SIMONE』（2002）という映画もありました。

そうした時代、人間は容易に離れて暮らすことができるようになるはずなんです。実際は、人間は生身をよせあつて暮らすようになってきている。特定地域への人口の集中は、世界的な傾向です。

こうした時代の流れを反映するかのように2010年のアカデミー作品賞を争った『アバター』（2009）も『ハートロッカー』（2009）も、どちらも超アナログな人間の生身の身体感覚がテーマになっていました。

AKBも、メディアが発達した現代でありながら、あえてアナログに、劇場を持ち、生身のアイドルに逢いに行けるといふコンセプトを打ち出しているわけですね。

本郷 僕はこの前、練習生の公演を見に行きましたが、公演が

終了するとメンバーがハイタッチしてくるんです。そこにきて僕は今更ながらに取り乱し、あたふたハンカチで手を拭いちゃいました。

堀田 「ぼ、僕みたいのが触っていいの!？」という。

本郷 しかもですよ。あきらかに動揺してた僕を知りながら、市川美織さん（研究生／超絶かわいい）はタッチしたあと、ニコツテしながら手を振ってくれたんですよ。よよよ…。

堀田 本郷さんも講義を終えられた後、学生さんをハイタッチして送り出してみてはいかがでしょう。

本郷 それはハレンチ教員として弾劾されますね。

堀田 しかし、エッチな意味ではなくて、目の前に生身のアイドルの身体が存在して、直接に触れ合えるというのは、現代だからこそものすごく貴重な価値になりますね。

そうか。僕も一度、モーニング娘。のコンサートに行つたところがあります。AKBとの違いはそこか。

本郷 なんですと。ここは太文字でお願いします。「モー娘。と一緒にしないでくれ！」

堀田 も…、申し訳ありませんでした……。そういえば……。AKBが天下を奪取してしまう前は、ネット上の巨大掲示板

でも、モーヲタ派とAKBヲタの人が争っていたものでした……。

本郷 アナログより、デジタルのテクノロジーが素晴らしいと思われていた時代にはじまって、しかし今になって、「手を握る」というアナログ志向が受容されつつある。

これはパラダイムシフトですね。僕はこの前、好きな子の握手券がついてるDVDを、とりあえず10枚買いました。ま、100枚単位でCDを買う人がいっぱいいるので、そんなもの自慢にもなりません。

堀田 高城亜樹さん（チームA／愛称「あきちゃ」／キャッチフレーズは、「緑茶、麦茶、ウーロン茶、でもやっぱりあきちゃ」）ですね。

本郷 当日はもう「わたくしめのようなもの」と握手してくださるだなんて」と感無量で。あのですね、僕が右手をおずおずと出したらすね、亜樹さんは、両手で包み込むようにそつと握手してくれましたよ。

このことを新聞の書評欄の仕事で一緒にしている小泉今日子さんに言ったら「あー、それがアイドル握手の基本ですよ」って、あっさり答えられちゃったんですが。

堀田 僕などに言わせると、小泉今日子さんとそんな会話ができる関係であることがすごいと思いますけど……。

本郷 ただ、最近は「テレビ」というメディアの選択が増え

て、新参のファンがどつと押し寄せていますよね。ファンが増えること自体は大歓迎なんですけれど、そこで僕は深刻な疑問を持たざるを得ない。

彼らテレビから入ったファンが見るのは、AKBのなんなのだろう？と。各地のお祭りはそれを生みだした「場」と不可分で、たとえば東京の「全国お祭りフェス」なんかに出前されても、文字通り「場ちがい」。面白くもなんともない。

だとすれば、アキバを離れたAKBは？ いや、でもアイドルの本質は、テレビ的な在り方にこそあるのかもしれないし、商売として成功するにはテレビを通じたマスなファンの獲得が肝要なのは間違いない。

同じような例としては、テレビの黎明期、1960年代ですが、歌舞伎役者がテレビに出ることの是非論が盛んに取り沙汰

されました。今、歌舞伎はちゃんと盛況ですから、いい指針になるかもしれないですね。

堀田　そうか。AKB48の本質は、本来「AKB劇場に出ていく人たち」であって、それがテレビやグラビアにも出ていくというあり方なんです。テレビやグラビアに出ることを目的とするタレント集団ではないのです。

本郷　そうなんです。だから歌舞伎をやってこそその歌舞伎役者であるように、劇場があつてこそそのAKBではないかという、これは古参のファンみなさんの持論であり、心の叫びじゃないかな。

もうからない劇場公演なんて、捨てちゃえばいいのか。よご

れ芸人に嬉々としていじられるような、普通のテレビタレントになつてしまふのか。いわゆる「芸能人」の地位を獲得した方が彼女たちの人生には得（少なくとも経済的には）であることがわかつているだけに、ここは劇場派のファンのジレンマになるんです。

AKB48新撰組論

本郷 劇場発である。これが日本人の伝統に即していると言いました。劇場発である。これが日本人の伝統に即していると言いましたが、もうひとつ。AKB新撰組論も、持論としてあります。これはちよつと距離を置いた冷めた視点で、熱狂的なヲタの方々には怒られてしまふでしょうけれども。

個人のアイドルではなくマスであった。そうするとそこに友

人でありながらも、ライバル、というか蹴落とすべき敵という人間ドラマ、もしくはは権力闘争が濃厚に展開される。しかもそれを可憐な女の子たちがやってくれる。これは、失礼きわまりないけれど、見応えがあります。

堀田 なるほど！ 新撰組も掟が厳しく、ものすごい高ストレスな社会で、しかもタレントがそろっていた。だからこそ際立つ人間ドラマがあって今でもファンが多いですね。

本郷 最初に殿内義雄や家里次郎というあまり有名でない上層部が排除（＝暗殺）されて、その次に芹沢鴨グループが主導権を握ったのを、さらに近藤勇グループが粛清した。その後も山南敬助とか伊東甲子太郎グループとかどんどん抹殺される。幹部

で最終的に生き残り、畳の上で死ねたのは永倉新八くらいなんですよ。

堀田 北海道で天寿を全うした。

本郷 同じように、AKBってのも、オーディションという名のふるい落としを通過して、ものすごい修羅場をくぐり抜けて満身創痍の状態でアイドルになっている。

彼女たちには、すさまじい人数のチームメイトに埋没せず、個性をもつてのし上がらねば、明日の自分はない——という心意気がある。

堀田 新撰組も、士道にそむくと即切腹という鉄の掟がありま

したが、AKBも同じように「恋愛禁止」の厳しい掟が。

本郷 それはさすがにウソだと思いますが、この生き残り競争は、すごく厳しいんですよ。なにしろ人生を賭けてますからね。

たとえばAKBの第一期メンバーは20人ほどいたんだけど、今も残っているのは6人、篠田麻里子さん（チームA）をいれても7人だけ。第一期から奮闘してきたメンバーが、すでに三分の一になつているといふすさまじさです。

有名な話ですが、第二期から参加した大島優子さん（チームK／第2回総選挙第1位）は、参加当初メンバーを「仲間」と思わなかつたし、半年が過ぎるまで心を許さなかつた、といひますね。

堀田 新撰組も生き残るためには一瞬も油断できない緊張感に満ちた社会でしたがAKBもすごい緊張の中にあるのですね。

本郷 しかも運営側は、「握手会」とか、「総選挙」などのイベントでその緊張を露骨に後押しするわけですよ。

特にAKB設立当初は、寝首の搔きあいともいうべきテンションの高さで、チームが編成されていたんじゃないかな。源頼朝亡きあとの、内ゲバに明け暮れた鎌倉幕府みたいな状況です。AKBを成り立たせているのは、ある意味においてこうした権力闘争だと思います。

たとえば大島優子さんは芸歴も長いし、自分の立ち位置の把握能力もべらぼうに高い。そんな才能が、新撰組的な強烈な緊

張感の中で切磋琢磨されて、芸が完成されていく過程を応援していけるのは、AKBのすごさだと思います。

堀田 メンバーは生き残ってスポットライトを浴びるために、ものすごくがんばるのだと思いますが、そのがんばりのベクトルって、「ファンの人たちの心をつかむ」ということに向けられるわけでしょう？

それはファンの人たちからしてみると「オレの心をつかむために、こんな可憐な子ががんばっている」という状況になる。これは…なかなか…。

本郷 そりゃあもうファンにしたら、大感激です！ 現実社会ってのはみんなが自分の順位を気にしつつ、「気づかないそ

ぶり」をするのがマナーだけれど、AKBの中にいると、あからさまで無情な人気ランキングが突きつけられる。

そんな競争の中にいる少女たちの葛藤、苦しみを妄想すると、もう気が気じゃありません。心が痛む。だけど、面白い。ああ、僕ってやなヤツだな。でも、目が離せない。

堀田 厳しい戒律。上下関係。派閥。権力闘争。愛憎。その中で際立つキャラクターたち。こういう世界って独特の官能性と情緒があつて、日本人はわりとそこに反応するところがありますね。新撰組がすごく人気があるのもよくわかります。

たとえばホストの世界も、本来、フリーダムなもつとりベラルな世界であつてもよさそうなのに、なぜか高ストレスな掟と厳しい上下関係が自然に成立して、濃厚な情緒が支配してしま

う。

いや『新宿スワン』や『夜王』というマンガで読んだだけの机上の知識ですが、しかしやっぱりこういうノリは日本人の風土としてあるのでしょうか。

本郷 旧帝国陸軍の場合、将校はともかく、全国から徴集される兵隊さんの世界では、下士官によるいじめが横行していた。ひどい鉄拳制裁が日常茶飯事で、敵より味方が恐ろしいといわれた。そういう陰にこもったドロドロは、風土としてあったと思います。

堀田 アメリカだといじめがないかという点、まったくそんなことはないですが、日本固有の風土としては、湿度が高い気が

します。しかも、女性だけの世界、さらに全員がライバルとくれば……。

本郷 AKBでも、女同士のドロドロはかなりキツイでしょうねえ。しかもメンバー本人の好悪こうおだけじゃなく、運営サイドからの「推され」「干され」という基準が、その好悪の背中を押すわけですから。しかしだからこそ、勝ち残ってきた子たちはすごく強い。

たとえば現代の政治家でいうと、福田康夫。この人はマスコミには批判されたけど、実に腹が座った人らしい。
なぜか。

それは父親である福田赳夫と、大平正芳が総理総裁の座を争った、あの熾烈な「大福戦争」を肌で感じながら、政治家と

して育つてきたから。

そしてAKBはね、「大福戦争」を国会でなくアキバで、日常的にやっってるんですよ。

数え切れないほど公演に出て、お客に会う。これは観客を巻き込んだ戦いであり、つねに激しい矢面に立つ戦いでもある。そんなバトルのただ中にいるからこそ、彼女たちは成長し洗練されていくし、そのさまが趣き深いのです。

堀田 みんなかわいい服装をして、ポワポワして見えますけども、その内面は過酷な権力闘争を生き抜いてきた、鋼のメンタルの持ち主なんですわね。

本郷 僕がAKBに惹かれる理由の一つは、彼女たちの努力に

あります。たとえばガチャピンという愛称の峯岸みなみさん（チームK）は、知性派の誉れ高く、MCがうまい。そしてつい「私は考えてる子なんだよ」って態度が出ちゃうんです。

でも、ですね。実はみんな言語化されないレベルで、それくらい計算している。あるいは明確に意識していても、あえてその計算が表に出ないようにしているんだと思う。こうした人間模様も、推測すると興味が尽きない。

堀田 裏をかいたつもりが。

本郷 本当はみんな、裏の裏、さらにその裏をかいている。生き馬の目を抜く世界をどう生き抜くのか、自分をどう演出するのか――。彼女たちは、寝る間を惜しんで考えているはず

です。おそろしいことにメンバーはみんな「私はツンデレ」
「じゃあ私は癒し系で」とか、キャラ設定、キャラ変の戦略を
立てているんです。

だから、メンバーによつて、ファンは握手をしたときなんか
の満足度が変わってくる。柔らかな交流を楽しみにしてたのに
「この子、ツンツンなのか……」でがっかりするファンもい
る。

だけど、ツンデレの「デレ」まで徹底してくれる人もいる。
ツンデレといえはこの人、多田愛佳さん（チームA）。普段はツ
ンツンでがっかりしても、デレの瞬間にあたったときの感激た
るや、数倍のよろこびになるわけです。そこまで自分の演出を
徹底してるところ、見事です。

堀田 ハイリスクハイリターン型のファン活動ですね。って本郷さん。「キャラ変」ってキャラクターの変更ということですよ。そんなことがアリなんですか。

本郷 もちろん、もちろん。これではメシを食えない、と思ったらキャラを変えればいいんです。

堀田 でもキャラ変更って、「わたしがあなたたちにさらしていた顔は、アイドルとしての営業用の顔でした」と言明するよ。うなものじゃないですか。そこで現実に立ち返ってしまわないのでしょうか。

本郷 大丈夫です。そこは客もみんな「筋」を理解しているん

です。そのキャラクターはバーチャルなものかもしれないが、それはアイドルとしての努力なのだ。

ファンはそうした彼女たちのフィクション的な努力を買おうとするんです。2%はそんな自分ってバカだな、って思いながら、98%は本気であきちやをヨメにしたいと思ってるんです。

堀田 なるほどなあ。僕は昔『萌え萌えジャパン』という本で

（講談社、2005年絶版中）「現実の人の魅力に由来してキャラクターが誕生し、そのキャラクターの世界で培われた魅力を、さらに現実の人が模倣するとはなんと繊細な営み」と書いたことがあるのですが、非常に今日的な感覚ですね。

そうか、男性とのデートなどが報じられたメンバーに、ファンが怒るのは「プロなんだから、そこはしつかりしろよ！」と

いう怒りなんですね。

しかしメンバー同士で、戦いだけでなく友情も芽生えたりするんでしょいか。

本郷 これはねえ堀田さん、読み解くしかない。劇場のしぐさとかで。派閥の誰それが仲良くて、っていうのも実際にはあるでしょうし。逆に、踊っているさまを見ても「おや、この子はあきちやと目を合わせないな」とか、気づく場面はあるように思います。

堀田 やっぱり厳しい競争社会ですね……。

本郷 卒業、と言われますが、実際には肩たたきに遭ったり、

フィジカルやメンタルが弱って辞めざるを得ない人もいたの
でしょうね。

歴史って勝った側から語られますから、たとえば新撰組で
も、芹沢鴨の一派が粛清されたことを「悪い奴が粛清された、
やっぱり勝ち組が正しかったんだ」って思われてるフシがある
けども、現実ってそんな簡単なものじゃない。だいたい暗殺さ
れても、病死と発表されてしまう世界ですから。

堀田 新撰組は粛清しても病死と発表して、葬式までちゃんと
やっていますもんね。そういえばあの葬式というセレモニーは、
ちょうど「卒業」イベントに通じるような……。

本郷 僕が推しているあきちゃは、前田敦子さん（チームA／第

2回総選挙第2位」と同年ながら「次世代エース」と呼ばれることがある。だけど前述したとおり、メンバーは仲間であり、敵なのです。

そんな中、ある番組で「次のエースになりたいですか？」という問いに対して、うっかりさんの彼女は「そこまで『がつつ』してセンターに行きたくない」と：ホンネで答えたりしてしまふんですよ。その瞬間の、周囲の視線たるや。

堀田 新撰組でも、そういうタイプの人は…。

本郷 朝起きたらクビがない。新撰組用語で言う「病死」です。

堀田 そうした厳しさは、同じ秋元康さんプロデュースでも、おニヤン子クラブとは違うところですね。

あちらはもつとりベラルというか、保守的な上下関係や秩序に服することへの陶醉感みたいなものとは距離を置いていました。一言でいうと「ゆるさが売り」という感じでした。

本郷 たとえば体育会系や会社組織だと、年功序列的な上下関係が幅を利かせます。

まあ、これは日本本来の秩序のあり方で、自分がジジイになつてみると実にありがたいですが、メンバーたちには年齢だけでなく「芸歴」という第二の尺度があるんです。年齢の上下に関係なく「先輩」「後輩」ができる。

堀田 年齢が下でも、先に入った人は「先輩」ですか……。厳しいですね。

ただそうすると、ものすごい緊張感の中で「互いがライバル」という人間関係までを含めて、エンターテインメントとして提供したという意味では、やっぱりモーニング娘。はAKBの先駆ではないでしょうか。

本郷 それはよくわかります。チームメイトでありながら、お互いがライバルである関係をも娯楽として見せた点では、モー娘。が先行するモデルかもしれない。ただハロプロの場合はテレビ志向で、AKBの場合は劇場志向だったという違いは大きい。

一方、僕は最近、2次元ファンとAKBファンには重なり合

うものがある、そう思えてきたんです。表層的にはAKBファ
ンと、アキバ好きの2次元オタクって重なるところが少ないん
です。だから、最近「アキハバラ48」と呼ばれなくなっ
た。

当のメンバーにしたって、「ええ、マンガ大好きなんです」
なんていって期待させておいて、読むのは「ワンピースで
す」。そんなもん、日本国民の必読書でしょ。

しかしながら、2次元のファンとAKBファンには、やっぱ
り重なり合うものがある、と僕は思うようになった。そのキー
ワードは「無償の愛」です。

堀田 なるほど！ 2次元のファンがキャラに注ぐ愛は、相手
が現実にはいないですから、もうどうやっても無償の愛になら

ざるを得ませんが、AKBのファンも同じくらい貴い愛を注いでいると。

本郷 ハロプロは愛ではない。だって彼女たちは常にブラウン管の中で、大人の思惑どおりに成長していったにすぎないんだもの。

だからモー娘。に対しては、僕は全然興味を持てなかった。僕たちの手は、届かない。あー、はいはい、「のびしろ」込みタイプの、だけど本質的には今までと同じ、観客とはまったく違う世界にいるアイドルだね、って。

今話題になってる、KARAや少女時代にも、同じことが言えると思う。韓国のグループだからどうだ、というんじゃないくて、コンセプトとして。

彼女たちがめっちゃ美しく、歌も踊りも完璧なのは、そらあ認めますよ。もう脱帽です。

だけど、観客とは時間も場も共有していない。「共有」という言葉もAKBにとって大事なキーワードだと思うのであえてくり返しますけれど、つまりは物語を共有していない。だから、応援する気になれないんです。一方で、女の子たちのリアルな成長を見守るAKBファンには、無償の愛があふれている。

堀田 確かに。おニヤン子との違いは、AKBの場合はファンが「応援したい気持ち」を発揮する対象であるだけでなく、ファン自身が参加して盛り上げているところだとも思いました。それが「共有」なんですね。

ただ元メンバーがAVデビューしたりとかすると、無償の愛を注いでいた人は、いかばかり心を痛めることかと心配になります。

本郷 ああ、それか……。AKB用語で言う「卒業」したあと、いわゆる大人用ビデオに出てしまった路線ですね。

ファンブログを精読していると、哀しいエントリーに出会います。

僕はそのファンの方をリスペクトしていたから、もう気の毒で、気の毒で。だからビデオは、絶対に買いません。AVという仕事は断固としてアリだと思っっています。

堀田 大好きだったクラスの憧れのコが、いつの間にか転落し

てAVに出てたという心境でしょうか。

本郷 もう、うちのカミさんを代わりに出すから許してくれよと、痛烈に思います。

堀田 次にお会いするとき、本郷さんが青アザだらけだったらどうしようかと思います。そんなことをおっしゃっていても、ご著作を読むと奥様に対する尊敬と愛がすごくあふれていますぜ。

本郷 結構、熟女ものの市場ってあるみたいですよ。どうですか、現役東大教授の熟女もの。

堀田 むっ、それは。近年、熟女の需要が高まってきた感じがうですが。

本郷 ちなみに卒業生のAV作品。僕は自己紹介パートだけネットで見たんだけど、「みなさんこんばんは、AKB48、チームAです」という、劇場での独特のイントローションそのままに挨拶してるんです。あれ、わざとだろうなあ。たまらんですよお……。これが僕の推してる子だったら、と思うと、マジで涙が止まりません。

堀田 僕はそういうときいつも「あーっ、もったいないことした。オレもファンだったら燃えたのに！」と感ずるのですが。

まあAKBの場合、歴史が浅いせいもありますすが、ゴールが

どこにあるか、卒業後の「上がり」がどこにあるかがまだ見えていませんね。これは問題です。

SDN48（AKBと同じ秋元康氏がプロデュースする、ちよつと大人なグループ）に行くのか、独立したタレントになるのか、結婚して家庭に入るのか。できればドバイの富豪ぐらいつかまえてほしいものですが…。

ただ、AKBの世界では生まれつきの天才が勝つのではなく、努力で逆転できるようですね。

本郷 努力が才能を凌駕する世界です。間違いありません。それぞれの上がるようにするエネルギーを放埒なほど感じます。

実力主義か。世襲か。日本社会二つの型

堀田 AKB48がはじまった2000年代中盤は、AKBのよ
うな存在はまだあくまでもニッチだったと思うんです。

キャラクターファンの世界はありましたし、一方、メデイア
を通して「画面の中で会える」アイドルも依然としていた。そ
の間の「直接会いに行けるアイドル」として、声優さんファン
や、地下アイドルのファンはいましたが、ずいぶんとニッチな
需要だったものでした。

幅広い市場相手の商売が難しくなつて、オタク向けの濃い需
要が注目されるようになり、そうした声優ファン界もターゲッ
トにされましたが、特殊なケースをのぞいてなかなか市場が大
きくならない。「声優グッズ上限300説」なんていう意見も

ありました。

この時期、「会いに行ける」というアナログな特性を売りにするAKBが、数年経ってこんなに売れっ子になるとは、誰も予言できなかつたと思います。

本郷 そうかもしれません。そのころは、まだそこまでメジャーじゃなかった。僕の場合は1991年生まれの前田敦子さんが16歳のころにはファンになってました。

控えめなヲタでしたので、AヲタとKヲタの抗争とかには無縁でしたが。卒業しちゃった戸島花さん（旧チームA）を推してましてね。花ちゃん……。またセットリストで会えるかなあ……。

あ、だから僕が一番好きな曲はもちろん『君のことが好きだから』なんです。2番は『Faint』なんです。

堀田 なるほどです……。しかしそうした背景には、ひとつは「もうリアルな出会いは諦めた」という人が、社会的な層をなすほどに出現したという事情があるのだと感じるんです。

もちろん諦めている人は昔からいたと思うのですが、たとえばかつて『新世紀エヴァンゲリオン』（1995）のヒットは、オタクという本来ニッチな集団と見られていた層が、いつの間にか日本社会で巨大な市場を形成していたことを教えてくれました。

同じようにAKBのヒットは、「もうどう考えてもリアルの女性には縁がないので、モテるかモテないかなどと気にする必要は完全にない」と諦めている人が、もはやニッチではなく、大きな社会勢力となっっていることを、教えてくれているんだと

思います。

70年代くらいまではまだ「女性は処女じゃないとダメだ」などと言ってもまあ、許された。しかし80年代から急速に、「処女じゃないとダメ」なんて発言すると、社会的に完全にアウトになる。これほど女性に嫌われる発言はないからで、特に女性社会でそんなことをいう人は、社会的には死んだも同然でした。

だから男はモテたいと思う以上、そもそもそんな観念は持たないように洗脳され、90年代にはもはや跡形もなくなっていた、はずでした。

しかし近年、漫画の中のキャラが、処女じゃないかもしれない、と描写されるだけで「裏切られた！」と激怒し、漫画家に破いた単行本を送りつける人が、ある規模の市場を形成してい

る。

僕はまさか、「女性は処女じゃないとダメだ」などという保守的な価値観が、21世紀にはいつて復活することがあるとは、夢にも思っていないませんでした。

本郷 げげっ、そんな処女信仰が、今どきあるのですか（まあ、ぼくのおきぢやあはあれだけどな）。

堀田 あるようです。処女じゃない女性のことを「中古」と非難する人たちがいます。しかも創作の中の人物ですら、嫌われますよ。ゲームの中に、余計な男性キャラクターが出てきただけで、署名運動まで起こす人もいますし。

本郷 それは、ほかの男性と比べられたら「オレ、勝てないかなあ」って気弱に思いがちだから、というのもあるのかな。僕はメチャ草食男子だったから、よくわかるけれど。

堀田 ワンアンドオンリーなら比較されませんからね。「ほら、みんなもこうだよ。こうなんだよ」と。

本郷 僕らを比べるなんて、勘弁してくれ。だけど女の子には容赦ないぞ。48位までつけちゃうぞ、と。

AKBでは「総選挙」という人気格付けランキングを行い、シングル曲で歌うメンバーを選抜しましたが、現実の日本社会で、このように自分の順位付けが露骨に行われる事例はなかなかない。

もともと日本には、ペーパーテストの結果で官僚を登用する「科挙」の制度が根づかなかった。厳密な意味での官僚はいなかった。明治になってようやく官僚制ができたのですが、つまり人間の能力に順位をつけるという考え方が導入されたのは、ここ100年のことなんですよ。

日本では、明治までは世襲が重視される、ある意味、馴れ合いの社会だった。上にいけるかどうかは、生まれも含めた「運」が決めるのだ、っていう考え方が染みついていったんですね。

だから人気が露骨にランキングされる、総選挙で心を折る人がいるのは、もつともです。1位から40位までファン投票の順位が発表されて、41位以降は「その他」になっちゃうんだから。

僕も大好きなある人気メンバーは、第2回総選挙のときに良い順位につけたのに、髪の毛をかきむしって悔しかったのだそうですね。第1回の総選挙に比べ、メンバー中で一番順位を上げたのに、ですよ。

堀田 前漢と後漢のあいだに帝位に昇った王莽おうもうのように、中国では外戚が一時的に権力を握っても、猛烈な反動が起こって、一族が皆殺しになったりする。

一方、日本では藤原氏や、鎌倉幕府の北条氏のように、外戚の地位自体が安定し、世襲されていく。実力主義より、家を重視する社会だった。そう本郷さんは指摘なさっていますね。

実際、日本人はなんだかんだいって政治家やスポーツ選手の2世についてや、歌舞伎などの家柄の話をするのが大好きです

し、企業創業者が「息子に会社を継がせたいと考えるのが親の情だ」と発言しても非難されない。むしろその方が居心地がいい、という土壤があると感じます。

本郷 「優秀な才能を持つ人が、地位を獲得する」という考え方は。つまり実力主義ですが、これはあまり日本には根づいていなかった。その一方で、「地位が人をつくる」という言葉がある。これは人間の才能を過剰に評価しないという考え方で、世襲に親和性がある。

AKBの「選挙選抜」は人気ランキングで選ぶという超実力主義の世界なわけですが、秋元康さんの面白いところは、その一方でじゃんけんで選ぶ「じゃんけん選抜」という、違う考え方も仕掛けるところです。

こちらは日本で古くから重視されてきた「地位が人をつくる」育成を改めて試そう、ということですから。

地域フランチャイズ型アイドル文化

堀田 名古屋を拠点にするSKE48や、大阪を拠点にするNMB48など、地域に拡大していくところも、面白い仕掛けですね。

小売業のトップでも、日本全国で均質なチェーン店を展開するチェーンオペレーションはもう無理、という人もいます。細かく地域ニーズを掘り起こし、かつその一方で地域の特産を全国に発信するという流れがありますが、そうした潮流を反映しているのか、と思います。

本郷 地域ごとにアイドルを。フランチヤイズ方式ですよ。ご当地を愛する人間は、こぞつてその土地の「野球、サッカー、アイドル」を支える。いかがですか？ 日曜になると家族のみんなが野球、サッカー、アイドル組に分かれるんですよ。

堀田 なるほど、おっさんは野球。お姉さんはサッカー。ニートでヒツキーの僕はアイドルに！

本郷 受け身でぜいたくな要求ばかりする。ローマの末期と一緒ですね。「パンをよこせ、サーカスをやれ」。

ご当地の光る人材を、野球、サッカー、アイドルそれぞれの地域リーグに入れて育成させ、見に行くんです。

ただ、文化圏の違いが障壁になることもあるでしょうね。大阪は、アイドル文化が全然育たないのだそうです。街頭インタビューをやってみると、NMB48についても「失敗すると思う」という声がとても多い。

大阪はお笑いの街であって、アイドルの街じゃないんです。だから僕は、MCに特化したお笑いチームを作るのかな、とフツーに思った。しかしながら、ここが秋元康さんのすごいところで、アイドル路線ど真ん中、でやるらしい。

これが大阪で成功するようなら、まだまだAKBプロジェクトの人気は続くでしょうね。ただ大阪人は、「アイドル応援するぐらいやったらタイガース応援するで」というかもしれませ

堀田 僕も大阪人なので、その感覚はわかりますよ。吉本もアイドル路線はそんなうまいこと行っていないですし。

しかしライトノベルでも、自分ががんばって主人公になるのはあまりウケず、「がんばっている女の子を応援するのがいい」という流派が台頭しているそうです。AKB48のようながんなばっている女の子たちを応援して暮らすというのも、いい生き方かもしれませんなあ。

本郷 僕も先に教授に昇進したカミさんを応援しきりなので、沿道から。なんならAV出演だって応援……うう、ちよつと心が折れます。

堀田 それに、かつての自動車産業や建設業のように、裾野の

広い雇用を達成するビッグビジネスは新興国に勝てるわけがない。もつと地域のスモールビジネスを盛り上げてもらって。

本郷 いやあ、若い男の人はこれから、いくらでも生き様を選べます。だけどオッサンは。

堀田 もはやキャラ変するわけにも、行きませんしね。

本郷 もうあとは死ぬしかないんですよ。だからアイドルを応援するくらいは許してほしい。「○○ちゃん！」と叫ぶ父親から、若者は「父さん、未来は僕らに任せてくれ！」ってたすきを受け取ればいい。僕らはもう根っこから腐っているのです。もうさ、子どもを生んで育てたのだから、それでいいです

よね。

堀田 僕は中年も半ばを過ぎて、日銀総裁とか権力政治家の気持ちかわかるなあと思うようになったんです。

もう近年は「西暦二千何十年に、日本はこうなる」と言われなくても、「もうそのころオレ現役じゃないしー」と、ちつとも心が動かないんですよ。

超小物である僕ですらそうだとすると、ましてや権益を今まさに握っている老人にしてみれば、正直なところ、もう自分たちさえ逃げ切れればあとのことはどうなってもいいと思っっているんでしよう。

本郷 それはまったくそのとおり。たとえば坂本龍馬が大人気

ですけど、彼は33歳の若さで死んでいるんです。

だから彼にとっては、日本の将来は自分の問題だった。功成り名を遂げた企業経営者や政治家が、よく自分を龍馬になぞらえるけれど、これは厚かましい。

堀田 おまえらは幕府だろう、と。倒されるほうだろうと。

本郷 龍馬は若かったから革命を起こせたんですよ。お爺さんは、革命なんてやりたくもないはずですよ。ですから政治家の言う「ネクストジェネレーション」とか「エコ」ってのは絶対インチキです。

堀田 自分自身の問題という意味でも、本当はイギリスのデー

ビッド・キヤメロンのように若いリーダーが出てこないといけないのですが。

これからのAKB48

堀田 ただこれからが大切ですね。「毎日会いに行ける」という生身のところから出発したのに、直接会える規模だと、ビジネスは大きくなならない。会いに行けなくなつてこそ、ビッグビジネスという矛盾をどう乗り越えていくのか。

本郷 劇場には250人しか入れませんから、一公演の収入は非常に小さく、それだけでは赤字です。そうするとCDやDVDを売る必要があるわけですが、ソフトの宣伝のためにはテレ

ビヤグラビアにも露出しなさいといけない。そうするとそっちのほうで忙しくなつて逆転してしまう。

最近のテレビシフトについては運営に懐疑的な人も大勢いるんだけど、僕は、「最終的には運営は劇場を残してくれるはず」と信じたい。

だけど正直なところ、最近では劇場公演が激減しているんですよ。「毎日会いに行ける」ってうたい文句はもはやまっかなウソなんですわね。

堀田 運営側だけではなく、メンバーの人たちも、もともとはテレビに出てスポットライトを浴びるのが夢で、がんばってきたという人も多いのではないでしょうか。

本郷 それでも大島優子さんは、劇場に行くと、すごく激しいダンスを見せてくれますよ。僕はやっぱり、コリス（大島優子さんの愛称）好きだなあ……。

だけど一方では確かに、きわめて地球に優しい踊り方で、ファンのあいだで「エコ・ダンス」と呼ばれている人もいます。

堀田 僕は初期に一度だけ観に行っただけですが、すごく激しいダンスの人がいて印象的でした。あれが大島さんだったのだから……。ちなみにすごくかわいいなと思った人がいて帰ってから調べたら、それがえれぴよん（小野恵令奈さん／元チームK／2010年9月卒業）でした。

現在のメンバーですと渡辺麻友さん（チームB／渡り廊下走り隊

／キャッチフレーズは、「みくんなの目線を、いただきまゆゆ」が、かわいいなあと思います。あと市川美織さんも。いやあ、ロリコンの気があると「誤解」されかねない趣味です。困ったものです。ウワハハハハハハ。

本郷 僕なんかきっぱりロリでNTR（いわゆる「寝取られ」属性。自分の好きな対象が他に奪われることに萌えを感じる）で、だけど、あきちや推しですからわけわかんない。それでいいんですよ。

こればかりは信心といっしょです。整合的な理由なんてない。ただし、僕の友人で、重症のアイドルヲタ2人は、ともにゆきりん（柏木由紀さん／チームBキャプテン）にムチューにさせられました。彼女はなにかもってますよね。

でね、今までのシステムは、古参のファンが作り上げてき

たある種の神話であり、それがオリジナリティだった。

そうそう、見巧者みこうしゃという言葉があるのをご存じですか。僕はこの言葉を哲学の授業で習ったのですが、芸というものはただ演技者がいるだけでは完成しない。見てくれる人がいてはじめて完成するものであり、それも「巧みに見る者」という、見巧者がいてこそ、芸はきちんと評価され、成長していけるものなんです。

僕は古参のファンの方々に、深甚な尊敬の念を抱いています。AKBのファンたちは見巧者として、彼女たちの成長を見守ってきたから。

しかしながら、すでに運営の実態は「劇場で会いたい」という、古参のファンの意見とは乖離してきました。これからはマスメディアで行こう、という路線がありあります。

そうした路線の中で、劇場のMCで光った子が、そのままテレビに露出して人気を獲得していく分には納得できるのですが、「テレビでだけ光る子」も出現してきた。現実は一筋縄ではいきません。ですから、ファンからすると事態が混乱しているように思える。

堀田 スポーツの地域チームのようなご当地アイドルから、現実では会えないメジャーリーグへと、うまく再構築できればいいのですが。

本郷 研究生や「干され」メンで新しいチームを作るって手が、一番現実的なんじゃないかな。一度メディアで売れちゃった子に、もう一度劇場に腰を据えて実力を磨け、というのもム

リでしようから。さもなきや、これは冗談ですが、劇場の席の値段を1枚3万円ぐらいにする。これで毎日やれば、収益は出るでしよう？

堀田 そんなの断行したら、怪しげな財界人しか来ないんじゃないですか。IT企業家とか。

本郷 中小企業のボンボンとかね。しかしですよ、有名なオペラが来日するとS席なんて6万円ぐらいするじゃないですか。お金というのは、あるところにはあるんです。

僕は金ないですけども、3万円になったら、カミさん等特殊なAVに売り込んで、自分は泥水をすすって通います。

堀田 なるほど。オペラのボックス席、相撲のマス席みたいなシートをつくれれば、いいんですね。

本郷 で、タニマチの財界人が「上がり」の筋道をつくってあげる。……うっ、これは心が引き裂かれるな。

堀田 ただ、卒業↓AVの対極の道筋も見えていたほうがいかもしれませんかよ。ベンチャーのイケメン若社長とか、ドバイの富豪とか。

本郷 僕は無力だから、心が折れた子を救ってあげられない。だから、せめて生き残った子たちは幸せになってほしい。僕にはそれが、一番の望みです。あきちゃ、がんばれ！

（「ええ、あとづけの空論なのは承知ですが、それでも、AKBのことを話したいんです」／おわり）

1969 バブル世代に生まれて
堀田純司

堀田純司——プロフィール

1969年、大阪生まれ。作家、編集者。高校を中退した後、大検を経て上智大学文学部入学。ドイツ文学科に所属する。在学中より編集者として働き、後に著作も発表した。編集者としては『生協の白石さん』『吉田自転車』『えの素トリビュート』（すべて講談社）などの作品を企画編集。著書は、究極の人間学としてのロボット工学を取材した『人とロボットの秘密』（2008年）、『自分でやってみた男』（2009年）、『スゴい雑誌』（2010年、いずれも講談社）、共著『自殺するなから引きこもれ』（2007年、光文社）など。

twitter @h_taj

堀田純司——メッセージ

僕は東北が好きで、休みの度にひとり北に向かって旅行するのを、いつも楽しみにしていました。大阪で育った僕ですが、東北はなぜか懐かしい。

大げさにいうと、かつて岡本太郎さんがそうであったように、日本文化の源流を東北に感じているのかもしれない。でも本当のところはもっと単純に親しみを感じて好きな気がします。

旅先で、地元の方々が行かれる風呂につかっていると、夕方になって次々と人がやってくる。そして「おばんです」と挨拶し、声をかけあっているのが聞こえてくると、なんだ

か自分の郷里、和歌山県の霧圀気とそっくりに思われて、勝手にながらとても親しく感じていました。

今回の震災はとても重い。報道で数字が伝えられますが、そのひとつひとつが意味する不幸、失われたものの大切さを考え、残された方々の悲しみを思うと呆然とながめるばかりです。被災された方々ひとりひとりに再び日常が訪れることを、心より願っております。

堀田純司

さまよえる中年

私が40歳になったのは、2009年の3月8日のことだった。私と同じ誕生日の人に、ドリフターズの高木ブー氏がいる。惜しいところでは、Mr.Childrenの桜井和寿氏が、私のちょうど1年後の同じ日に生まれている。いや、なにが惜しいのかはよくわからないのだが。40歳になって感じたのはまず、なんとも言いようのない不安だった。

それは自分自身への疑惑。「こんな40歳になっていいんか」という自己懷疑。成熟しないまま、ついにここまで来てしまったが、しかしもう人生をやり直すには手遅れで、これからどうやって生きていくのだろう、そもそも生きていけるのかという

不安である。

そしてこの2009年に、私の不安はいきなりの中し、シビアな社会の現実に向き合うことになった。

もともと私には「俺の人生10年周期説」という俺ジンクス、マイジンクスがあり、どうも自分は、XXXX9年あたりに人生の変動期を迎えるようなのである。

80年代の終わり、1989年は大学に入学し、東京に出てきた年だった。10代の後半から20歳にかけてというと、就職や進学で「誰でも変動期を迎えるのは当然ではないか」と思われるだろうが、そのころの私は高校を中退し、それまでの交際を絶って大阪の片すみを引きこもっていた。

中退の理由はいわゆる不登校などとは少し違い、「学校まで
は行くのだがそこから友だちと遊びに出かけ、授業には出席し
ませんでした」という「アップ系」の事情だったので、だか
らなにも引きこもってしまふようなことはなさそうなものだ
が、はじめて社会の秩序からはずれた経験、学生でもない、浪
人生ですらもない、「なにものでもない」という立場はみじめ
なものだった。そのため、あのころは友人や知人に会うのが眩
しかったのである。

私には「引きこもりが恥ずかしい、恥ずかしいから引きこも
る」という、引きこもりの人の気持ちがよくわかる。

当時はまだ引きこもりという概念も一般的ではなかった。だ
から自分を「俺は引きこもっているのだ」と考えることもでき
ず、本当になにもものでもなかった。この状態は人間にとって案

外、厳しいものであり、「俺はヒツキーなのだ」と自覚できる現代の引きこもりを、ちよつとうらやましくさえ感じるほどである。

そんな私が、暗い部屋を引き払い再び社会に出たのは、自分としてはこれは大きな変動だと感じていたのである。

といつても当時の私は、深刻に悩んでいたわけではなく「いやー、フツーに学校を出てフツーに会社員になるんだらうと思っっていたけど、ちよつとハメをはずしたくらいで社会のレールからいとも簡単に転落しちゃったよ。驚いたよ」と、なんだか人ごとのような感じで自分の境遇を受け止めていた。

私にしてみれば、日が暮れて夜になりかけても遊び足りず、まだ外で遊んでいたら「ふと気がつけば自分ひとりになっっていました」という感じだったが、ちゃんと引き際をわきまえてい

た他の人間からすると「あいついつまで遊んでいるんだよ。バカだな」という印象に見えていたことだろう。

私が高校生だった80年代の中盤は、バブル景気の入り口。吉田阪神タイガースが21年ぶりに優勝したのが確か高校2年のときだった。変なことを指標にするが、あのころはまだ夜の街にカラオケボックスなんてものはなかった。

日本人が、自分たちの国を豊かになった国として理解するようになった時代だが、当時はまだ、私のような典型的な中流家庭の息子が見る夢は「いい学校を出て、いい会社に勤めたら、人生はまず安泰」という将来像。こうした人生観がまだまだしつかりとあった時期である。〴〵まだ機能していた時代〴〵というべきか。

「がんばれば夢はかなう」「夢を持つことが一番大事」といっ

た標語のもと、個人個人が自分の生き方を追求して、人が人
生でひとつの職業、ひとつの会社[〃]にこだわらなくなつたの
は、「フリーター」という言葉が日本語に定着し（流行語となっ
たのは1989年。よくできたものでこの年、転職情報誌の名をとって、
「デューダする」という言葉も流行っている。今の労働市場流動化の直接の先
祖だ）、とりあえずみんなミュージシヤンを目指していたバン
ドブームを経て、1990年代に入ってから後のことである。

そして90年代の終わり。いや本当は世界の終わり。アンゴル
モアの大王が空から降ってくるはずの1999年には、結婚を
決めていた。しかも、それからほどなく仕事もやめて無職に
なっていた。個人的には「もしかするとノストラダムスの大予
言とはこのことだったのでは!？」と思えるほど、私には人類滅

亡級に大変動の年だったのである。

私にとって90年代とは、学校を出て社会人となり、働き始めた青年期。一方、日本社会にとってはバブル崩壊から「失われた10年」に突入した時代である。

「経済的に豊かな国になる」という目標のもと60年代、70年代をがんばってきただのに、いざ達成してしまつたらバブルが崩壊。ここにきて日本社会は新たなアイデンティティを模索しなければならなくなり、「失われた10年」とは、真の意味では単なる経済の停滞などではなく、この「私たちは今後どのような国を目指すのか」という模索を意味していたのだと思う。

そして結局この模索は、90年代前半から盛んになった規制緩和論議、そして中盤から後半の、橋本龍太郎内閣による改革ビジョンの発表につながっていく（そしてこれがさらに小泉改革に受け

継がれていった)。

面白いことに、この時代、個人にとってもアイデンティティの模索の時期であり「本当の自分探し」が、よく語られるようになった。「夢が大事、友だちが大事」など、一見すると、なにも歌にしてフシをつけて聴かせてくれなくても当たり前のようなことが流行歌になったが、それはそれで失われた価値観の再確認作業ではあった。

そうした時代の潮流の中で私は社会に出て、働き始めていた。正確に言うともう大人なので出ざるを得なかったのだが、しよせんは、高校を中退してしまいうような人間である。

つい先ほどに「社会に復帰した」と得意げに書いたばかりだが、学校も無事に卒業できるはずもなく、単位を残したまま、

私はある漫画専門の編集プロダクションで仕事を見つけ、その後、90年代が終わるまで働き続けていた。

恥ずかしながら告白すると、私は若いころ、ただひたすらに音楽家になりたかった。当時たまたま私は、杉並区高円寺に住んでいたが（今もだが）、高円寺在住でミュージシャン志望というところ、ある種の人間の類型が思い当たるところである。

音楽が好きというよりもとりあえずミュージシャンに憧れ、テクはない癖に服装だけは派手。反動的に自意識だけは肥大しているという、あの困ったタイプの類型が。

実際にあのころは「自分は高円寺に住んでいて」と自己紹介すると、「高円寺下北系ロッカーの人とはいっしょにやりたくないんで」と断られることもあった。「いや、たまたま高円寺に住んでいますけど、それ系ではないんです」と必死で弁明し

たものである。

そんなこんななの音楽ライフだが（どんなだ？）、続けていきたくないと考えていた。私は単位の登録を間違えるという実にマヌケな理由で一般教養のたった2単位を取りこぼしてしまい、学校を4年で卒業できないことが早々に決まっていたのだが、まあこれは、当時むしろ自分がすんなり卒業できることのほうが不自然な感じがしていたので、割りと平然と受け止めていた。

そこでそんな自分でも働かせてもらえる仕事を探していたのだが、それが漫画編集者の仕事だった。

世の中に、編集プロダクションという業態があることを知らなかったためもあるのだが、その会社の「君もドラマをつくってみないか」という募集告知をちよつと誤解していたので（がんばって言っちゃっていると思っていた）、本当にある青年漫画誌の

編集部に所属することになったときは、実は内心驚愕していた。そんな私だが、私よりも優れた人たちと出会い、周囲に多大な迷惑をかけたつとも、これが不思議な縁となって出版の世界に足を踏み入れることになる。

ちなみにこの世界は忙しすぎて、結局、音楽家にはなれなかった。これについては今でもかすかな悔恨を感じることもある。意外と学校のほうは無事に、働きながら卒業した。

そして2009年の変動は、もはや現代史である。30代になつて漫画誌の仕事をやめた私は完全にフリーランスとなり、その後、あるデジタルメディア系の編集部でものを書き、また昔とつた杵づかで、編集者としても働いていた。

そして結局2000年代を通じて、ここで働くことになつ

た。ちなみに結婚はあつという間に解消していた。右肩上がり
の日本の離婚率であるが、私も平成11年にこの傾向を加速する
ことに1件貢献したわけである。

小泉純一郎内閣を経由したこの2000年代の10年間、特に
後半の社会の変化は信じられないほど激しく、まさか自分が生
きているうちにこれほどの歴史の激動を経験することになると
は夢にも思わなかったほどである。

友人の、ある漫画家のお父さんは、敗戦と戦後の混乱を体験
した世代の人だそうだが、そのお父さんが息子に「こんな時代
を生きておまえは大変だなあ」とおっしゃるのだという。

「敗戦を経験した人がだよ！」と友人は言うが、私もそれを聞
いて驚いた。

私たちが子どもから大人になる間に体験してきた、戦後の先

進諸国の発展と繁栄は、考えてみると人類がはじめて経験した未曾有の事態だった。もはや歴史は終焉し、この黄金時代が永遠に続くように感じていたが、実はこの黄金時代は、まがいのものゝであり、歴史は新たな段階へと進むのである。考えてみればこれは当たり前のことであつた。

恐らくリーマン・ショックが起こつた2008年は、歴史的な転換の年として後世に残るだろう。

そんな激動の中で私が働いていた編集部は解散してしまつた。

なんてことはない。私の場合、80年代にバブルに踊り、90年代は「失われた10年」の氷河期に苦しみ、2000年代になつて市場原理主義の荒波に翻弄されて、「ついになににもかもなく

なりました」という人生であった。

といつても深刻に絶望しているわけではなく「まあ、なんとなかなるか」と考えているのだが、こうしたあたりを人に言うところ「いや、典型的なバブル世代の感覚だね」と失笑されるところである。

どうも我々の世代は、上は団塊とその次、そして下は団塊ジュニアとそれ以降の人たちの間にはさまれた「谷間の世代」として、あまり印象のよくないイメージを持たれているようだ。はっきり言うと「フヌケ」の印象を持たれているようでもある。

が、しかし1969年生まれのように、1970年ごろに生まれた人間は、80年代、90年代、2000年代の10年期が、個人史の10代、20代、30代と重なってくる。

そしてそれらがそれぞれ日本社会の「バブル」、「失われた10年」、「市場原理主義」に対応する。これはなかなか面白い体験であり、世代ではないかと思う。

私の場合は、これまで書いたようにヘツポコな人生だったが、他の同時代人はどのように生き、どのように感じてきたのだろう。そしてこの先についてどのように思っているのだろうか。「さまよえる中年」の魂を抱えて、それを聞いてまわる旅をしてみようと思う。不惑を迎えたモラトリアムである。

その中年の旅の最初に、「生協の白石さん」こと白石昌則さんに会うことにした。2005年11月に刊行され、ベストセラーになった本『生協の白石さん』の著者である。

白石さんは1969年6月生まれ。東京都の西にある多摩地区昭島で育った。1969年3月生まれの私と、同世代人であ

る。ただ学年は私よりひとつ下だ。

しかし、中年になってもこのように「学年」に言及することを忘れられないとは、人はいつたい何歳まで学年にこだわるのだろうか。このままいくと70歳になっても「何某君は学年ではひとつ下だ」と言っつてそうな気がしてならない。

私が白石さんの仕事を始めて知ったのは、友人からのメールがきっかけだった。そのメールには「これ見てみ」という本文とともにURLだけが書かれていたのだが、リンク先に飛ぶと画像がアップされている。

「リユウとケンは、どちらが強いのですか」と書かれた質問と、その回答が記された紙をスキャンし、アップロードされた画像のようだ。それが後に書籍化される、当時白石さんが担当

していた東京農工大学生協の「ひとことカード」だった。

私はこの本の企画と編集を行なったために、当時「なぜ売れたのか」と聞かれることが多かったのだが、この点については割りと刊行前から確信はあった。

『生協の白石さん』が刊行された2005年から翌2006年にかけてというと、村上ファンドやライブドアが行なった取引の違法性が問われ、そのマネーゲームで動くお金の巨額さが頻繁に報道されていた時期である。

村上世彰氏の「お金を儲けることは悪いことですか？」という発言が注目を集めたが、こうした風潮は潜在的に「ではマネーゲームで巨額を稼いでいる人が利口で、日々働いてその対価を受けとっている自分は愚かなのですか」という問いを社会に投げかけていた。

一方、白石さんのひとことカードには、自分の仕事を豊かにこなし、まわりも元気にするひとりの社会人の姿があった。ただ働くだけではない。自分の職分を真面目に楽しく働いて、そして周囲を元気にするその姿には、「人の幸福ってこういうところにあるんじゃないだろうか」というひとつの答えがあった。そしてその回答は、日々の労働を真面目にこなししている人を肯定していた。

この肯定は、今の世の中にもっとも必要とされている物語だと感じていた。恐らく白石さんの物語がメディアで紹介されるや爆発的に求められたのは、こうした時代の背景があったからではないか。

その物語の当の本人である白石さんにお会いしたのは、それ

は、この人がベストセラーの作者だからではない。

白石さんは本がベストセラーになり、映画化やドラマ化のオファーが山のように押し寄せてもそれに乗らず、著作がヒットしてもぜんぜん変わらなかった人だった。

ギラギラとした野望に縁遠いことが、自分たちの世代の持ち味ではないかと感じているのだが、こうした白石さんのライフスタイルは、この持ち味の一種、理想化された姿のように感じる。だから白石さんに、まず会ってみたかったのである。白石さんとは立川でお会いした。

生協の白石さんの場合

「1969年に生まれたことを、どのように感じているか」。

この私の質問に白石さんは、あたかもひとことカードさながらに実に白石さんらしいエピソードで回答してくれた。

40歳を迎えた白石さんは、奥さんと二人で明治神宮に厄払いに行っただけだそう。しかし残念ながら、すでに閉門時間だった。早くも厄が。そしてその帰りに表参道のナイキショップに寄り道したのだという。と、そこにあっただのは、ディスプレイでモデルを決めて、カラーやソールの種類など自分で選択し、自分の好みの文字も入れられるという靴のオーダーメイドサービスだった。

「文字色も自分で決められて、結構楽しいんですよ。そこで、自分の誕生日を入れる人も多いみたいです。」

で僕は、1969年6月9日生まれだからそれを入れようと

した。そしたら入力できないんですよ。あれっ、あれっど戸惑っていたら、お店のお姉さんが気の毒そうに「あの……、そういうものだとダメなときがあります」と。僕らも「ああっ」と納得した」

公序良俗に反する文字は、はじかれてしまうケースがあるそうなのである。69年生まれ。しかも6月9日生まれ。69。なるほど「二重苦」である。

「〴〵いやあこれ、生まれた日がよくなかったね、と次にイニシャルを入れようとしたら僕、あの……白石昌則なんで頭文字はSMなんですよ。これは、ひよっとして……。案の定ダメでした」

さらに三重苦が。「ことごとくダメじゃん！」と奥さんと爆笑したそうだが、店のお姉さんも笑っていたという。結局イニシャルは、逆さまにMSとし、誕生日は0609と入れてもらうことで、無事に入力は成功したそうだ。

しかしそうした「恥ずかしい」生年月日であるが、白石さんは自分が生まれた時代についてはこう語る。

「でも1969年あたりって、すごい象徴的な時代ですよ。アポロ11号が月に着陸。翌年にはビートルズが解散。いろんなことがこの時期にあった」

そういえば1974年に発売されたイーグルスの『ホテルカ

リフォルニア』でも、1969年は、「そんな酒は用意していない。1969年以来」と歌われていた。意味ありげである。ちなみに音楽でいうとウッドストックが開催されたのも1969年だった。

日本では1969年1月に東大安田講堂の突入があり、6月には新宿駅西口地下広場で行われた反戦集会に7000人の人が集まった。翌70年に開催されたのが、大阪千里の日本万国博覧会である。

日本人の摂取カロリーは終戦直後を最低にして、その後一貫して上昇を続けてきた。それがピークになるのがずばり1970年で、以降は逆に下がっていく。モノが有るのが当たり前になり、飢餓が問題になる社会から、逆にダイエットが課題になる社会に転機を迎えたのが、この時期だった。

自分たちはまだ幼児でなにも知らなかったが、モノがなかった時代から、現代的な消費社会を迎えた、これは確かに象徴的な時代だったのだと思う。

転機を迎えた日本社会はその後、1972年の『日本列島改造論』の土地ブーム、翌1973年のオイルショック、1974年の狂乱物価、1977年の王貞治、本塁打世界記録達成、キャンデイズ解散などさまざまなトピックスを迎えながら1980年代に近づいていく。戦後生まれが総人口の半分を越えたのは、1976年だった。

そして1969年に生まれた子どもがもう少して思春期を迎えようとするころ、白石さんは、昭島の地で、オーデイオにハマっていたという。

「小学校5、6年ぐらいのときに、その世界に魅入られました。近所の電気屋に行っっちゃカタログをもらってきました。メーカーにもパイオニア、サンスイ、ソニーと自分の中に序列があるんですよね。その序列どおりにきっちりファイルしていました」

懐かしい。そう、あのころはオーディオがブームだった。サンスイやトリオ（ケンウッド）、パイオニアなどが人気メーカーともてはやされ、各社が販促資料として、女優を起用したお洒落なものであったり、欧風の部屋にコンポが置かれた重厚なものであったり、実に豪華でカッコいいカタログを製作していたものである。

もう少し前のアマチュア無線、もっと後のパソコンのような

ノリで少年が「いい音」のするオーディオ機器に憧れ、といつても、それはとても買ってもらえそうにない高価なものなので、とにかくカタログを眺めて、自分だったらああ組んで、こう組んでと、切ない空想を繰り返していた時代だ。

しかし、テレビの前にラジカセを置いて家族に静寂を要求する「子どもエアチェック」から始まって、やがてコードで機器を接続することを覚え、録音する音源もFM放送、レコードプレーヤー、そして1980年代に入って登場するCDへとステップアップしていくのが当時の少年の歩む道だったものだが、小学校5、6年ですでに本格的なオーディオコンポのカタログを集めていたとは、白石さん、人より少し早いようである。

「きっかけはモノラルのラジカセだったんですよ。たまたま同

じアパートに住んでいる人から、いじつていいよと言われて、お借りして。空のカセットテープに録音して。なんでこんな薄っぺらいテープに録音できるんだろと、それが面白くて面白くて、録音しちゃ再生し、もうサルのように繰り返してしましたね。

そうしたら今度はタイミングのいいことに、うちの幸せの絶頂期っていうんですかね。年賀状のプレゼントで一等賞が当たったんですよ。それでその一等賞がソニーのラジカセだったんです」

そのソニーのラジカセで、晴れてチューナーからダイレクトに録音ができるようになったのだ。まだモノラルではあったのだが。

しかしそのラジカセは録音レベルの調整ができた。レベルが低すぎると背景のノイズが目立つ。だが高すぎると音が歪む。

このぎりぎりのせめぎあいがまた面白く、いつそう録音にハマッていったという。友人の家でテレビ番組をエアチェックするときなども、「ちよつとこれ録音レベルが低いんじゃないの？ この辺だよ、この辺」と、実に賢しら気にアドバイスをしていたそうだ。

そういえば、当時のこだわりのある子どもたちは、LPからダビングしたり、FM放送をエアチェックする際、常に「背景ノイズ」と戦っていた。

だがまだ小学校5年生くらいでは、同世代に、そうしたメカニカルな面白さにハマる仲間はごく少なかったはず。実際、白石さんもオーディオの楽しみは、ごく自分だけの世界だったそ

うだ。

友だちと遊ぶときには、本当はあまり興味のなかったガンダムの話題など「適当に情報を仕入れて適当にあわす」という感じで、知ったかぶりをして過ごしていたという。

白石さんが子どものところ大好きだったのは西城秀樹だった。

『情熱の嵐』（1973年）でスターの仲間入りをしたヒデキを白石さんは応援し続けた。『YOUNG MAN』（1979年）でついに、史上初の9999点、しかも2週連続という快挙を成し遂げ、歌手として頂点を極めたときは「俺がかねてからいいといていた西城秀樹が、こんな栄誉を勝ち得たんだ」と実に誇らしい気持ちだったという。

そうしてヒデキが躍進するうちに、白石さんの機器もグレイ

ドアップしていた。白石さんのお母さんが、ご近所で親しい電気屋さんから値切り、月賦で買ってくれたのだという。

ステレオを買ってもらい、そして中学生のころにCDも登場。まだまだレコードが主流だったものの、白石さんが中学2年生になるころには、オーディオに興味を持つ人が友だちにも増えていった。

先駆者であった白石さんは、録音技術について「テープはTKのHXがいいよ」などと、大いにアドバイスしたという。このころ、同じクラスの島村氏というちよつとトツポい傾向の友人からLPを借り、それでファンになったのがYMOだった。

白石さん本人もおこづかいを貯めて、セカンドアルバム『SOLID STATE SURVIVOR』（1979年）を購入、すり切

れるまで聴くぞというところで、しかし白石さんの知らないうちに、なんとステレオが「経済的にあんまりうるおってなかった」という家庭の事情で、売られてしまったという。それどころか先のプレゼントで当たったラジカセまでもが、売却されてしまっていたそうだ。

これだけは白石さんも怒り、「これ年賀状で当たったヤツでしよ。そんなね。入ってきた幸福を売るようなことじゃ、こんなじゃうち、一生幸せになんかなれないよ」と切々と訴えたという。

ただ、もちろん売ってしまったのは、白石さんや、5歳離れた弟を育てるためであったとは、よくわかっていたのだが。

白石さんは、ステレオが売却されてしまっていたために、せっかく買ったYMOのLPも、レコードとしては聴くことが

できなかつた。そこでまた同じアパートの人にプレーヤーを借りて、カセットテープにダビングし、それをなんどもなんども繰り返して聴いていた。

その思春期の経験について振り返り、白石さんはこう語る。

「昔って、今と違って情報がなかつたので、未知のままある世界に突入していったりした。これは効率はよくないかもしれないですけど、それゆえにこそ楽しいこともありましたね。それに、昔は選択肢や情報が限られていたからこそ、いろんな産業が発達した面もあったと思うんです。

今は情報化社会の中で、あらゆるものが調べ尽くされて、くらべられますから、これは製造する側や、自分のように物を売

る立場の人には厳しい時代ですよ。ただ消費する立場からすると、すごく便利な世の中なので、そこは功罪両面があると思います。

情報が氾濫した結果、いろんなことが素人の力でも行える。しつかりしたものができる。今の人は昔と違って、みんなある程度事前に調べてから、なにかに飛び込んでいきますよね。これは一億総プロ化時代で、プロと素人の境目が、ない。

ただそんな情報化社会でなかったら、僕のやっていた仕事のようなことだって、街のね。地域の、ちよつとした面白いことゝみたいなの、それで終わっちゃっていたと思うんです。だから功罪両面がありますよね。

オーディオなんかもそうでしたけど、昔はまだ技術が成熟していなかった。情報も今の世の中みたいにあふれかえっていない

かった。しかし、それがゆえに物事にのめりこんだり、楽しかったところはたぶんあつたと思うんですね。

いつの時代にも流行り廃りというものはあるんでしょうけど、アナログからデジタルになって、一気にいろいろなものが出てきて広がった。そういう流れを一番多感な時期に体感できたのは、あの時代の幸せだったかなと思います。それに、アナログとデジタルのどちらか一方ではなくて、両方の世界のよさを体感できた。これも非常に幸せなことでした。

楽しかったですね。うちは貧乏な家庭だったのでバブルとかはあまり関係がなかったですけど、でも当時に流行ったものって、なにかパワフルでしたね。時代に活気がありました」

私もまた同時代人として白石さんと、あのころのことを話す

のは、とても楽しい経験だった。ただ、なのだが、過去がすべて美しく懐かしいわけではなかった。

白石さんも、ひたすら楽天的だった中学のころにくらべて、高校時代は「3B政策（バイト、バイク、バンド）を推し進めたら、結果、G H Q（Go Home Quickly（つまり帰宅部））だけが残ることになりました」と笑う。

バイトで手にしたお金でバイクを買い、友人と遊び、それはそれで楽しいことだったけど、陸上部だった部活もやめてしまいい、どこかいつも刹那的な気分だったそうだ。はっきりいうと、どこか生活に饜すえた感じがしてきた。

「中学生のころはまだ、希望と未来を感じていた。しかし高校生になると、自分の底が見えてくるような気がした」とおつ

しゃっっていたが、偶然かどうか、それは私もわかるような気がするのである。

この時期、思春期が終わり、やがて社会に出るだろう自分の姿が、そろそろ垣間見えてくる時期だからということなのかもしれない。

あるいは、私たちの世代が高校生になった当時、日本社会もバブル経済に突入し、テンションは高い時代ではあるが、「これが自分たちが目指してきた理想の社会か」「こんなことが続くはずがない」という懸念をつねにどこかに抱きながら、しかし時流に合わせて踊ってみせるといって、まさに刹那的な気分があったのと相似だったのかもしれない。

「まがいのもの」の黄金時代」私の場合

私の場合は、南部大阪の小さい市、泉大津市で子どもものころを過ごし、そのまま高校時代を迎えた。

泉大津市は、大阪第二の都市である堺市と、岸和田市の間にはさまれた3つの小さな自治体、大阪湾に面する高石市、泉大津市、忠岡町のひとつである。

だんじり祭りを開催し、清原和博氏のようなスターも輩出し、小説の舞台にもなったことでも知られるキャラの濃い岸和田市の近くにあつて、割りと存在感が薄い市である。

もつとも全国の毛布の90%以上を生産していたという意外な地場産業が栄えた町であり、かつては毎日のように、泉大津の港にオーストラリアから、羊毛を満載した船がやってきていた

という。

そのため泉大津市民は、南海本線泉大津駅の駅前にも二頭の羊の銅像を建て、自分たちの町を支えてくれた「お羊様」への感謝の気持ちを忘れないでいる（本当はこの羊像のことを知らない市民も多い）。

ただ、今はこの繊維産業も外国産に押されて斜陽だと聞く。

私はその泉大津市の地元の中学から、大阪市内の桃山学院高等学校という学校に進学した。これは偶然、この高校に制服がなく私服だと耳にはさんだためである。

全国的には珍しくないのかもしれないが、大阪では私服の学校は少なかった。それをわざわざ選んだのは私が「お洒落さん」であったためでは断じてない。ただ中学校のころの強すぎる規制に、うんざりしていたためである。

私の地域は後進的と言ったなら怒られるかもしれないが、比較的保守的な地域で、小学校でも制服があり、中学生になると学生服はもちろん、頭髪も「中学生らしい姿に」という理由で、丸刈りを強制された。

また折悪しく1980年辺りに「校内暴力」が社会問題となった直後であり、私の中学時代は反動的に教師の管理が厳しくなっていた時期だった。ちよつとしたことで、でかいたんこぶができるくらい教師にぶん殴られるのはごく日常の、当たり前前の出来事だったのである。

面白おかしく過ごしていた中学時代だったが、そうした、色濃く残る南部大阪の土俗的な風土からは脱出したく、小耳にはさんだ桃山を受験してみる気になったのである。桃山は天王寺のほど近く、大阪市内阿倍野区にあった。

桃山学院高校はイギリス国教会というマイナーな宗派の高校で「キリスト教的自由の精神」が売りの学校だった。

ただよく考えると「キリスト教的自由の精神」という言葉は非常にアバウトである。本当のところキリスト教はそんなに寛容な宗教ではないわけで、まあ「欧米的なりべラルな雰囲気」が売り」といったところの学校であった。

もつともこの学校が私服になり、校則も細かくなく、髪を染めてもいいし、私が入学する少し前まで大学同様に授業時間中の学外への出入りも自由だったのは、本当のところは学生運動の時期に全高連の関西拠点になって、生徒による自治が活発化したためであるという。

とすると、学校の壁に太いゲバ文字フォントで「日米安保断固粉碎！」などと黒々と書かれている校風が想像されるが、そ

の後、あつという間に脱イデオロギー化してしまい、ただ自由な校風だけが残った。仕方がないので、それが「キリスト教的自由の精神」と呼ばれていたのである。

実際のところは、割りと浮薄な校風で、ハンドボール部が圧倒的に強かったが他の運動部はめっちゃ弱い。私が在学していたころは、確か野球部が公式戦、10回以上連続で1回戦負けを続けていた。余談だがそれでも野球部の部員は、ドラフトの季節になると「俺は阪神以外行かへん」と逆指名宣言を行っていたものである。

私がいた陸上部も似たようなものなので人様のことは言えないのだが、隣の部室だった某アメリカンな運動部は隣接する地元の中学校から「あまりこちらをのぞかないでください」と怒られていた。ヒマさえあれば部室から校舎を眺めていたらし

い。

校内に女性は「保健室のおばちゃん一人」という環境だったので（先生もぜんぶ男）、中学生と言えども「女生徒」の存在が珍しかったのだと思うが、あまりカッコいい高校生像とは言えない。

そんな風に関心体のいずれもが弱かった運動部の代わりに「軽音楽部が強かった」と言うと、学校の雰囲気は伝わるだろうか。そうした校風を揶揄して、大阪では桃山の桃でピンク。「ピン校」などと呼ばれていた。

私は、後になって1990年代後半に規制緩和論議が高まったときに「自分は緩和でいいのだけど、みなさんはそれで本当にいいの？」と感じていたのだが、それはこの高校時代の経験

のためである。

当時の桃山の「自由」は確かに本物で、規制が強かった中学時代とくらべて「おまえのために勉強しろ」と言われることもなければ、「学校のために励め」と言われることもなかった。その代わりに、成績が低迷したり、あるいは出席が滞りがちになってもある程度のケアはあったものの、基本的には放任されていた。

要するに「自己責任原則」の実験場のようなところだったのである。しかも時代は、享樂的な誘惑の多いバブル期だった。そうするとなにが起こったか。私たちの年は、入学時は平年にくらべて入試の成績がよかったそうなのだが、卒業のときは格段に悪化していたという。しかもたくさんのダメ人間を出してしまい、高校中退者も10名以上出てしまったと聞く。

私自身はそれでもよかったのだが、「自由というものはそれはそれで厳しいものだなあ」とあのころに痛感していた。その経験があつたため規制緩和論議のときは、メディアの「緩和すべし」という論調に対して、俺はいいけど、サラリーマンであるあなた方はそれでいいのか。「自分なら、ぜんぜん窓際族でいいので（死語になった）、終身雇用で給料をくれる世の中でまったく問題ないのになー」と感じていたのである。しかし現代では、終身雇用など完全に過去のファンタジーになつてしまつた。

私が高校に入学したのは1984年。グリコ森永事件の年。日本社会にとって象徴的だったのは、この1984年に総理府が世論調査を行い、国民の90%が中流意識を持っていること

が発表されたことだった。この年『北斗の拳』『キャプテン翼』『キン肉マン』などの人気連載を擁した少年ジャンプが、400万部を突破している。

音楽でいえば『ギザギザハートの子守唄』でチエツカーズ、『モニカ』で吉川晃司がブレイクした時期。たのきんトリオやシブがき隊も健在だった。

1年のころはまだ「高校生」であることにも慣れず、遊ぶといてもせいぜい部活の帰りに、友だちと天王寺の商業施設「アポロビル」でゲームをするくらいだったが、2年になると雲行きも怪しくなる。自分もそうだが、全体的に享樂的なムードが高まってきた。

ちようどデザイナーズブランドが大流行した時期でもあり、最初はパステルカラーから始まった流行が、黒い服に移り、今

から考えるとなんだったのかあれはと思うが、こぞってブラン
ドシヨップの紙袋を持ち歩くのが流行ったりした。同年代の人
ならば覚えていらっしやるだろう。コムサデモードの茶色い紙
袋とかのあれである。

誰もかれもがレノマのバッグを持ち歩くブームが来たのもこ
の時期のはずだ。これはご存じの通り、ルイ・ヴィトンに移行
し、現在もまだ残存している。

私も、親をなだめたりすかしたり、脅迫的言辞を弄したり泣
いて頼んだりして、なんばCITYのバーゲンセールに並び、
学校に通う衣装を整えたものだ。

入学当初は堺市鳳にあるダイエー大型店舗に母とともに
赴き、学校でバカにされないように服を購入し、地元では
「ニューファッションやのう」と賞賛されたものだが、それが

いつしか、頭髪は心齋橋でカット。あのころチェッカーズの影響で流行ったツーブロツクにしてもらい、靴はローファーでズボンはスウェット。それにマオカラーのオーバーブラウスを着て、もちろん袖には金のクリップ。そしてペイズリーのベスト。さらに夏でもジャケットで街を出歩くという、驚くべき外観の変容を遂げていた。

冬はセーター、夏はTシャツに短パンで押し通し、月水金と火木土の2パターンの服しか持っていないと豪語する現在とは、根本からキャラクター設定が異なる人物である。もし仮に、当時の写真が残っていたら恥辱死してしまうことであろう。

私は現代の「チャラ男」という人種が心の底から嫌いであるが、これはもしかすると同族嫌悪なのであろうか。しかし「昔

は悪かった」という自慢はよく定番として冷やかされるが「昔はチャラかった」という自慢など聞いたことがない。

もちろんそんな格好がカッコいいわけはなく、はた目からすると、非常なダサダサであつたはずだが、でも仕方がないのである。当時の文化風俗には「擬似選民意識」を煽るというムードがあつた。

一例をあげると、当時の若者の盛り場、ディスコは割りと服装規定をうるさく言つた。現在のクラブが、逆にあんまり頑張つた服装で来ると格好悪いのと好対照である。

80年代の当時は、ブランドのバッグを持ったり衣装に凝つたりして、まず頑張つてなにかに参加する姿勢を見せることが、大切だったのである。その意味では私の服装も、わかりやすくはあつたはずである。

もちろんその結果、本当にカッコよくなっていたら最高なのだが、本当のところまだ、日本社会はそんなに洗練されていないなかつた。

恥の多い人生を送ってきました

余談だが、80年代の特徴が「擬似選民意識への参加」であり、時代の顔を「頑張っている人」とするならば、ポストバブル後の90年代の特徴は「あきらめなければ誰でも夢はかなう」という平等性への希求、時代の顔は「自分がそんなことをやっ
ていいかどうか」の自己規制が、はなから見えないうりをする
「拒否している人」。

そして現代の特徴は「お金もかからず、努力も不要なこと」

であり、時代の顔は「降りてしまった人」であると思う。よく考えてみると、これらは全部ずばり自分に当てはまる。

ちよつと感じの悪いことを言おうと、80年代後半に非常に頑張り、90年代後半になにかの現実を拒否してアラサーとして過ごし、アラフォーの現在でも「降りよう」とせず、まだ頑張っている人も、もちろんいる。しかも往々にしてそれは独身女性であることが多い気がする（男だってももちろんいて、80年代後半の学生起業ブームに乗ってそのまま来ている人など行くところに行くところたくさんいるが、男は一般にどこかのタイミングで降りてしまう傾向があるようだ）。

そうした方が現代でもまだ「お洒落なパーティーピープルが集う店見つけた」などとおっしやっているのを聞くと（しかも婚活をがんばっていたりすると）、自分もまたその世代のひとりとして、心の底から「嗚呼いまだバブルは終わらざりけり」と慨嘆

するところである。

不思議なことにこうした女性は、演歌もイケる口であることが自慢であり（酒井順子さんが指摘していた「負け犬が長くなると和に走る」現象か？）、カラオケに行くと石川さゆりの『天城越え』を熱唱してみせ、長い時間をかけて磨きあげられたその歌いっぷりに周囲の大喝采を浴びるのが、お約束になっている。

『セックス・アンド・ザ・シティ』の主人公キャリア・ブラッドショーも、あの人が本当にいて日本でライターをやっていたら、絶対に『天城越え』を持ち歌にしていたらと断言する。

と、偉そうに人様のことを論評しているが、私のようになんの努力もしないダメ人間よりも、頑張っている人のほうが社会

にとって有益なのは当然である。

私自身が時代に先駆けて早々と降りてしまったのは、人並みはずれてバブル期にがんばったからだだった。

最初のころは、がんばるといっても、せいぜいが繁華街をうろついて、玉突きをし、死ぬほど勇気をふりしぼって女子高の生徒をナンパするくらいだった。成功率は激低である。

「東京の大学生の間では、男がメンソールタバコを吸うのが流行ってるらしいで」と聞けば、当時よくつるんでいたM本はセーラム、イヤミ度がより高い私は、ヴァージニアスリムライトメンソールを吸い、人にブランド物のライターを自慢されると、早速自分もライセンス生産品の金ピカのライターを3千円で買ったりにしていた。

これは後に学校で取り上げられたときに「何万円もするもん

ちやうんか」と、わざわざ親が呼び出されて返還されたものである。

ちなみに「メンソールタバコを吸うと性欲が減退する」と人から言われると「俺らは、それくらいでちようどええんじや」とうそぶいていた。

しかしそうするうちに、またしてもM本が「東京の大学生の間ではディスコでパーティーするのが流行ってるらしいで」と聞き込んできて、「じゃあ俺らもやろう」ということになった。

すでに同学年にも、そうした場所に入入りしていた生徒もいたが、我々の場合はまったく経験がなかったので、これは無謀きわまりない話である。

数人でグループを結成し、なにも知らないものだから結構有名ないいディスコに交渉に出掛け、ハラハラものだったが借り

切ることに成功した。それでパーティー券を印刷して売るのである。

当時はまだ、小ロット印刷を気軽に引き受けてくれる今の帆風のような便利な会社は見当たらず、券は町の印刷屋さんで印刷してもらった。

よく考えれば、私の出版界人としての原点ではないか。券には洒落たキャッチコピーのようなものが書かれていた記憶があり、まあそれは、私が書いたのだが、都合よくその文面は忘れてしまった。確か「君は背徳のミストレス」という一節があったのを覚えているが、わずかこれだけの切片を思い出しただけでも、息が止まりそうになる。

券は結構面白がってみんなが買ってくれて、第一回目のパーティーは割りとうまくいった。デイスコデビューーが自分たち主催

のパーティーとはなんとも無謀な話だったが、一生懸命、お客さんたちの様子を見よう見まねで振舞ったものである。利益はとんとんか、少し損が出た程度であつたと思う。調子に乗ってその後も続けた。

しかしこう書くと、いかに自分の高校時代が「リア充」であつたかを自慢しているように響くかもしれないが、実情はまったくそうではない。「性の暴走」とはまったく縁がなかつた。

M本は比較的センスよく服もいいものを着ていたが、みな服には苦勞していた。当時の社会は擬似選民意識を煽っていたと書いたが、選民といえは貴族。貴族の本場といえはヨーロッパであり、どちらかといえはあの当時の夜の世界は、ヨーロッパ

文化を志向していた（現代のクラブはアメリカを志向しているのでこの辺りも違う）。

というわけで、パーティー仲間のH口は、ヨーロッパ文化の華、タキシードで決めればモテるに違いないと考えたがお金がない。

しかし大阪中を駆け巡るとあるところにはあるもので、日本の橋の五階百貨で、タキシード上下とカマーバンドがセットになって3千円というブツを発見。それを購入し、後から買ったネクタイ（9千円）のほうが本体よりはるかに高いという主客転倒な服装でステージに現れた。

彼はその服装で、吐瀉物にまみれるのもかまわず泥酔した女性を介抱するなど奮闘したが、やはり3千円のタキシードだとパチンコ屋の呼び込みさんみたいにしが見えなかったのが敗因

だったのだろう。あまりモテたようには見えなかった。しかし実は私もほぼ同じような格好をしていたので、人のことは言えない。

余談だが、このH口からM本が借りたのが「電動しびれフグ一番」という機械で、これを返そうと学校に持ってきたところで教師に見つかって没収された。親が呼び出されて「おたくの息子さん、学校にこんなん持ってきてましたで」と差し出されたそうだが、後から親御さんに「人生でこんなに情けない日はなかった」と怒られたという。

アメフト部のM山はあまりに初体験に憧れたために、なにかとというと性行為、性行為（原文は英語）と口に出すのがクセになってしまい、文脈に関係なく「ああ、性行為、性行為」とつぶやくのが彼の個性になっていた。「どっこいしょ」という感

じで口に出すのである。こんなに悲しい口癖は、私のその後の人生でもまだ聞いたことがない。

私は、まず彼女がほしくて仕方がなかったが、やっとできたと思ったら、初デートのその日にフラれてしまった。とりあえず自分の、このなんともカッコ悪い状況をとりつくろいたく、焦るあまり、プラランタンなんばの屋上で夜景を見上げながら「まあ、俺みたい男は、たまにはフラれるのもエエわ」と、あらぬことをつぶやいて見せたものである。

次の日、学校に行くとM本に爆笑しながら「おまえ、たまにはフラれるのもエエわ、って言ったんやって」と話しかけられたときには死ぬかと思ったものである。

ちなみにこのプラランタンなんばというデパートはその後閉店し、今ではビツクカメラになっている。

なにか浮かれて、自分自身を見失っていたような日々で、あのころの私は本当に軽薄な、みつともない、くだらない男だった（今もだが当時は特にだ）。自分自身にもうんざりしていたが、周囲にもいろんな嫌なことがいっぱいあった。本当のところそれは男女の、生死に関わる領域の話すらあった。

こんな日々がずっと続くわけはなく、どこかでたまったツケを払わされるに違いないと、いつも心のどこかで感じていたが、そう感じるからこそまた、バカ騒ぎに明け暮れていた。

2年の春ぐらいから勉強など完全に、まったくせず偏差値は30台。桃山はマンモス校だったので一学年20クラス、生徒は820人と少しがいたが、私は確か819番をとったことがある。

学食で知らない生徒から「堀田君て桃山で一番アホなんやろ」と話しかけられたことがあった。ただ残念ながら、その上から目線で話しかけてきた張本人のK池が824番だったの
で、どうやら彼こそが、桃山の「アホチャンピオン」だったよ
うだ。

あのところ、ふとT屋という友人から「おまえ、自分の兄弟が
桃山に行きたいって言ったらどうする？」と聞かれたことがあ
る。彼にしてみればこの学校の自由さは、それはそれで無責任
だといふのである。「好きにしている。でも全部自分の責任だ
よ」と言われて、自由に生きていける人間なんて本当はいな
い。ましてや高校生で。だからこの校風は実は「自由という名
の牢獄」なのではないかと彼は感じているようだった。

工屋は大阪市内の出身で、私よりもリベラルな空気を吸って中学時代を過ごしていたのである。今で言うところの「進みすぎた民主主義」という問題意識を感じていたに違いない。

土俗的な風土の色濃い泉州出身の私にしてみれば、いかなる欠点があろうとも、刑務所みたいに管理の厳しい空間にくらべればその方がベターであったが、彼は彼で「こんなことがいつまでも続くはずはない」と感じていたのだろう。確かに、たとえ高校生であつても、私もその点では同じように感じていた。

実際、個人的にも当時のような生活はやっぱり続かなかつたし、日本社会もまた、迷走の時代を迎えることになった。

※今ではあの学校もなんと男女共学になつてしまい、根本から違つた学校になつているようだ。好き勝手なことを書いたがあくまでそれは、特定の年代に

関する筆者個人の主観であり、大多数の人にとっては普通の学校だったはずである。

(1969 バブル世代に生まれて／おわり)

生協の白石さんからのメッセージ

白石昌則——メッセージ

我が家は毎朝時計代わりにテレビを付けます。チャンネルは8、めざましテレビ。ほぼ定時で流れる天気予報や占いカウン
トダウン、今日のわんこ等。今日は早出だから、蝶ネクタイの
人のコーナーが終わる頃には家を出ないと、という具合に活用
しております。また、一定の時間になるとめざまし君が正確な
時刻を復唱してくれるので、慌ただしい朝の身支度に助かりま
す。

大地震の日以降、めざましテレビに限らず、時報の無い番組。そもそも、時刻を読めない通勤。コマースィナルは、専らA
C。ありがとウサギの、唇の厚み。そして日々報道される、震

災の被害状況。計画停電による交通機関の不通やコンビニの商品不足等、幾ばくかの不便を余儀なくされるとしても、震源地周辺の方々の苦しみや悲しみは計り知れませぬ。

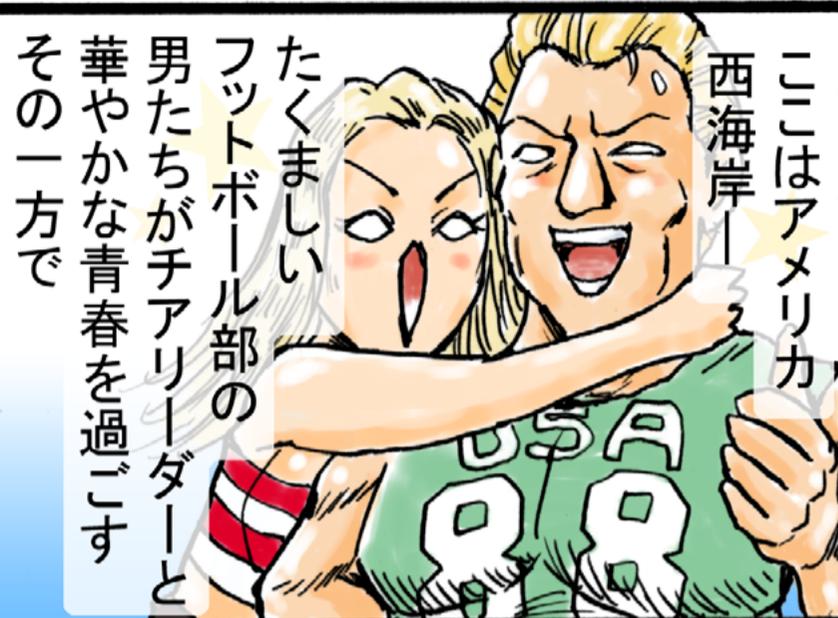
業務用に運用しているTwitterのアカウント宛に、「今年の漢字は『震』で決まってしまうのか」という、質問というよりは嘆きのような声が寄せられました。年末まで先は長いですが、1年を振り返るにあたり、今年はおそらく様々な思いが去来することと存じます。その頃には復興を遂げていることを願いつつ、読みは同じでも『新』が登用されていることを祈るばかりです。

白石昌則

大河ドラマ **サ!!キーク** 小宮政志



ギークのエド(仮名)は今日も一人自宅でパソコンに向かう



ここはアメリカ西海岸...
たくましいフットボール部の男たちがチアリーダーと華やかな青春を過ごすその一方で



他人とは違う自分の道を行く!それがアメリカの男さなあエド?

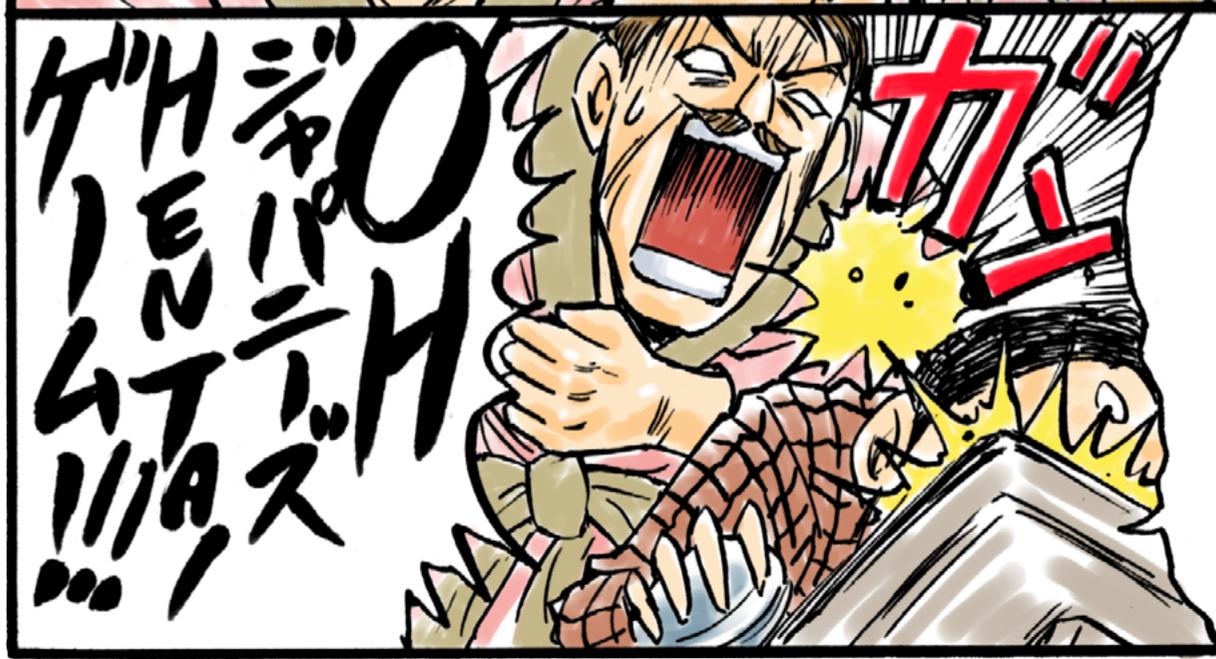
なあにマッチョなだけが男じゃないさ



あなたエドは大丈夫かしら?

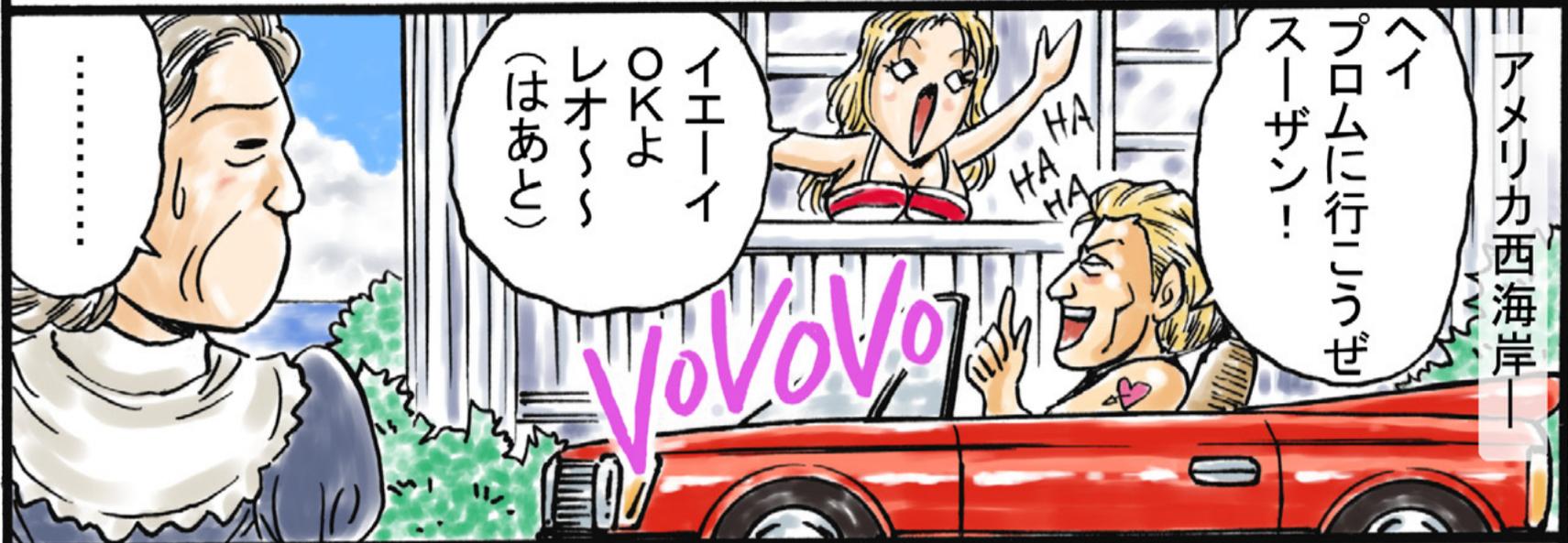
毎日パソコンに向かつてばかりで...

...ぶつ...ぶつ



「いけません」主人様... お肉が「ゲ」ちやいますう...
かわいいメイドさんだなあ
まあそこに座りなさい...

純愛巨編
サ・ギーク ~その愛~
 小宮政志



アメリカ西海岸
 ハイ
 プロムに行こうぜ
 スーザン!

イエーイ
 OKよ
 レオ
 (はあと)

VoVoVo



あなた…
 エドは
 スイートハートを
 探すつもりが
 ないのかしら?

なあに
 心配は無用さ
 ママ

むっ?
 そこにステキなガールが
 いるじゃないか!
 やるなエド!



……って
 ジェンガ
 ヤバ
 パニッ
 等身大ドリフト!!!

ハイスクールには
 ビッチしか
 いないんだよ
 ダデイ!!!

この本に関するご意見やご感想は、
こちらのフォームまでお願いいたします。

http://electricbook.co.jp/?page_id=12

トウモロロ 電子書籍「AIR「エア」」

2011年 3月24日発行

発行——合同会社電気本

編集人——堀田純司

編集——花田知子

デジタルプロダクション——アルフェイズ

アートディレクター——ナカノケン（アルフェイズ）

©denkibon air 2011

トウモロコシ 電子書籍「AIR」特別編集

発行 合同会社電気本 <http://electricbook.co.jp/>